

第一條 治安ヲ妨ケ又ハ人ノ身體財産ヲ害セントスルノ目的ヲ以テ爆發物ヲ使用シタル者及ヒ人  
ヲシテ之ヲ使用セシメタル者ハ死刑ニ處ス

第二條 前條ノ目的ヲ以テ爆發物ヲ使用セントスルノ際發覺シタル者ハ無期徒刑又ハ有期徒刑ニ  
處ス

第三條 第一條ノ目的ヲ以テ爆發物若クハ其使用ニ供ス可キ器具ヲ製造輸入所持シ又ハ注文ヲ爲  
シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四條 第一條ノ罪ヲ犯サントシテ脅迫教唆煽動ニ止ル者及ヒ共謀ニ止ル者ハ重懲役ニ處ス

第五條 第一條ニ記載シタル犯罪者ノ爲メ情ヲ知テ爆發物若クハ其使用ニ供ス可キ器具ヲ製造輸  
入販賣讓與寄藏シ及ヒ其約束ヲ爲シタル者ハ重懲役ニ處ス

第六條 爆發物ヲ製造輸入所持シ又ハ注文ヲ爲シタル者第一條ニ記載シタル犯罪ノ目的ニアラサ  
ルコトヲ證明スルコト能ハサル時ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ  
罰金ヲ附加ス

第七條 爆發物ヲ發見シタル者ハ直ニ警察官吏ニ告知ス可シ違フ者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金  
ニ處ス

第八條 本則ニ記載シタル重罪犯アルコトヲ認知シタル時直ニ警察官吏若クハ危害ヲ被ムラント  
スル人ニ告知ス可シ違フ者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第九條 本則ニ記載シタル重罪ノ犯人ヲ藏匿シ若クハ隱避セシメ又ハ其罪證ヲ湮滅シタル者ハ正  
犯ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第十條 本則ニ記載シタル重罪ヲ犯シタル者ニハ刑法第八十條及ヒ第八十一條ノ例ヲ用ヒス但十

六歳未満ニシテ是非ノ辨別ナキ者ハ刑法ニ從フ

第十一條 第一條ニ記載シタル犯罪ノ豫備隱謀ヲ爲シタル者ト雖モ未タ其事ヲ行ハサル前ニ於テ  
官ニ自首シ因テ危害ヲ爲スニ至ラサル時ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス第五條ニ  
記載シタル犯罪者モ亦同シ

第十二條 本則ニ記載シタル犯罪刑法ニ照シ仍ホ重キ者ハ重キニ從テ處斷ス

### 命令ノ條項違犯ニ關スル罰則

(明治二十三年九月法律第八十四號)

朕命令ノ條項違犯ニ關スル罰則ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

命令ノ條項ニ違犯スル者ハ各其ノ命令ニ規定スル所ニ從ヒ二百圓以内ノ罰金若ハ一年以下ノ禁錮  
ニ處ス

### 省令廳令府縣令及警察令ニ罰則ヲ附ス

(明治二十三年九月勅令第二百八號)

朕省令廳令府縣令及警察令ニ關スル罰則ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 各省大臣ハ法律ヲ以テ特ニ規定シタル場合ヲ除クノ外其ノ發スル所ノ省令ニ二十五圓以  
内ノ罰金若ハ二十五日以下ノ禁錮ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

第二條 地方長官及警視總監ハ其ノ發スル所ノ命令ニ十圓以内ノ罰金若ハ拘留ノ罰則ヲ附スルコ  
トヲ得

竊盜罪處罰方 (明治二十三年十月法律第九十九號)

朕竊盜ノ罪ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

- 第一條 家屋其他ノ建造物外ニ於テ犯シタル竊盜ニシテ未タ遂ケサル者又ハ己ニ遂ケタルモ其贓額五圓ニ滿サル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮ニ處ス
- 第二條 田野、山林、川澤、池沼、湖海ニ於テ其產物ヲ竊取セントシ又ハ牧場ニ於テ其獸類ヲ竊取セントシテ未タ遂ケサル者又ハ己ニ竊取シタルモ其贓額五圓ニ滿サル者亦同條ニ同シ
- 第三條 前二條ニ記載シタル贓額ハ犯罪ノ地及ヒ其時ニ於ケル物價ニ據リ裁判所之ヲ定ム但贓物現存モサルトキハ其中等ノ價額ニ據ル可シ

決闘罪處斷方 (明治二十二年十二月法律第三十四號)

朕決闘罪ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

- 第一條 決闘ヲ挑ミタル者又ハ其挑ニ應シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 第二條 決闘ヲ行ヒタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 第三條 決闘ニ依テ人ヲ殺傷シタル者ハ刑法ノ各本條ニ照シテ處斷ス
- 第四條 決闘ノ立會ヲ爲シ又ハ立會ヲ爲スコトヲ約シタル者ハ證人介添人等何等ノ名義ヲ以テス

富興行ヲ禁ス (明治元年十二月布告)

富興行ノ儀ハ兼テ御禁制ニ有之處近年諸國ニ於テ金錢融通ヲ名トシ或ハ社寺再建等ニ托シ興行致候向モ有之趣元來澆季ノ弊風僥倖ノ利ヲ以テ民心ヲ誘惑スルヨリ自然農工商共其職業ヲ惰リ往往是カ爲メニ家産ヲ破候者モ不少哉ニ相聞以ノ外ノ事ニ候斯御一新ノ折柄右様ノ所業殊ニ御趣意ニ相戻リ候儀ニ付更ニ嚴禁被仰出候事

富籤賣買者等處分 (明治十五年五月第二十五號布告)

明治元年十二月二十三日ノ布告ニ原ツキ富籤賣買ノ牙保幫助ヲ爲シ及富籤ヲ購買シタル者處分方左ノ通制定ス

- 第一條 凡富籤賣買ノ牙保若クハ幫助ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 第二條 凡富籤ヲ購買シタル者ハ其價ヲ拂ヒタルト未タ拂ハサルトナ問ハス二十日以上四月以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス他人ノ名ヲ借リテ購買シタル者及他人ヨリ譲リ受ケタル者亦同シ

第三條 第一條第二條ノ罪ヲ再犯シタル者ハ同條ニ定メタル刑期金額ノ二倍ニ處ス但初犯ニ科シタル刑期金額ニ下ルコトヲ得ス

第四條 富藏ニ關スル犯罪ヲ告發シタル者ニハ其徵スル所ノ罰金ノ半額ヲ給與ス

第五條 富藏ニ關スル罪ヲ犯シ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ其罪ヲ免ス

第六條 富藏ニ關スル犯罪ニ因テ得タル財物ハ之ヲ沒收ス

自首ニ因テ罪ヲ免シタル者ト雖モ財物沒收ハ仍ホ前項ニ依ル

### ◎商法ニ關スル破産者有罪破産區別

(明治二十三年十月法律第百一號)

朕商法ニ從ヒ破産ノ宣告ヲ受ケタル者ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

商法ニ從ヒ破産ノ宣告ヲ受ケタル者有罪破産ニ係ルトキハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

- 一 詐欺破産ヲ爲シタル者ハ輕懲役ニ處ス
- 二 過慮破産ヲ爲シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

### ◎刑法中官廳官署官吏及官ノ印文書免狀鑑札ニ關スル條項ハ公署公吏並公署ノ印文

### 書及免狀鑑札ニ適用ス (明治二十三年十月法律第百號)

朕公署、公吏並公署ノ印、文書及免狀鑑札ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

刑法中官廳、官署ニ關スル條項ハ公署ニ適用シ官吏ニ關スル條項ハ公吏ニ適用シ官ノ印、文書及免狀、鑑札ニ關スル條項ハ公署ノ印、文書及免狀鑑札ニ適用ス

### ◎憲兵職務ニ關シ又ハ其職務ニ對スル犯罪處斷方 (明治十五年十二月第七十三號布告)

憲兵卒其職務ニ關シ罪ヲ犯シタル時ハ官吏犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス  
憲兵卒ノ職務ニ對シ罪ヲ犯シタル者ハ官吏ニ對スル犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

### ◎軍港要港規則違犯者處分 (明治二十三年九月法律第八十三號)

朕軍港要港規則違犯者處分ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
明治二十三年法律第二號ニ依リ海軍大臣定ムル所ノ軍港要港規則ニ違ヒタル者ハ十一日以上一年以下ノ重禁錮又ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

### ●郵便聯合國郵便切手類保護法

(明治二十五年六月法律第三號)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル郵便聯合國郵便切手類保護法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

郵便聯合國郵便切手類保護法

第一條 郵便聯合條約國政府ノ發行スル郵便切手封皮葉書又ハ帶紙ヲ偽造變造シ又ハ其ノ情ヲ知テ之ヲ使用シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二條 已ニ貼用シタル郵便聯合條約國政府發行ノ郵便切手ヲ再ヒ貼用シタル者ハ二圓以上十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三條

第一條ニ記載シタル罪ヲ犯サムトシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第四條

第一條ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監禁ニ附ス

附則

第五條 此ノ法律ハ明治二十五年七月一日ヨリ施行ス

### ●軍人制服著用夜中無燈火乘馬ノ件

(明治十五年四月第二十二號達)

刑法第四百二十七條第三項夜中燈火ナクシテ車馬ヲ疾驅スル者ト有之候處軍人制服ヲ著用乘馬シタル者ハ右ノ限ニ無之候條此旨相違候事

### ●地方違警罪目發布届出方

(明治十四年八月第七十七號達)

刑法第四百三十號ニ依リ各地方ノ便宜ニ從ヒ違警罪目ヲ定メ發行シタルトキハ之ヲ主務ノ省ヘ届出ヘシ此旨相違候事

民事及刑事終

第十九類 民刑及行政訴訟並願

出訴期限規則 (明治六年十一月第三百六十二號布告)

金銀貸借ヲ始トシ物品賣買ヨリ其外種種ノ取引等ニ至ルマテ雙方ノ者互ニ受取渡ノ期限ヲ定メ條約ヲ結ビ置キタルニ一方ノ者其條約ヲ破リタル時ハ早速裁判所ヘ出訴イタシ不苦候處延期ノ勘辨ヲ加ヘ出訴ヲ見合候者モ有之是亦慈愛ノ人情ニテ尤ノ事ニ付早速出訴イタシ候トモ又ハ勘辨ヲ加ヘ候トモ人民ノ自由ニ任セ出訴期限ノ法則不相定候處右延期勘辨中數多ノ歲月ヲ過去リ出訴致シ候時ハ貸方借方請人證人ノ内死亡又ハ轉住又ハ失踪等ノ者モ有之事理曖昧ニ立至リ裁判上不都合不少候ニ付訴訟ノ事柄ニ因リ夫夫出訴期限ヲ定候條來明治七年一月一日ヨリ後ニ結ビタル條約期限ニテ右出訴期限ヲ過去リ出訴セサル者ハ自分條約ヲ取消シタル者ト看做シ受取ルヘキ者ハ受取ヘキ權利ヲ失ヒ引渡スヘキ者ハ引渡スヘキ義務ヲ免レ候事ト相定メ候ニ付若シ出訴致シ候トモ取上不致候此旨布告候事

出訴期限規則

第一條

- 一 學藝ノ授業料
- 一 旅籠料
- 一 運送賃
- 一 飲食料
- 一 手附金

- 一 商人互ノ賣掛金
- 一 職人ノ手間代金
- 一 日雇人ノ給料
- 一 請負金
- 一 芝居等ノ木戸錢又ハ棧敷錢等
- 一 男女藝者ノ揚代金

第二條

- 一 醫師ノ診診及藥料
- 一 授業師ヨリ門弟ニ給與シタル飲食料
- 一 商人ヨリ商人ニ非サル者ヘノ賣掛代金
- 一 一箇年期マテノ奉公人給料

第三條

- 一 期限ヲ定メタル貸附米金及ヒ利息アレハ其利息
- 一 期限ヲ定メタル預米金及ヒ利息アレハ其利息
- 一 家屋及ヒ土地ノ借貸
- 一 小作米金
- 一 證據金

- 一 敷金
- 一 物品ノ借貸又ハ損料
- 一 養育料
- 一 七箇年期マテノ奉公人給料
- 一 期限ナキ年金及ヒ一生涯ノ年金

右ハ五箇年限

第四條 條約證書中期限ナキ者ハ出訴ノ日ヲ期限ト看做シ候故何時出訴致シ候テモ苦シカラサル事

第五條 従前取結ヒタル條約ニテ明治六年十二月三十一日以前ニ條約期限ノ切レタル事件ハ右明治六年十二月三十一日ヲ條約ノ期限ト看做スヘシ又従前取結ヒタル條約ニテ其期限ノ明治七年一月一日後ニ及フ事件ハ條約期限ノ切レタル翌日ヨリ第一條第二條第三條ノ種類ニ從ヒ出訴ノ期限ヲ起算致スヘキ事但明治五年壬申第三百號布告第三條ニ定メタル規則ハ格別ナリトス

● 負債者失踪後ノ訴訟成例

(明治八年一月第六號布告)

民法裁判上負債者失踪後ノ訴訟ハ失踪後三十六箇月ノ時間ハ採上ケサル成例ニ有之候處本年三月一日ヨリ以後ハ左ノ通相改メ候條此旨布告候事

第一條 債主定約期限未滿内ニ負債者ノ失踪ヲ知ル時ハ定約滿期ニ至リ直ニ裁判所ヘ訴出ツヘキ事

第二條 債主未タ負債者ノ失踪ヲ知ラス定約滿期又ハ出訴期限將ニ盡ントスルヲ以テ裁判所ヘ出

訴シ裁判所ノ與書ヲ以テ預備者ニ掛合始メテ其失踪ノ事ヲ知ル時ハ右與書訴狀ヲ再呈シ其旨届出ツ可キ事

第三條 前條條ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀採上ケ直ニ失踪者所管ノ戸長ヘ申付失踪ノ年月日ヲ訊明シタル上債主差出シタル證書ニ預備者何年何月何日家出ノ未行衛相分ラサルニ付追テ本人見當ルカ又ハ三十六箇月ノ滿月後跡相續ヲ爲ス可キ者ニ掛リ此裏書證書ヲ以テ再訴致ス可キ旨ヲ記載シ訴狀下戻ス可キ事

第四條 債主ニ於テ前條ノ裏書證書ヲ受取置キタル上ハ本人見當リ又ハ搜索三十六箇月ノ時限ハ明治六年(十一月)第三百六十二號布告出訴期限ノ限内ニハ加算致ササル事

民事上告豫納金手續 (明治十年二月第十九號布告)

明治八年(五月)第九十一號布告大審院諸裁判所職制章程同年(同月)第九十三號布告控訴上告手續別冊ノ通改正候條此旨布告候事(大審院諸裁判所職制章程ハ官制改革ノ爲メ消滅ニ歸セリ)但巡同裁判所規則判事職制通則ハ删除候事

(別冊ノ内)

第十六條 上告者ハ其上告狀ヲ添テ金十圓ヲ上告裁判所ニ預クヘシ若シ其金高ヲ預ケサルトキハ上告ヲナスコトヲ得ス(二十三年法律第五十號第十二條ヲ以テ大審院トアルテ上告裁判所ト改ム)

- 第一 若シ上告ヲ取上ケサルトキハ其預リ金ヲ没入ス
- 第二 若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタル時ハ預リ金ヲ還付ス

第三 若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ斥ケテ原裁判ヲ破毀セサル時ハ預リ金ヲ没入シ又訴訟入費規則ニ照シテ被告人ノ費用ヲ償ハシム(被告人トハ上告者ノ相手方ヲ云)

違警罪即決例 (明治十八年九月第三十一號布告)

明治十四年(九月)第四十四號布告及ヒ同年(十二月)第八十號布告ヲ廢止シ違警罪即決例別紙ノ通制定ス

(別紙)

違警罪即決例

第一條 警察署長及ヒ分署長又ハ其代理タル官吏ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ即決スヘシ但私訴ハ此限ニ在ラス

第二條 即決ハ裁判ノ正式ヲ用ヒス被告人ノ陳述ヲ聽キ證據ヲ取調ヘ直チニ其言渡ヲ爲スヘシ又被告人ヲ呼出スコトナク若クハ呼出シタリト雖モ出廷セサル時ハ直チニ其言渡書ヲ本人又ハ其住所ニ送達スルコトヲ得

第三條 即決ノ言渡ニ對シテハ違警罪裁判所ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得但正式ノ裁判ヲ經スシテ直チニ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第四條 即決ノ言渡書ニハ被告人ノ氏名年齢身分職業住所犯罪ノ場所年月日時罪名刑名及ヒ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得ヘキ期限並ニ其言渡ヲ爲シタル警察署年月日警察官ノ氏名ヲ記載スヘシ

第五條 正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ即決ノ言渡ヲ爲シタル警察署ニ申立書ヲ差出スヘシ但其期限

ハ第二條第一項ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヨリ三日内第二項ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

第六條 警察署ニ於テ前條ノ申立ヲ受ケタル時ハ二十四時内ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致スヘシ

第七條 第五條ニ定メタル期限内ニ正式ノ裁判ヲ請求セサル時ハ即決ノ言渡ヲ以テ確定ノモノトス

第八條 科料拘留ノ言渡ヲ爲シタル時必要ト認ムル場合ニ於テハ後ノ數條ニ定メタル處分ヲ爲スコトヲ得

第九條 科料ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其金額ヲ假納セシムヘシ若シ納メサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シテ之ヲ留置ス其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

第十條 拘留ノ言渡ヲ爲シタル時ハ一日ヲ一圓ニ折算シ其刑期ニ相當ノ金額ヲ保證トシテ差出サシムヘシ若シ差出ササル者ハ第五條ニ定メタル期限内之ヲ留置ス但刑期五日内ナル時ハ其日數ニ過クルコトヲ得ス

第十一條 保證金ヲ差出シタル者ハ刑ノ言渡確定シタル後直チニ出廷シテ其執行ヲ受クヘシ若シ出廷セサル時ハ保證金ヲ没入シテ本刑ニ換フ

第十二條 留置シタル者正式ノ裁判ヲ請求シ因テ呼出狀ノ送達アリタル時ハ直チニ留置ヲ解クヘシ

第十三條 留置ノ日數ハ一日ヲ一圓ニ折シテ科料ノ金額ニ算入シ又ハ拘留ノ刑期ニ算入スヘシ

### 商船内犯罪取扱規則

(明治十四年十二月布告第六十五號)

商船内犯罪取扱規則別紙ノ通制定ス

(別紙)

商船内犯罪取扱規則

第一條 何人タリトモ商船内ニ於テ輕罪重罪アルコトヲ認知シ又ハ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ船長ニ告訴發テ爲スコトヲ得

第二條 船長告訴發テ受ケタル時又ハ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ其事件ニ付假ニ訊問檢證ノ處分ヲ爲シ且證憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ集取シ調書ヲ作ルヘシ但調書ヲ作ルコト能ハサル時ハ第三條ニ記載シタル官吏ニ其申立ヲ爲スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ立會人二名以上アルヲ要ス

第三條 船長ハ證憑及事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ取纏メ被告人ト共ニ該船舶碇泊又ハ着港ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ引渡スヘシ若外國ノ港埠ニ着シタル時ハ其地駐劄領事ニ之ヲ引渡スヘシ

### 清國並朝鮮國駐在領事裁判規則

(明治二十一年十月勅令第七十一號)

朕清國並朝鮮國駐在領事裁判規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

清國並朝鮮國駐在領事裁判規則

第一條 清國並朝鮮國駐在日本帝國領事ハ其管轄内ニ在ル日本人民ニ對スル民事訴訟及ヒ公訴私



訴ニシテ〔治安裁判所〕〔違警罪裁判所〕始審裁判所〔輕罪裁判所〕ノ權限ニ屬スルモノヲ審判スルノ權ヲ有ス但〔治安裁判所違警罪裁判所〕ノ權限ニ屬スル訴件ニ付領事ノ爲シタル裁判ハ終審ノ裁判ナリトス

第二條 豫審判事ノ職務ハ領事之ヲ行ヒ檢察官ノ職務ハ副領事警察官若クハ領事館書記生之ヲ行フ

第三條 裁判所書記ノ職務ハ領事館書記生若クハ其他館員之ヲ行フ

第四條 輕罪ニ付テハ豫審ヲ爲ササルモノトス

第五條 重罪ニ關スル豫審ノ手續及ヒ豫審終結ノ旨渡ニ付故障ヲ爲スコトヲ許サス但豫審終結ノ旨渡ニ對シテハ直ニ上告ヲ爲スコトヲ得

第六條 〔治罪法〕ニ定ムル忌避回避ノ規則ハ之ヲ適用セス

第七條 民事訴訟及ヒ私訴ノ裁判ニ對スル控訴ハ長崎控訴院重罪ニ係ル公判ハ長崎〔重罪裁判所〕ノ管轄トス

第八條 民事訴訟及ヒ私訴ノ裁判ニ對スル控訴上告ハ本人若クハ〔代理人〕ノ出廷ヲ要セス書面ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得禁錮ノ旨渡ヲ除クノ外公訴ノ裁判ニ對スル控訴モ亦同シ

第九條 此規則ニ於テ領事ト稱スルハ總領事領事又ハ其代理及ヒ委任狀ヲ有シタル副領事又ハ其代理ヲ云フ

### ●樺戶集治監囚人輕罪以下治罪手續

(明治十五年三月第十六號布告)

樺戶集治監ノ囚人(假出獄免幽閉ノ者トモ)罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ但重罪ハ國館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

### ●空知集治監囚人輕罪以下治罪手續

(明治十五年八月第四十一號布告)

空知集治監ノ囚人(假出獄免幽閉ノ者トモ)罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ但重罪ハ國館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

### ●釧路集治監囚人輕罪以下治罪手續

(明治十八年十二月第四十二號布告)

釧路集治監ノ囚人(假出獄免幽閉ノ者トモ)罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ但重罪ハ根室重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

### ●重罪控訴豫納金規則 (明治二十三年二月法律第七號)

朕重罪控訴豫納金規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

重罪控訴豫納金規則

第一條 重罪ノ刑ノ旨渡ヲ受ケタル者控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金二十圓ヲ豫納スヘシ

第二條 重罪ノ刑ノ旨渡ヲ受ケタル者貧困ニシテ保證並チ豫納スル能ハサルトキハ控訴ノ申立ト

同時ニ保證金ノ免除ヲ請求スルコトヲ得

第三條 保證金ノ免除ヲ請求シタル者ハ其請求ヲ爲シタル日ヨリ十四日內ニ控訴ノ趣意書ト共ニ裁判費用支辨ノ資力ナキコトヲ證スヘキ住居地市町村長ノ證明書ヲ差出スヘシ但其市町村役場三里以外ニ在ルトキハ「治罪法第十九條」ニ規定シタル猶豫ヲ與フ

第四條 第二條ニ記載シタル書類ハ訴訟ニ關スル一切ノ書類ト共ニ第一審裁判所ノ檢事ヨリ控訴院ノ書記課ニ之ヲ送致スヘシ

第五條 控訴院ハ檢事ノ意見ヲ聽キ保證金免除請求ノ當否ヲ決定スヘシ但控訴ノ事由ナシト認ムルカ又ハ事由アルモ實益ナシト認ムルトキハ免除ヲ與ヘサルモノトス

第六條 保證金ノ免除ナキトキハ控訴ノ申立ハ其效ナキモノトス

第七條 被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ第一條ノ保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セシムヘシ

●輕罪控訴豫納金規則

(明治十八年一月第二號布告)

明治十四年(十二月)第七十四號布告ヲ廢シ自今輕罪ニ係ル控訴ハ左ノ規則ニ從ヒ之ヲ爲スコトヲ得但「治罪法」中此規則ニ牴觸スル條件ハ當分ノ内施行セス

第一條 (明治二十三年法律第四十七號ヲ以テ削除)

第二條 (同上)

第三條 被告人公訴ニ關シ控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金十圓ヲ豫納スヘシ (明治二十三年法律第四十七號ヲ以テ本條改正)

第四條 被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ前條保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セシムヘシ

第五條 (同上法令ヲ以テ本條削除)

●罰金及追徴ニ係ル上告豫納金ノ件

(明治十九年六月勅令第四十六號)

朕罰金及追徴ニ係ル上告豫納金ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

罰金及追徴ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲サントスルトキハ其罰金及追徴金ノ十分ノ一ニ當ル金額ヲ上告趣意書ニ添へ原裁判所書記局ニ預置ク可シ否ラサレハ上告ヲ爲スコトヲ得ス若シ上告不當ナルトキハ大審院ニ於テ其全部又ハ幾分ヲ没入スルノ言渡ヲ爲スヘシ

●刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責付スルノ手續

(明治十四年九月布告第四十七號)

刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責付スルニハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨布告候事

第一條 被告人ヲ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷セシムヘキノ證書ヲ其裁判所書記局ニ差出サシムヘシ

第二條 責付中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消スヘシ

### ◎保釋責付中ノ被告人取締方心得ノ件

(明治十六年十一月司法省達丙第八號)

保釋責付中ノ被告人取締方心得ノ儀ニ付左ノ通各裁判所へ相違候條此旨爲心得相違候事

保釋責付ヲ得タル被告人ハ左ノ取締條件ニ服從セシム可キ儀ニ付キ保釋責付ヲ爲スノ際其旨ヲ被告

告人ニ豫知セシム可シ但其言渡書ノ紙尾ニ記載印刷スルモ妨ケナシ

第一條 治罪法第二十一條ニ從ヒ假住所ヲ定メ屆置ク可キコトハ言ヲ待タス其裁判所ノ管轄地外ニ旅行スルコトヲ得ス若シ已ムヲ得サル事由アルトキハ其旨ヲ檢事ニ申立テ許可ヲ受ク可シ

第二條 裁判所ノ管轄地内ト雖モ住所外ニ於テ一泊以上滞在スルトキハ滞在ノ場所ヲ其家族又ハ同居人ニ通知シ置ク可シ

若シ同居人アラサルトキハ其住所ノ地ノ戸長ニ屆置ク可シ

第三條 代官人辯護人又ハ代人トシテ法廷ニ出頭シ其他議會集會等公然ノ場所ニ參會スルコトヲ得ス

第四條 治罪法第二百一十一條ニ適當スル者及ヒ前數條ノ規則ニ背キタル者ハ治罪法第二百十六條第二項ニ從ヒ保釋ヲ取消ス可シ其實付ヲ受ケタル者モ亦同シ

### ◎犯罪又ハ犯則ニ依リ沒收ノ物件地方廳へ

#### 引繼處分法 (明治十八年十一月太政官達第六十三號)

裁判所ニ於テ犯罪又ハ犯則ニ依リ沒收シタル物件ハ自今都テ地方廳ニ引繼地方廳ニ於テ便宜之ヲ賣却スヘシ此旨相違候事

### ◎犯罪又ハ犯則ニ依リ沒收シタル物件取扱手續

(明治十九年四月大藏省訓令第三號)

明治十八年十一月太政官第六十三號達犯罪又ハ犯則ニ依リ沒收シタル物件ハ左ノ手續ニ據リ取扱フヘシ

第一項 裁判所ヨリ沒收物件引渡ノ通知ヲ得タルトキハ其物件受取ノ手續ヲ爲シ物件ノ性質ニ從ヒ得失ヲ量リ其廳ニ取寄セ又ハ其所在地ノ戸長ニ保管セシムヘシ

第二項 沒收ノ物件ハ裁判所ヨリ受取タル後三箇月以内ニ於テ公賣ニ付スヘシ但公賣ノ場所ハ物件所在ノ地ニ限ラス總テ適當ノ地ヲ選定スルモノトス

第三項 沒收物件中官廳ノ烙印アルモノハ公賣ニ付スル前其烙印ヲ削除スヘシ

第四項 公賣ノ方法ハ入札拂若クハ競賣ニ據ルヘシ

第五項 沒收ノ物件公賣ニ付スルモ買受人ナキカ若クハ代價相當ノ價格ニ達セサルトキハ公賣ヲ停止シ爾後三箇月以内ニ於テ更ニ公賣ニ付スヘシ

第六項 沒收物件中毀損廢敗ニ係リ若クハ物品輕微ニシテ公賣ニ付スルモ價值ナシト認ムルモノ或ハ運搬費置場敷料ヲ要シ公賣スルモ其得失相償ハサルモノ或ハ運搬費置場敷料ヲ要シ公賣ス

ルモ其得失相償ハサルモノ或ハ第五項期限内ニ於テ公賣ニ付スルモ買受人ナク若クハ代償不相當ニシテ公賣ヲ停止シタルモノハ適宜處分スヘシ

第七項 沒收物件中其物品取扱上特ニ成規アルモノハ各主管廳ノ指揮ニ據リ之ヲ處分スヘシ

### ●偽證又ハ贋造文書沒收方等

(明治十二年七月司法省達丙第十號)

凡ソ偽證或ハ公私文書ノ贋造ニ係ルコト發覺シ刑事裁判ヲ經シ上ハ其文書ハ素ヨリ其裁判所ニ没入シ置クヘシト雖モ或ハ其文書ノ證憑ナキヲ以テ他ニ訴訟ヲ起スヘキ途方ヲ失ヒ冤枉者ナキヲ保シ難シ故ニ其文書ヲ没入スルニ當リ其文書ノ寫ヲ請求スル者ニハ必ス之ヲ與フヘシ但裁判所ニ於テ該書類ニ消印ヲ押印スル如キノ慣習ハ廢止トス  
各裁判所ニ於テハ前條文書ノ寫ヲ以テ訴出ルモノアラハ尋常ノ證據ト見ルハ勿論ト雖モ若他ノ裁判ニ在リテハ一應其没入セシ所ノ裁判所ヘ照會シテ其没入セシハ果シテ信ナルヤヲ認メシ上裁判ヲ與フヘシ

### ●犯罪ノ用ニ供シ及犯罪ニ因テ得タル物件

所有主ニ還付方 (明治十五年五月司法省達丙第二十號)

犯罪ノ用ニ供シタル物件及ヒ犯罪ニ因テ得タル物件ハ本案ノ裁判ヲ言渡ス迄所有主ニ發見セサル時ハ刑法第四十三條第四十四條ニ從ヒ其本案ノ裁判ト共ニ沒收ノ言渡ヲ爲スヘシト雖モ右ノ物件

ハ之ヲ其裁判所所在ノ地及ヒ犯罪ノ地ニ公告シ一年間(公告シタル日ヨリ起算ス)ニ所有主ヲ發見シタル時ハ檢察官ヨリ直ニ之ヲ還付スヘシ此旨爲心得相違候事但檢察官ニ於テ保存ス可カラサル物件又ハ保存スルニ付費用ヲ要スヘキ者ト思料スル時ハ公賣ノ處分ヲ爲シタル上其代金ヲ保存シ置クヘシ

### ●犯罪ノ用ニ供シ又ハ犯罪ニ因テ得タル物件

其所有主ヘ假ニ下渡方

(明治十五年六月司法省達丙第二十四號)

犯罪ノ用ニ供シ又ハ犯罪ニ因リ得タル物件ハ轉讓シテ他人ノ手ニ在リ及ヒ沒收スヘキモノ若クハ證憑ノ爲メ官ニ保存シ置クヲ必要トスルモノヲ除ク外ハ判官檢察官司法警察官ニ於テ實際ノ便宜ニ因リ裁判言渡アルマテ其所有主ヘ假ニ之ヲ下渡シ置クコトヲ得ヘシ此旨爲心得相違候事

### ●陸海軍治罪法ト刑事訴訟法ト交渉處分法

(明治十八年五月第十二號布告)

「普通治罪法」陸軍治罪法海軍治罪法交渉ノ件處分法左ノ通制定ス但從前ノ成規中本則ニ牴觸スルモノハ當分施行セス

第一條 常人ニシテ陸軍刑法若クハ海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ普通裁判所ニ於テ之ヲ審判ス但刑ノ執行ハ普通ノ規則ニ從フ

第二條 軍人常人共ニ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ軍人ハ軍法會議ノ判決ニ付シ常人ハ普通裁判所ノ公判ニ付ス軍術ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ常人ハ審問ノ上證據書類ト共ニ之ヲ管轄ノ普通裁判所檢事ニ送致シ普通裁判所ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ軍人ハ審問ノ上證據書類ト共ニ之ヲ被告人ノ所屬長若クハ陸海軍檢察官ニ送致スヘシ

第三條 敵前軍中臨戰合圍ノ地若クハ海軍諸用ニ供スル船舶ニ在テ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ常人ト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得但戒嚴令第十一條第十二條ニ掲ケルモノハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スヘシ

第四條 軍法會議ト普通裁判所トノ管轄違ニ付テハ軍法會議又ハ普通裁判所ノ言渡ニ對シ「普通治罪法」ニ定メタル手續ニ從ヒ大審院ニ上告スルコトヲ得但軍法會議ノ言渡ニ對シ上告スルハ被告人ニ限ルヘシ

第五條 多衆ノ軍人常人團毆殺傷其他疑獄ニ係ル罪ヲ犯シタルトキハ軍官法司會同審問スルコトヲ得

第六條 軍法會議ト普通裁判所トヲ問ハス既ニ確定シタル裁判效力ハ互ニ之ヲ侵スコトヲ得ス

● 沖繩縣人徒流刑ニ處セラレタルモノノ發配及取扱方 (明治十六年一月第四號達)

沖繩縣人民ニ限リ徒刑流刑ニ處セラレタルモノハ同縣下八重山島ニ發配スルヲ得ヘシ此旨相達候事但囚人取扱方ハ舊慣ニ因リ「沖繩縣令」之ヲ管理スヘシ

● 司法官吏ヨリ巡查及兵員要求手續

(明治十四年九月第八十二號達)

司法官吏ヨリ巡查及兵員ヲ要求使用スルニハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨相達候事

第一條 裁判官檢察官及司法警察官「治罪法」ニ從ヒ檢證及ヒ物件差押其他職務ヲ行フニ當リ必要ナル時ハ警察署又ハ憲兵屯營ニ照會シテ巡查又ハ憲兵卒ヲ使用スルコトヲ得但事機緊急ナル時ハ直チニ之ヲ使用スルコトヲ得

第二條 前條ノ場合ニ於テ事緊急重要ニ涉ル時ハ直チニ「鎮壓」又ハ分營ニ照會シテ兵力ヲ要求スルコトヲ得

● 刑事ノ控訴及上告ニ由リ被告人ニ屬スル費用支辨方 (明治二十三年十月內務省令第五號)

重罪輕罪ノ公訴ノ判決ニ對シ控訴アリタル場合又ハ上告ニ由リ他ノ裁判所ニ移スノ言渡アリタル場合ニ於テ被告人勾禁中ノ費用並ニ裁判確定ノ後囚人ニ係ル費用ハ總テ最前裁判言渡アリタル地方ノ監獄費ヲ以テ支辨シ其費額ハ一人一日金二十錢トス但裁判確定後ノ囚人ハ瀛車又ハ瀛船ニ依リ最モ押送ニ便ナル地方ニ在テハ原地方廳ノ請求ニ依リ送還スルコトヲ得此場合ニ於テハ護送官吏ノ旅費及囚人ニ屬スル費用ハ請求地方ノ負擔トス

間接國稅犯則者處分法

(明治二十三年九月法律第八十六號)

朕間接國稅犯則者處分法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
間接國稅犯則者處分法

第一章 犯則事件取調

第一條 間稅官吏間接國稅ニ關スル犯則者アルコトヲ認知シ若ハ思料シタルトキハ其家宅倉庫其他ノ場所ニ立入り證憑集取ヲ爲スコトヲ得

犯則者他人ノ家屋倉庫其他ノ場所ニ犯則ニ係ル物件ヲ藏匿スト思料スルトキハ間稅官吏其場所ニ立入り證憑集取ヲ爲スコトヲ得

間稅官吏證憑集取ヲ爲スコトキハ間稅官吏タルノ證票ヲ攜帶スヘシ

第二條 前條ノ場合ニ於テ犯則者若ハ犯則ニ係ル物件其「間稅官署」ノ管轄區域外ニ在ルトキハ其地ノ「間稅官署」ニ證憑集取ヲ囑托スルコトヲ得

第三條 間稅官吏ハ犯則事件ノ搜查ニ關シ必要ナリト認ムルトキハ警察官吏ヘ援助ヲ求ムルコトヲ得

第四條 間稅官吏證憑集取ヲ爲スコトキハ本人若ハ其同居ノ親族又ハ傭人ヲシテ立會ハシムヘシ本人及同居ノ親族傭人俱ニ其家ニ在ラサルトキハ警察官吏又ハ市町村吏員若ハ鄰佑二名以上ヲ立會ハシムヘシ

第五條 間稅官吏家宅搜索及物件差押ヲ爲スハ日出ヨリ日没マテノ間ニ限ルヘシ但現行犯ノ場合又ハ店舗ヲ公開シ商品ヲ店頭ニ展列シタル時間ニ於テハ此限ニアラス

第六條 間稅官吏臨檢ヲ爲スニ際シ犯則者及證人ノ陳述ヲ聽クコトヲ必要トスルトキハ之ヲ尋問スルコトヲ得

第七條 間稅官吏證憑集取ノ處分ヲ爲スニ由リ犯則物件ヲ發見シタルトキハ之ヲ差押ヘテ封印若ハ認印ヲ爲シ差押目錄ヲ作り市町村吏員又ハ鄰佑若ハ本人ニ之ヲ預ケ其貯リ證ヲ徵スヘシ若シ之ヲ「間稅署」若ハ「間稅分署」ニ送致シタルトキハ其領收證ヲ取置クヘシ

差押物件ヲ市町村吏員若ハ鄰佑ニ預ケ又ハ「間稅署」若ハ「間稅分署」ニ送致シタルトキハ其差押目錄ノ謄本ヲ本人ニ交付スヘシ

第八條 關稅官吏ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス其場所ニ出入スルコトヲ禁スルヲ得  
第九條 間稅官吏證憑集取ノ處分ヲ爲シタルトキハ自ラ其調書ヲ作り之ヲ本人ニ讀聞カセ本人ト共ニ署名捺印スヘシ本人署名捺印セス又ハ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記スヘシ調書ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ

- 一 本人ノ氏名年齢身分職業住所
- 二 犯則事件發見ノ手續及日時場所
- 三 事實ノ尋問ヲ爲シタルトキハ其尋問及陳述
- 四 差押ヘタル證據物件及種類數量並ニ本人ノ物件ニ對スル辨解

第二章 犯則者ノ處分

第十條 間稅官吏犯則事件ノ取調ヲ終リタルトキハ處分請求書ヲ作り一切ノ書類物件ト共ニ之ヲ管轄「間稅署長」又ハ「分署長」ニ差出スヘシ

第十一條 「間稅署長」又ハ「分署長」ハ犯則事件ノ調書及其他ノ書類ヲ調査シ犯則ノ心證ヲ得タル

トキハ其犯則ト認ムル理由ヲ明示シ罰金ニ該ル者ハ其罰金ニ相當スル金額沒收ニ該ル者ハ沒收スヘキ物品並ニ第十六條ノ費用ヲ其醫ニ納付スヘキ通告書ヲ作り之ヲ本人ニ送達スヘシ  
前項ノ處分ハ罰金及沒收品ノ價額合計三十圓ヲ超エサルトキニ限り「間稅分署長」之ヲ爲シ其他ハ「間稅署長」之ヲ爲スモノトス

第十二條 犯則者前條ノ通告書ヲ受ケ通告ノ旨ヲ承諾スルトキハ七日内ニ履行スヘシ此期限ヲ過キ履行セサル者ハ「間稅署長」若ハ「分署長」ヨリ管轄裁判所ニ告發スヘシ

第十三條 犯則者通告ノ旨ヲ履行シタルトキハ同事件ニ付刑事又ハ民事ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス

第十四條 間稅官吏犯則事件ヲ覺知シタル場合ニ於テ本人ノ住所分明ナラス若ハ犯則事件禁錮又ハ拘留ニ該ルモノト認ルトキ又罰金若ハ税金ヲ完納スルノ資力ナキ者ト認ムルトキハ該事件ヲ管轄裁判所ニ告發スヘシ

犯則者犯則物件ヲ遺留シテ逃走シタルトキハ間稅官吏其物件ヲ差押ヘテ調書ヲ作り告發ノ手續ヲ爲スヘシ

第十五條 間稅官吏ハ左ノ場合ニ於テハ犯則者ヲ管轄裁判所ニ引致シ其事件ヲ告發スヘシ  
一 犯則者逃走ノ恐アルトキ  
二 證據湮滅ノ恐アルトキ

第三章 雜則

第十六條 書類送達費及差押物件ニシテ本人ニ還付スヘキモノノ運搬保管若ハ保存ニ要スル費用ハ犯則者之ヲ負擔スヘシ

第十七條 「間稅署長」若ハ「間稅分署長」ハ差押物件廢敗其他損失ノ虞アルトキハ本人ノ承諾ヲ得

テ之ヲ公賣シ其代金ヲ供託スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ其差押物件還付申渡ヲ爲シタルトキハ其代金ヲ還付スヘシ

第十八條 此法律ニ於テ間稅官吏トハ間接國稅ノ検査若ハ徵收ニ從事スル官吏ヲ謂フ

第十九條 間稅官吏ハ直接ト間接トヲ問ハス沒收物件又ハ差押物件ヲ買受クルコトヲ得ス

第二十條 此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行ス但北海道沖繩縣及東京府管轄小笠原島伊豆七島ニハ當分ニテ施行セス

間接國稅犯則者處分ニ關シ書類送達方

(明治二十三年十月勅令第二百三十二號)

朕間接國稅犯則者處分ニ關スル書類送達ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 間接國稅犯則者處分ニ關シ書類ヲ送達スルニハ使丁ヲシテ之ヲ送達セシムヘシ但送達ヲ受ケヘキ者遠隔ノ地ニ在ル場合ニ於テハ書留郵便ヲ以テ送達スルコトヲ得

第二條 使丁ハ送達書類ヲ本人ニ渡スヘシ本人不在ナルトキハ同居人ニ渡スヘシ  
使丁ハ送達書類ヲ受取りタル者ヨリ領收書ヲ取りテ「間稅署」若ハ「間稅分署」ニ差出スヘシ若シ受取人領收書ヲ記スルコト能ハサルトキハ使丁代テ之ヲ記シ其旨ヲ附記シテ捺印セシムヘシ

第三條 送達ヲ爲スニ當リ本人不在ニシテ且本人ニ代リテ受取ルヘキ者アラサルトキハ送達書類ヲ其地ノ市町村長ニ渡シ市町村長ハ其書類ヲ受取人ニ渡シ其領收書ヲ取りテ「間稅署長」若ハ「間稅分署長」ニ差出スヘシ

第四條 市町村長ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スモ受取人ニ渡スコト能ハサルトキハ其旨ヲ「間稅署長」

若ハ「間稅分署長」ニ報告スヘシ

### 間接國稅犯則者處分法施行細則

(明治二十三年十一月大藏省令第三十一號)

間接國稅犯則者處分施行細則左ノ通相定ム

間接國稅犯則者處分法施行細則

第一條 間接國稅犯則者ノ處分ハ其犯則發覺ノ地ノ「間稅官署」ニ於テ之ヲ爲スヘシ但犯則ノ地ト犯則發覺ノ地ト其管轄官署ヲ異ニシ犯則ノ地ニ於テ處分スルヲ便宜ナリト爲ストキハ之ヲ犯則ノ地ヲ管轄スル「間稅官署」又ハ「分署」ニ移スヘシ

第二條 數箇ノ「間稅官署」ノ管轄區域内ニ於テ同一ノ犯則ヲ爲シタルモノアルトキハ最初ニ之ヲ發覺シタル地ノ「間稅官署」ニ於テ之ヲ處分スヘシ

第三條 一稅則ニ付數罪俱發シタル場合ニ於テ其數罪中ノ一箇ノ罪若シ「國稅署」ノ處分權限ニ屬スルトキハ其他ノ罪モ「間稅署」ニ於テ併セテ之ヲ處分スヘシ

第四條 間稅官吏犯則事件ノ證據集取ヲ爲スニ際シ若クハ「間稅署長」又ハ「分署長」ニ於テ犯則事件ヲ調査スルニ當リ其事件ニ牽連スル他ノ普通犯罪ヲ發覺シタルトキハ其普通犯罪ハ管轄裁判所ニ告發シ其犯則事件ハ刑法第一編第七章ノ數罪俱發ノ例ヲ用フルモノヲ除ク外處分法ノ定ムル所ニ從ヒ處分ヲ爲スヘシ

第五條 處分法第十一條第二項ノ合計價額ハ法律ニ於テ罰金ノ額ヲ一定セサルモノハ其罰金ノ最多額ヲ以テ之ヲ算シ沒收品ノ價額ハ間稅官吏ノ見積リ價額ヲ以テ之ヲ管スヘシ

第六條 間稅官吏ハ處分請求書ヲ差出シタル後ト雖モ若シ事實參考トナルヘキ事物ヲ發見シタルトキハ直チニ之ヲ「間稅署長」又ハ「分署長」ニ差出スヘシ

第七條 間稅官吏ハ犯則物件ニ付鑑定ヲ必要ナリト思料シタルトキハ相當ノ者ヲシテ鑑定ヲ爲サシメ其鑑定書ヲ徴スヘシ

第八條 間稅官吏犯則事件ノ搜查ニ著手シタルトキハ該事件罪トナラス若クハ證據不充分ナリト思料シ處分請求ヲ爲ササル場合ト雖モ其取調書類ニ意見ヲ附シ直チニ「間稅分署長」ニ差出スヘシ

第九條 犯則處分ニ關シ間稅官吏ヨリ「間稅署長」ニ差出スヘキ書類ハ所屬「分署長」ヲ經由スヘシ第十條 「間稅署長」又ハ「分署長」ハ處分法第十一條ニ據リ犯則事件ヲ調査スルニ當リ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ發見シタルトキハ間稅官吏ヲシテ之ヲ集取セシムヘシ

第十一條 「間稅署長」又ハ「分署長」ハ處分法第十一條ニ據リ犯則事件ヲ調査スルモ犯則ノ心證ヲ得サルトキハ處分請求書ヲ棄却シ差押物件ハ之ヲ本人ニ還付スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ處分請求書ヲ棄却シタル旨ノ通告書ヲ作り之ヲ本人ニ送達スヘシ第十二條 第十一條ニ據リ處分請求書ヲ棄却シタルトキハ處分法第十六條ノ費用ハ之ヲ徵收セサルモノトス

第十三條 (明治二十六年六月大藏省令第十一號ヲ以テ本條削除)

第十四條 處分法第十一條ノ沒收ニ該ル物品ニシテ市町村吏員又ハ隣佑若クハ本人ニ預ケタルモノハ保管ノ儘納付ノ手續ヲ爲サシムヘシ

第十五條 「間稅署長」又ハ「分署長」ニ於テ沒收品ヲ領收タシルトキハ之ヲ主管官吏ニ引續クヘシ



第十六條 處分法第十一條ノ罰金其他ノ收入金ハ會計法規ノ定ムル所ニ依リ之ヲ處理スヘシ  
第十七條 處分法第十二條ニ掲ル七日ノ期限ハ通告書ヲ受取ルヘキ者ニ於テ之ヲ受取リタル翌日ヨリ起算スヘシ

第十八條 「間税署長」又ハ「分署長」ヨリ發スル通告書ハ便宜ニ依リ犯則者所在地ノ分署ニ郵送シ該分署ヨリ使丁ヲ以テ之ヲ本人ニ送達スルコトヲ得 但本人ノ領收證ハ即日之ヲ通告書ヲ發シタル「間税官署」ニ發送スヘシ

第十九條 「間税署長」又ハ「分署長」ハ犯則者若シ其管轄域外ニ在ルトキハ處分法第十一條ノ通告ヲ爲スニ當リ其納付スヘキ金額物件ヲ犯則者所在地ノ管轄「間税分署」ニ納付スヘキ旨ヲ通告スヘシ「間税署長」ニ於テ各「分署」管轄内ニ在ル犯則者ニ通告ヲ爲ス場合モ亦同シ

第二十條 「間税署長」又ハ「分署長」ハ前條ノ通告ヲ爲シタルトキハ該通告書ノ謄本ヲ犯則者所在地ノ「間税分署長」ニ送付シ其金額物件ノ徵收方ヲ同署ニ移スヘシ  
前項ノ場合ニ於テ犯則者期限内ニ通告ノ旨ヲ履行セサルトキハ之ヲ通告書ヲ發シタル「間税官署」ニ報告スヘシ

第二十一條 處分法第四條ノ親族ト稱スルハ刑法第四百十四條第四百十五條ノ例ニ依ルヘシ  
第二十二條 凡ソ犯則處分ニ關スル書類ニハ每葉ニ契印スヘシ若シ文字ヲ挿入削除若クハ欄外ニ記入ヲ爲シタルトキハ之ニ認印スヘシ但シ削除シタルモノハ其字體ヲ存シ置キ其字數ヲ記載スヘシ

第二十三條 「間税分署長」ハ其管轄内ニ於テ處置シタル犯則事件ノ處分表ヲ調製シ毎月五日限管轄「間税署長」ニ報告スヘシ

第二十四條 處分法第一條第三項ノ間税官吏タルノ證票同第十一條ノ送達書同第十二條ノ納證施行細則第二十三條ノ犯則事件處分表ハ第一號ヨリ第四號マテノ様式ニ依リ之ヲ調製スヘシ  
(様式略之)

### 囚人及刑事被告人押送規則

(明治三十年十一月勅令第四百十五號)

朕囚人及刑事被告人押送規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
囚人及刑事被告人押送規則

第一條 囚人及刑事被告人ノ押送ハ警察署又ハ警察分署ノ遞傳ニ付スルモノトス但十里以内ノ押送汽車汽船ノ便アル地方間ノ押送又ハ一時多數ノ囚人若ハ刑事被告人ノ押送其ノ他特別ノ事情アル場合ハ本項ニ依ラサルコトヲ得

前項但書ノ場合ニ於テハ看守長看守又ハ憲兵下士卒ヲシテ押送セシムルコトヲ得  
第二條 同一廳府縣内ニ在ル監獄間囚人ノ押送ハ看守長看守ヲシテ之ヲ爲サシムヘシ但十里以外ノ押送ハ前條ニ依リ遞傳ニ付スルコトヲ得

第三條 被押送者ノ所持スル貨幣物品ニシテ本人ト同時ニ押送スルモノハ左ノ例ニ依リ取扱フヘシ  
一 物品ハ押送者ニ託シテ之ヲ押送ス但危險ノ虞アル物品及押送者ノ攜帶ニ堪ヘサル物品ハ此ノ限ニ在ラス

二 貨幣ハ押送者ニ託セス保管金寄託替ノ手續ニ依リ之ヲ送致ス但五圓未満ノ金額若ハ押送期

間一日以上ニ互ラサル場合及刑事被告人ニ屬スル貨幣ニシテ本人ノ請求アル場合ハ押送者ニ託スルコトヲ得

第四條 前條ニ依リ送致中ノ貨幣物品ハ押送者ニ託スル場合ニ於テハ押送者ヲ爲ス各官署ノ保管ニ屬シ押送者ニ託セサル場合ニ於テハ發送官署ノ保管ニ屬ス

第五條 押送者ノ旅費並ニ囚人及刑事被告人ノ押送費用ハ押送者ヲ爲ス各官署ノ區別ニ從ヒ各其ノ經費ヲ以テ支辨ス但他廳府縣ヨリ囚人ノ送還ヲ求メタル場合ニ於テハ其ノ押送費用ハ送還ヲ求メタル廳府縣ノ經費ヨリ支辨ス

集治監ニ於テ執行スヘキ刑ノ確定判決ヲ受ケタル囚人ニ係ル押送費用ハ在府縣獄囚徒費ヲ以テ之ニ充ツ

第六條 被押送者ノ宿泊費額ハ警察署又ハ警察分署ニ於テハ留置人ノ例ニ依リ其ノ他ニ宿泊セシムル場合ニ於テハ内務大臣ノ定ムル所ニ依ル

第七條 刑事被告人遞傳押送ノ場合ニ於テ警察署長若ハ警察分署長ハ監獄ノ規程ニ從ヒ押送途中ニ必要ナル物品又ハ飲食物ニ限リ自費ヲ以テ之ヲ購求スルコトヲ許シ又親屬故舊ニ之カ差入ヲ許スコトヲ得

第八條 押送途中被押送者死亡シ二十四時間内ニ遺骸ノ引取人ナキトキハ警察署長若ハ警察分署長ニ於テ假埋葬ヲ爲スヘシ

假埋葬ノ費用ハ第五條ノ區別ニ從ヒ支辨スヘシ

第九條 本則ハ軍衙門ニ於ケル囚人及刑事被告人ノ押送ニ適用セス

附則

第十條 本則ヲ施行スル爲必要ナル細則ハ内務大臣之ヲ定ム

前項ノ細則ニ規定シタルモノノ外押送ニ關シ必要ナル指揮ハ廳府縣長官(東京府ニ於テハ警視總監)之ヲ爲スヘシ

第十一條 本則ハ明治三十一年一月一日ヨリ施行ス

第十二條 明治十五年大政官達第十號ハ本則施行ノ日ヨリ廢止ス

### 行政廳ノ違法處分ニ關スル行政裁判

(明治二十三年十月法律第百六號)

朕行政廳ノ違法處分ニ關スル行政裁判ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ掲クル事件ニ付行政廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ毀損セラレタリトスル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

- 一 海關稅ヲ除ク外租稅及手数料ノ賦課ニ關スル事件
- 二 租稅滯納處分ニ關スル事件
- 三 營業免許ノ拒否又ハ取消ニ關スル事件
- 四 水利及土木ニ關スル事件
- 五 土地ノ官民有區分ノ査定ニ關スル事件

### 行政裁判法 (明治二十三年法律第四十八號)

朕行政裁判法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

行政裁判法

第一章 行政裁判所組織

第一條 行政裁判所ハ之ヲ東京ニ置ク

第二條 行政裁判所ニ長官一人及評定官ヲ置ク評定官ノ員數ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三條 長官ハ勅任トス評定官ハ勅任又ハ奏任トス

長官及評定官ハ三十歳以上ニシテ五年以上高等行政官ノ職ヲ奉シタル者若クハ裁判官ノ職ヲ奉シタル者クハ内閣總理大臣ノ上奏ニ依リ任命セララルモノトス

第四條 長官及評定官ハ在職中左ノ諸件ヲ爲スコトヲ得ス

一 公然政事ニ關係スルコト

二 政黨ノ黨員又ハ政社ノ社員トナリ又ハ衆議院議員府縣郡市町村會ノ議員若クハ參事會員タルコト

三 兼官ノ場合ヲ除ク外俸給アル又ハ金錢ノ利益ヲ目的トスル公務ニ就クコト

四 商業ヲ營ミ其他行政上ノ命令ヲ以テ禁シタル業務ヲ營ムコト

第五條 第六條ノ場合ヲ除ク外長官及評定官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニ非サレハ其意ニ反シテ退官轉官又ハ非職ヲ命セラルルコトナシ

行政裁判所ノ長官又ハ評定官ヲ兼任スル者ハ此本官在員中前項ヲ適用ス

懲戒處分ノ法ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第六條 長官及評定官身體若クハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルトキハ内閣總理大臣ハ行政裁判所ノ總會ノ決議ニ依リ其退職ヲ上奏スルコトヲ得

第七條 長官ハ行政裁判所ノ事務ヲ總理ス

長官故障アルトキハ評定官中官等最モ高キ者之ヲ代理ス官等同シキトキハ任官ノ順序ニ依リ其先ナル者之ヲ代理ス

第八條 長官ハ自ラ裁判長トナリ若クハ評定官ニ裁判長ヲ命スルコトヲ得

部ヲ分ツノ必要アルトキハ其組織及事務分配ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第九條 行政裁判所ノ裁判ハ裁判長及評定官ヲ併セ五人以上ノ列席會議ヲ要ス但列席ノ人員ハ奇數ニ限ル若シ缺席ノ爲偶數トナリタルトキハ官等最モ低キ評定官ヲ議決ヨリ除ク官等同シキトキハ任官ノ順序ニ依リ其後ナル者ヲ除ク

議決ハ過半數ニ依ル

第十條 長官又ハ評定官ハ左ノ場合ニ於テ評議及議決ニ加ハルコトヲ得ス

一 裁判スヘキ事件自己又ハ父母兄弟姉妹若クハ妻子ノ身上ニ關スルトキ

二 裁判スヘキ事件一私人ノ資格ヲ以テ意見ヲ述ヘタルモノ又ハ理事者若クハ職務外ノ地位ニ於テ取扱ヒタルモノニ關スルトキ

三 裁判スヘキ事件行政官タルノ資格ヲ以テ其事件ノ處分又議決ニ參與シタル者ニ關スルトキ

第十一條 前條ノ場合ニ於テ原告又ハ被告ハ原因ヲ説明シテ文書又ハ口頭ヲ以テ長官又ハ評定官ヲ忌避スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ行政裁判所ハ本人ヲ回避セシメ之ヲ議決ス

第十二條 忌避若クハ除斥ノ原因タル事情ニ付キ長官又ハ評定官ヨリ申出アルトキ又ハ他ノ事由ヨリシテ長官又ハ評定官カ法律ニ依リ評議及決議ニ加ハルヲ得サルノ疑アルトキハ行政裁判所ハ本人ヲ回避セシメ之ヲ議決ス

第十三條 行政裁判所ノ處務規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條 行政裁判所ノ辯護人タルコトヲ得ルハ行政裁判所ノ認許シタル辯護士ニ限ル

第二章 行政裁判所權限

第十五條 行政裁判所ハ法律勅令ニ依リ行政裁判所ニ出訴ヲ許シタル事件ヲ審判ス

第十六條 行政裁判所ハ損害賠償ノ訴訟ヲ受理セス

第十七條 行政訴訟ハ法律勅令ニ特別ノ規程アルモノヲ除ク外地方上級行政廳ニ訴願シ其裁決ヲ經タル後ニ非サレハ之ヲ提起スルコトヲ得ス

各省大臣ノ處分又ハ内閣直轄官廳又ハ地方上級行政廳ノ處分ニ對シテハ直ニ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

各省又ハ内閣ニ訴願ヲ爲シタルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得ス

第十八條 行政裁判所ノ判決ハ其事件ニ付關係ノ行政廳ヲ羈束ス

第十九條 行政裁判所ノ裁判ニ對シテハ再審ヲ求ムルコトヲ得ス

第二十條 行政裁判所ハ其權限ニ關シテハ自ラ之ヲ決定ス

行政裁判所ト通常裁判所又特別裁判所トノ間ニ起ル權限ノ爭議ハ權限裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

第二十一條 行政裁判所ノ判決ノ執行ハ通常裁判所ニ囑托スルコトヲ得

第三章 行政訴訟手續

第二十二條 行政訴訟ハ行政廳ニ於テ處分書若クハ裁決書ヲ交付シ又ハ告知シタル日ヨリ六十以內ニ提起スヘシ六十日ヲ經過シタルトキハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得ス但法律勅令ニ特別ノ規程アルモノハ此限ニ在ラス

訴訟提起ノ日限其他此法律ニ依リ行政裁判所ノ指定スル日限ノ計算並ニ災害事變ノ爲メ遷延シタル期限ニ關シテハ民事訴訟ノ規程ヲ適用ス

第二十三條 行政訴訟ハ法律勅令ニ特別ノ規程アルモノヲ除ク外行政廳ノ處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止セス但行政廳及行政裁判所ハ其職權ニ依リ又ハ原告ノ願ニ依リ必要ト認ムルトキハ其處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止スルコトヲ得

第二十四條 行政訴訟ハ文書ヲ以テ行政裁判所ニ提起スヘシ法律ニ依リ法入ト認メラレタル者ハ其名ヲ以テ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十五條 訴狀ハ左ノ事項ヲ記載シ原告署名捺印スヘシ

一 原告ノ身分、職業、住所、年齢

二 被告ノ行政廳又ハ其他ノ被告

三 要求ノ事件及其理由

四 立證

五 年月日

訴狀ニハ原告ノ經歷シタル訴願書裁決書並ニ證據書類ヲ添フヘシ

第二十六條 訴狀ニハ被告ニ送付スル爲メニ必要文書ノ副本ヲ添フヘシ

第二十七條 行政裁判所ハ原告ノ訴狀ニ就テ審査シ若シ法律勅令ニ依リ行政訴訟ヲ提起スヘカラ

サルモノナルカ又ハ適法ノ手續ニ違背スルモノナルトキハ其理由ヲ付シタル裁決書ヲ以テ之ヲ却下スヘシ

其訴狀ノ方式ヲ缺クニ止マルモノハ之ヲ改正セシムル爲メノ期限ヲ指定シテ還付スヘシ

第二十八條 行政裁判所ニ於テ訴狀ヲ受理シタルトキハ其副本ヲ被告ニ送付シ相當ノ期限ヲ指定シテ答辯書ヲ差出サシムヘシ

答辯書ニハ原告ニ送付スル爲メ必要文書ノ副本ヲ添フヘシ

第二十九條 行政裁判所ハ必要ナリト認ムルトキハ其期限ヲ指定シテ原告被告交互ニ辯駁書及再度ノ答辯書ヲ差出サシムヘシ

第三十條 行政裁判所ハ訴狀及答辯書ノ附屬文書ノ副本ヲ原告被告交互ニ送付スル代リニ所内ニ於テ之ヲ閱覽セシムルコトヲ得

第三十一條 行政裁判所ハ訴訟審問中其事件ノ利害ニ關係アル第三者ヲ訴訟ニ加ハラシメ又ハ第三者ノ願ニ依リ訴訟ニ加ハルコトヲ許可スルヲ得

前項ノ場合ニ於テハ行政裁判所ノ判決ハ第三者ニ對シテモ亦其效力ヲ有ス

第三十二條 行政官廳ハ其官吏又ハ其申立ニ依リ主務大臣ヨリ命シタル委員ヲシテ訴訟代理ヲ爲サシムルコトヲ得

代理人ハ委任狀ヲ以テ代人タルコトヲ證明スヘシ

第三十三條 行政裁判所ハ豫メ指定シタル期日ニ於テ原告被告及第三者ヲ召喚シテ審問ヲ開キ口頭審問ヲ爲スヘシ

原告被告及第三者ニ於テ口頭審問ヲ爲スコトヲ望マサル旨ヲ申立タル場合ニ於テハ行政裁判所

ハ文書ニ就キ直ニ判決ヲ爲スコトヲ得

第三十四條 審問ニ於テハ原告被告及第三者ノ證明ヲ聽クヘシ

審問ニ於テハ裁判長ノ許可ヲ得タル者ヨリ順次發言スヘシ

原告被告及第三者ハ事實上及法律上ノ點ニ就キ文書ニ盡ササル所ヲ補足シ又ハ誤謬ヲ更正シ若クハ新ニ證據ヲ提出シ及證書ヲ提示スルコトヲ得

第三十五條 主務大臣ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ公益ヲ辯護スル爲メ委員ヲ命シ審問ニ差出スコトヲ得

行政裁判所ハ判決ヲ爲ス前ニ委員ヲシテ意見ヲ陳述セシムヘシ

第三十六條 行政裁判所ノ對審判決ハ之ヲ公開ス

安寧秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アリ又ハ行政廳ノ要求アルトキハ行政裁判所ノ決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ムルコトヲ得

第三十七條 公開ヲ停ムルノ決議ヲ爲シタルトキハ公衆ヲ退カシムルノ前之ヲ言渡ス

第三十八條 行政裁判所ハ原告被告及第三者ニ出廷ヲ命シ並ニ必要ト認ムル證據ヲ徵シ證人及鑑定人ヲ召喚シ審問ニ應ジ證明及鑑定ヲ爲サシムルコトヲ得

證人又ハ鑑定人トシテ審問ニ應ジ證明及鑑定ヲ爲スヘキ義務ニ關シテハ民事訴訟ノ規程ヲ適用ス其義務ヲ盡ササル場合ニ於テ處分スヘキ科罰ハ行政裁判所ハ自ラ之ヲ判決ス

行政裁判所ハ口頭審問ニ於テ舉證ノ手續ヲ爲シ又ハ評定官ニ委任シ若クハ通常裁判所又ハ行政廳ニ囑託シテ之ヲ調査ヲ爲サシムルコトヲ得

第三十九條 行政裁判所ニ於テ審問中ノ事件ニ關シ民事上ノ訴訟起ルコトアリテ通常裁判ノ確定

ヲ待ツノ必要アリト認ムルトキハ其審判ヲ中止スルコトヲ得

第四十條 審問手續ニ關スル故障ノ申立ハ行政裁判所自ラ之ヲ判決ス

第四十一條 召喚ノ期日ニ於テ原告若クハ被告若クハ第三者出廷セサルコトアルモ行政裁判所ハ其審判ヲ中止セス

原告被告及第三者共ニ出廷セサルトキハ行政裁判所ハ審問ヲ行ハス直ニ判決ヲ爲スコトヲ得  
第四十二條 裁判宣告書ハ理由ヲ付シ裁判長評定官及書記之ニ署名捺印シ其謄本ニ行政裁判所ノ印章ヲ捺シ之ヲ原告被告及第三者ニ交付スヘシ  
行政訴訟ノ文書ニハ訴訟用印紙ヲ貼用スルヲ要セス

第四十三條 行政訴訟手續ニ關シ此法律ニ規程ナキモノハ行政裁判所ノ定ムル所ニ依リ民事訴訟ニ關スル規程ヲ適用スルコトヲ得

第四章 附則

第四十四條 此法律ハ明治二十三年十月一日ヨリ施行ス

第四十五條 第二十條第二項ノ權限爭議ハ權限裁判所ヲ設クル迄ノ間樞密院ニ於テ之ヲ裁定ス  
裁定ノ手續ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第四十六條 從前ノ法令ニシテ此法律ト牴觸スルモノハ此法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第四十七條 此法律施行ノ前既ニ行政訴訟トシテ受理シ審理中ニ係ルモノハ仍從前ノ成規ニ依リ處分スヘシ

行政訴訟豫納金手續

(明治二十三年十一月行政裁判所告示第二號)

行政訴訟豫納金手續左ノ通相定ム

豫納金手續

第一條 行政訴訟ヲ爲ス者ハ臨時特別費ヲ除クノ外訴訟提出ノ際ニ於テ書類送達等ノ費用ニ充ツル爲メ金二圓ヲ豫納スヘシ

第二條 豫納ヲ爲サントスル者ハ當廳ノ保管金送付書ヲ以テ之ニ金員ヲ添ヘ大藏省預金局ニ納付スヘシ

第三條 第一條ノ豫納金ニ於テ仍ホ不足ナルトキハ追納セシムルコトアルヘシ  
追納手續モ亦前條ニ依ルヘシ

市町村制及土地收用法ニ關スル訴訟取扱方

(明治二十三年二月法律第十號)

朕市町村制及土地收用法ニ關スル訴訟取扱ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

市町村制實施以前區戶長ノ處分ニ關シ市町村長ニ對スル行政訴訟並同制實施後ニ係ル市町村長ニ對スル行政訴訟ハ從前郡區戶長ニ對スル事件ニ準シ(始審裁判所)ニ於テ取扱フヘシ但明治二十二年法律第十六號ヲ以テ指定シタル場合ハ此限ニアラス  
土地收用法第十五條第二項ニ該當スル訴訟事件ニシテ該法律施行前受理シタルモノハ從前ノ手續ニ依リ取扱フヘシ

市制町村制中內閣ニ於テ行フヘキ行政裁判

手續 (明治二十二年六月法律第十六號)

朕市制第二百二十七條及町村制第三百十條ニ據レル行政裁判手續ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
明治二十一年(四月)法律第一號市制第二百二十七條及町村制第三百十條ニ依リ當分ノ内閣ニ於テ  
行フヘキ行政裁判ハ現行ノ行政裁判手續ニ從ヒ控訴院ニ於テ受理審問セシメ内閣ノ裁定ヲ經テ判  
決ヲ言渡サシム

訴願法 (明治二十三年十月法律第五號)

朕訴願法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

訴願法

第一條 訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ掲クル事件ニ付之ヲ提起スルコトヲ  
得

- 一 租税及手数料ノ賦課ニ關スル事件
  - 二 租税滯納處分ニ關スル事件
  - 三 營業免許ノ拒否又ハ取消ニ關スル事件
  - 四 水利及土木ニ關スル事件
  - 五 土地ノ官民有區分ニ關スル事件
  - 六 地方警察ニ關スル事件
- 其他法律勅令ニ於テ特ニ訴願ヲ許シタル事件

第二條

訴願セントスル者ハ處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シ直接上級行政廳ニ之ヲ提起スヘシ  
訴願ノ裁決ヲ受ケタル後更ニ上級行政廳ニ訴願スルトキハ其裁決ヲ爲シタル行政廳ヲ經由スヘ  
シ

國ノ行政ニ付此法律ニ依リ郡參事會又ハ市參事會ノ處分若クハ裁決ニ對シテ訴願セントスル者  
ハ其處分若クハ裁決ヲ爲シタル郡參事會又ハ市參事會ヲ經由シテ府縣參事會ニ之ヲ提起スヘシ

第三條 各省大臣ノ處分ニ對シ訴願セントスル者ハ其省ニ之ヲ提起スヘシ  
第四條 裁判所ノ裁判各省ノ裁決及第二條第三項府縣參事會ノ裁決ヲ經タルモノハ其事件ニ付更  
ニ訴願スルコトヲ得ス

第五條 訴願ハ文書ヲ以テ之ヲ提起スヘシ  
訴願書ノ侮辱誹毀ニ涉ルモノハ之ヲ受理セス

第六條 訴願書ハ其不服ノ要點理由要求及訴願人ノ身分職業住所年齡ヲ記載シ之ニ署名捺印スヘ  
シ

訴願書ニハ證據書類ヲ添ヘ竝下級行政廳ノ裁決ヲ經タルモノハ其裁決書ヲ添フヘシ  
第七條 多數ノ人員共同シテ訴願セントスルトキハ其訴願書ニ各訴願人ノ身分職業住所年齡ヲ記  
載シ署名捺印シ其中ヨリ三名以下ノ總代人ヲ選ビ之ニ委任シ總代委任ノ正當ナルコトヲ證明ス  
ヘシ

法律ニ依リ法人ト認メラレタル者ハ其名ヲ以テ訴願ヲ提起スルコトヲ得

第八條 行政處分ヲ受ケタル後六十日ヲ經過シタルトキハ其處分ニ對シ訴願スルコトヲ得ス  
行政廳ノ裁決ヲ經タル訴願ニシテ其裁決ヲ受ケタル後三十日ヲ經過シタルモノハ更ニ上級行政

廳ニ訴願スルコトヲ得ス

廳ニ訴願スルコトヲ得ス

行政廳ニ於テ宥恕ス可キ事由アリト認ムルトキハ期限經過後ニ於テモ仍之ヲ受理スルコトヲ得  
第九條 法律勅令ニ依リ訴願ヲ提起スヘカラサルモノナルガ又ハ適法ノ手續ニ違背スルモノナル  
トキハ之ヲ却下ス

其訴願書ノ方式ヲ闕クニ止ムルモノハ期限ヲ指定シテ還付スヘシ

第十條 訴願書ハ郵便ヲ以テ之ヲ差出スコトヲ得  
郵便遞送ノ日數ハ第八條ノ訴願期限内ニ之ヲ算入セス

第十一條 第二條第一項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ  
十日以内ニ辯明書及必要文書ヲ添へ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ

第十二條 第二項ノ場合ニ於テ訴願書ノ理由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ三十日以  
内ニ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ

第十三條 第三項ノ場合ニ於テ訴願書ヲ發送スルトキ亦前二項ノ例ニ依ルヘシ

第十四條 訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外行政處分ノ執行ヲ停止セス但行政廳ハ  
其職權ニ依リ又ハ訴願人ノ願ニ依リ必要ナリト認ムルトキハ其執行ヲ停止スルコトヲ得

第十五條 訴願ハ口頭審問ヲ爲サス其抗書ニ就キ之ヲ裁決ス但行政廳ニ於テ必要ナリト認ムルト  
キハ口頭審問ヲ爲スコトヲ得

第十六條 訴願ノ裁決ハ文書ヲ以テ之ヲ爲シ其理由ヲ付スヘシ訴願ヲ却下スルトキ亦同シ

第十七條 訴願ノ裁決書ハ其處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シテ之ヲ訴願人ニ交付スヘシ願書ヲ却  
下スルトキ亦同シ

第十六條 上級行政廳ニ於テ爲シタル裁決ハ下級行政廳ヲ羈束ス

第十七條 訴願ノ手續ニ關シ他ノ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノハ各其規程ニ依ル

附 則

第十八條 明治十五年(十二月)第五十八號布告請願規則ハ此法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第十九條 此法律施行ノ前請願規則ニ依リ受理シタル請願ハ仍其規則ニ依リ之ヲ處分ス

請願規則ニ依リ下級行政廳ノ指令ヲ受ケタル者訴願スルヲ得ヘキ場合ニ於テ更ニ訴願セントス  
ルトキハ此法律ニ從ヒ其上級行政廳ニ之ヲ提起スヘシ

第二十條 第八條ノ訴願期限ハ此法律施行ノ前行政處分ヲ受ケ又ハ請願規則ニ依リ指令ヲ受ケタ  
ル事件ニシテ其處分又ハ指令ヲ受ケタル日ヨリ滿五年ヲ經過セサルモノニ對シテハ此法律執行  
ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第二十一條 行政廳ニ呈出スル請願ハ此法律ニ依ルノ限ニ在ラス



民刑及行政訴訟並願終

### 第二十類 會計及官公有財產

#### ◎會計法

(明治二十二年二月法律第四號)

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ會計法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム  
會計法

#### 第一章 總則

第一條 政府ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

一 會計年度所屬ノ歳入歳出ノ出納ニ關ル事務ハ翌年十一月三十日マテ悉皆完結スヘシ

第二條 租稅及其ノ他一切ノ收納ヲ歳入トシ一切ノ經費ヲ歳出トシ歳入歳出ハ總豫算ニ編入スヘシ

第三條 各年度ニ於テ決定シタル經費ノ定額ヲ以テ他ノ年度ニ屬スヘキ經費ニ充ツルコトヲ得ス

第四條 各官廳ニ於テハ法律勅令ヲ以テ規定シタルモノノ外特別ノ資金ヲ有スルコトヲ得ス

#### 第二章 豫算

第五條 歳入歳出ノ總豫算ハ前年ノ帝國議會集會ノ始ニ於テ之ヲ提出スヘシ

第六條 歳入歳出ノ總豫算ハ之ヲ經常臨時ノ二部ニ大別シ各部中ニ於テ之ヲ款項ニ區分スヘシ

總豫算ニハ帝國議會參考ノ爲ニ左ノ文書ヲ添附スヘシ

第一 各省ノ豫定經費要求書但各項中各目ノ明細ヲ記入スヘシ

第二 其ノ年三月三十一日ニ終リタル會計年度ノ歳入歳出現計書

第七條 豫算中ニ設クヘキ豫備費ハ左ノ二項ニ分ツ

第一 豫備金  
第二 豫備金

第一 豫備金ハ避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フモノトス  
第二 豫備金ハ豫算外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツルモノトス  
第八條 豫備金ヲ以テ支辨シタルモノハ年度經過後帝國議會ニ提出シ其ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス  
第九條 毎年度大藏省證券發行ノ最高額ハ帝國議會ノ協賛ヲ經テ之ヲ定ム

第三章 收入

第十條 租稅及其ノ他ノ歳入ハ法律命令ノ規程ニ從ヒ之ヲ徵收スヘシ  
法律命令ニ依リ當該官吏ノ資格アル者ニ非サレハ租稅ヲ徵收シ又ハ其ノ他ノ歳入ヲ收納スルコトヲ得ス

第四章 支出

第十一條 毎會計年度ニ於テ政府ノ經費ニ充ツル所ノ定額ハ其ノ年度ノ歳入ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ  
第十二條 國務大臣ハ豫算ニ定メタル目的ノ外ニ定額ヲ使用シ又ハ各項ノ金額ヲ彼此流用スルコトヲ得ス

國務大臣ハ其ノ所管ニ屬スル收入ヲ國庫ニ納ムヘシ直ニ之ヲ使用スルコトヲ得ス

第十三條 國務大臣ハ其ノ所管定額ヲ使用スル爲ニ國庫ニ向ヒテ仕拂命令ヲ發スヘシ但別ニ定ムル所ノ規程ニ從ヒ他ノ官吏ニ委任シテ仕拂命令ヲ發セシムルコトヲ得

第十四條 國庫ハ法律命令ニ反スル仕拂命令ニ對シテ仕拂ヲ爲スコトヲ得ス

第十五條 國務大臣ハ政府ニ對シ正當ナル債主若ハ其ノ代理人ノ爲ニスルニ非サレハ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得ス

左ノ諸項ノ經費ニ限リ國務大臣ハ主任ノ官吏ニ委任シ又ハ政府ノ命シタル銀行ニ委任シテ現金支拂ヲ爲サシムル爲ニ現金前渡ノ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得

第一 國債ノ元利拂

第二 軍隊軍艦及官船ニ屬スル經費

第三 在外各廳ノ經費

第四 前項ノ外總テ外國ニ於テ支拂ヲ爲ス經費

第五 運輸通信ノ不便ナル内國ノ地方ニ於テ支拂ヲ爲ス經費

第六 廳中常用雜費ニシテ一箇年ノ總費額五百圓ニ滿タサルモノ

第七 場所ノ一定セサル事務所ノ經費

第八 各廳ニ於テ直接ニ從事スル工事ノ經費但一主任官ニ付三千圓マテテ限ル

第五章 決算

第十六條 會計検査院ノ検査ヲ經テ政府ヨリ帝國議會ニ提出スル總決算ハ總豫算ト同一ノ様式ヲ用ヒ左ノ事項ノ計算ヲ明記スヘシ

歳入ノ部

歳入豫算額

調定済歳入額

收入済歳入額

收入米濟歲入額

歲出ノ部

歲出豫算額

豫算決定後増加歲出額

仕拂命令濟歲出額

翌年度繰越額

第十七條 前條ノ總決算ニハ會計検査院ノ検査報告ト俱ニ左ノ文書ヲ添附スヘシ

第一 各省決算報告書

第二 國債計算書

第三 特別會計計算書

第六章 期滿免除

第十八條 政府ノ負債ニシテ其ノ仕拂フヘキ年度經過後滿五箇年内ニ債主ヨリ支出ノ請求若ハ仕拂ノ請求ヲ爲ササルモノハ期滿免除トシテ政府ハ其ノ義務ヲ免ルルモノトス但特別ノ法律ヲ以テ期滿免除ノ期限ヲ定メタルモノハ各其ノ定ムル所ニ依ル

第十九條 政府ニ納ムヘキ金額ニシテ其ノ納ムヘキ年度經過後滿五箇年内ニ上納ノ告知ヲ受ケサルモノハ其ノ義務ヲ免ルルモノトス但特別ノ法律ヲ以テ期滿免除ノ期限ヲ定メタルモノハ各其ノ定ムル所ニ依ル

第七章 歲計剩餘定額繰越豫算外收入及定額戻入

第二十條 各年度ニ於テ歲計ニ剩餘アルトキハ其ノ翌年度ノ歲入ニ繰入ルヘシ

第二十一條 豫算ニ於テ特ニ明許シタルモノ及一年度内ニ終ルヘキ工事又ハ製造ニシテ避クヘカラサル事故ノ爲ニ事業ヲ遲延シ年度内ニ其ノ經費ノ支出ヲ終ラザリシモノハ之ヲ翌年度ニ繰越シ使用スルコトヲ得

第二十二條 數年ヲ期シテ竣功スヘキ工事製造及其ノ他ノ事業ニシテ繼續費トシテ總額ヲ定メタルモノハ毎年度ノ仕拂額額ヲ竣功年度マテ遞次繰越使用スルコトヲ得

第二十三條 課拂過渡トナリタル金額ノ返納出納ノ完結シタル年度ニ屬スル收入及其ノ他一切豫算外ノ收入ハ總テ現年度ノ歲入ニ組入ルヘシ但法律勅令ニ依リ前金渡概算渡繰替拂ヲ爲シタル場合ニ於ケル返納金ハ各之ヲ仕拂ヒタル經費ノ定額ニ戻入ルルコトヲ得

第八章 政府ノ工事及物件ノ賣買賃借

第二十四條 法律勅令ヲ以テ定メタル場合ノ外政府ノ工事又ハ物件ノ賣買賃借ハ總テ公告シテ競争ニ付スヘシ但左ノ場合ニ於テハ競争ニ付セス隨意ノ約定ニ依ルコトヲ得ヘシ

第一 一人又ハ一會社ニテ專有スル物品ヲ買入レ又ハ借入ルルトキ

第二 政府ノ所爲ヲ秘密ニスヘキ場合ニ於テ命スル工事又ハ物品ノ賣買賃借ヲ爲ストキ

第三 非常急遽ノ際ノ工事又ハ物品ノ買入ヲ爲スニ競争ニ付スル暇ナキトキ

第四 特種ノ物質又ハ特別使用ノ目的アルニ由リ生産製造ノ場所又ハ生産者製造者ヨリ直接ニ物品ノ買入ヲ要スルトキ

第五 特別ノ技術家ニ命スルニ非サレハ製造シ得ヘカラサル製造品及機械ヲ買入ルルトキ

第六 土地家屋ノ買入又ハ借入ヲ爲スニ當リ其ノ位置又ハ構造等ニ限アル場合

第七 五百圓ヲ超エサル工事又ハ物品ノ買入借入ノ契約ヲ爲ストキ

第八 見積價格二百圓ヲ超エサル動産ヲ賣拂フトキ

第九 軍艦ヲ買入ルルトキ

第十 軍馬ヲ買入ルルトキ

第十一 試験ノ爲ニ工作製造ヲ命シ又ハ物品ヲ買入ルルトキ

第十二 慈善ノ爲ニ設立セル救育所ノ貧民ヲ備役シ及其ノ生産又ハ製造物品ヲ直接ニ買入ルルトキ

第十三 囚徒ヲ備役シ又ハ囚徒ノ製造物品ヲ直接ニ買入ルルトキ及政府ノ設立ニ係ル農工業場ヨリ直接ニ其ノ生産又ハ其製造物品ヲ買入ルルトキ

第十四 政府ノ設立シタル農工業場又ハ慈善教育ニ係ル各所ノ生産製造物品及囚徒ノ製造物品ヲ賣拂フトキ

第二十五條 軍艦兵器彈藥ヲ除ク外工事製造又ハ物件買入ノ爲ニ前金拂ヲ爲スコトヲ得ス

第九章 出納官吏

第二十六條 政府ニ屬スル現金若ハ物品ノ出納ヲ掌ル所ノ官吏ハ其ノ現金若ハ物品ニ付一切ノ責任ヲ負ヒ會計検査院ノ検査判決ヲ受クヘシ

第二十七條 前條ノ官吏水火盜難又ハ其ノ他ノ事故ニ由リ其ノ保管スル所ノ現金若ハ物品ヲ紛失毀損シタル場合ニ於テハ其ノ保管上避ケ得ヘカラサリシ事實ヲ會計検査院ニ證明シ責任解除ノ判決ヲ受クルニ非サレハ其ノ負擔ノ責ヲ免ルルコトヲ得ス

第二十八條 現金又ハ物品ノ出納ヲ掌ルニ付身元保證金ヲ納メシムルコトヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第二十九條 仕拂命令ノ職務ハ現金出納ノ職務ト相兼ヌルコトヲ得ス

第十章 雜則

第三十條 特別ノ須要ニ因リ本法ニ準據シ難キモノアルトキハ特別會計ヲ設置スルコトヲ得 特別會計ヲ設置スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第三十一條 政府ハ國庫金ノ取扱ヲ日本銀行ニ命スルコトヲ得

第十一章 附則

第三十二條 本法ノ條項帝國議會ニ關涉セサルモノハ明治二十三年四月一日ヨリ施行シ其ノ關涉スルモノハ帝國議會開會ノ時ヨリ施行ス

決算ニ係ル條項ハ帝國議會ノ議定ヲ經タル年度ノ歲計ヨリ施行ス

第三十三條 本法ノ條項ト牴觸スル法令ハ各各其ノ條項施行ノ日ヨリ廢止ス

◎作業會計法

(明治二十三年三月法律第十七號)

朕作業會計法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

作業會計法

第一條 左ノ作業所ハ其事業ヲ經營スル爲メ固定資本据置運轉資本ヲ置キ作業上ノ收入及其附屬雜收入ハ作業ノ費用ニ充ツルコトヲ許シ特別ノ會計ヲ立テシム(明治三十年法律第八號ヲ以テ本條改正)

第一 造幣局

第二 印刷局

第三 富岡製絲所

第四 電信燈臺用品製造所  
第五 廣島鑛山

- 第二條 各作業所ニ於テ從來使用シ及將來増加スル所ノ土地建物軌道其他築造道路船舶機械永遠保存品其他重要ナル器具ヲ以テ固定資本トナシ從來ノ營業資本額ヲ以テ据置運轉資本トス
- 第三條 各作業所特別會計ノ歲出額ハ豫算定額内ニ於テ實際ノ歲入及据置運轉資本ノ合計額ヲ超過スルヲ許サズ
- 第四條 固定資本ノ維持修理及補充ハ作業所特別會計ノ歲入ヲ以テ支辨スヘシ
- 第五條 作業所ノ純益及固定資本ニ屬スル物件ノ賣拂代金ハ總テ一般ノ歲入ニ編入スヘシ
- 第六條 政府ハ毎年各作業所特別會計ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ
- 第七條 各作業所別會計ノ收入支出ニ關スル規程ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
- 第八條 本法ハ明治二十三年度ヨリ施行ス其帝國議會ニ關涉スルモノハ帝國議會開會後ノ會計年度ヨリ施行ス

臺灣總督府特別會計法 (明治三十年二月法律第二號)

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル臺灣總督府特別會計法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

- 第一條 臺灣總督府ノ會計ハ特別トシ其ノ歲入及一般會計ノ補充金ヲ以テ其ノ歲出ニ充ツ
- 第二條 前條ノ收入支出ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附則  
第三條 本法ハ明治三十年四月一日ヨリ施行ス

官設鐵道會計法 (明治二十三年三月法律第二十號)

朕官設鐵道會計法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

- 第一條 鐵道事業ヲ經營スル爲メ固定資本据置運轉資本ヲ置キ營業上ノ收入及其附屬雜收入ハ鐵道事業ノ費用ニ充ルコトヲ許シ特別ノ會計ヲ立テシム
- 第二條 鐵道事業ノ爲メ從來使用シ及將來増加スル所ノ土地軌道車輛停車場工場家屋機械其他重要ナル器具ハ其固定資本トシ從來ノ流動資本ハ其据置運轉資本トス
- 第三條 鐵道營業ニ要スル費用固定資本ノ維持修理及補充費並ニ損失金ヲ鐵道事業ノ歲出トス
- 第四條 鐵道事業ノ純益及固定資本ニ屬スル物件ノ賣拂代金ハ總テ一般ノ歲入ニ編入スヘシ
- 第五條 政府ハ毎年鐵道事業ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ
- 第六條 鐵道事業ノ歲出額ハ豫算定額内ニ於テ實際ノ歲入及据置運轉資本ノ合計額ヲ超過スルヲ許サズ
- 第七條 災害事變ニ因リ鐵道財產ニ大破損ヲ生シ豫算定額ヲ以テ修理スルニ足ラサル場合ニ於テ其費用ヲ補フ爲メ鐵道事業ノ歲出豫算ニ豫備費ヲ設ルコトヲ得
- 第八條 鐵道事業ノ收入支出ニ關スル規程ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第九條 本法ハ明治二十三年度ヨリ施行ス其帝國議會ニ關涉スルモノハ帝國議會開會後ノ會計年度ヨリ執行ス

●償金特別會計法 (明治二十九年三月法律第六號)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル償金特別會計法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
償金特別會計法

第一條 償金及其ノ利子ハ一般ノ歳入歳出ト區分シ特別ノ會計ヲ設置ス

第二條 償金ハ金銀地金及有價證券ヲ以テ之ヲ保有スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ日本銀行ヲシテ其ノ交換ヲ取扱ハシム

前項ノ交換ヨリ生スル差増減ハ本會計ノ歳入出ニ屬スルモノトス

第三條 國庫内現金融通ノ爲國庫ヨリハ償金ノ金地金ヲ以テ日本銀行ヨリハ之ニ相當スル兌換銀行券ヲ以テ相互間ニ貸借勘定ヲ組成スルコトヲ得此場合ニ於ケル利子割合ハ大藏大臣之ヲ定ム

前項ノ金地金ハ日本銀行ニ於テ兌換銀行券ノ準備ニ供スヘキモノトス

第四條 政府ハ毎年償金特別會計ノ歳入歳出豫算ヲ調製シ歳入歳出ノ總豫算ト共ニ帝國議會ニ提出スヘシ

●葉煙草專賣資金會計法 (明治二十九年四月法律第七十九號)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル葉煙草專賣資金會計法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
葉煙草專賣資金會計法

第一條 葉煙草專賣法ニ依リ政府ニ於テ收納スル葉煙草賠償ノ爲葉煙草專賣資金ヲ置キ特別會計ヲ設置ス

第二條 每會計年度ニ於テ其ノ歳入ノ葉煙草賠償金ニ超過スルモノハ同年度一般ノ歳入ニ編入シ資金ハ翌年度ニ繰越スヘシ

第三條 政府ハ毎年葉煙草專賣資金特別會計ノ歳入歳出豫算ヲ調製シ歳入歳出ノ總豫算ト共ニ帝國議會ニ提出スヘシ

第四條 葉煙草專賣資金ノ收入支出ニ關スル規定ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 此ノ法律ハ明治三十一年一月一日ヨリ施行ス

●整理公債ニ關スル特別會計

(明治二十三年二月法律第十四號)

朕整理公債ニ關スル特別會計設置ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 整理公債條例ニ依リ募集又ハ償還スル公債金ノ會計ハ特別トシテ一般ノ歳入歳出ト區分スヘシ

第二條 整理公債募集金ノ毎年度内ニ他ノ公債償還ニ供セサルモノハ翌年度へ繰越スヘシ

第三條 整理公債條例第三十一條ニ依リ支出スル製造費發行費及利子ハ其金額ヲ一般ノ歳入ニ組入レ一般ノ歳出トシテ拂出スヘシ

第四條 本法ハ明治二十三年度ヨリ施行ス

鐵道公債會計法

(明治二十六年一月法律第一號)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル鐵道公債會計法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鐵道公債會計法

第一條 明治二十五年法律第四號鐵道敷設法ニ依ル所ノ鐵道公債ノ歲入歲出ハ一般ノ歲入歲出ト區別シ特別會計ヲ立テシム

第二條 鐵道公債募集金ヲ以テ支辨スル官設鐵道敷設法ニ要スル用品ヲ官設鐵道用品資金會計ヨリ買入ルルトキハ前金拂ヲ爲スコトヲ得

第三條 本法第二條ハ明治二十七年ヨリ施行ス

官設鐵道用品資金會計法

(明治二十六年七月法律第二號)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル官設鐵道用品資金會計法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官設鐵道用品資金會計法

第一條 鐵道用品ヲ購入貯藏シ官設鐵道運輸營業竝ニ建設事業ノ需用ニ應スル爲メ官設鐵道用品資金ヲ置キ特別ノ會計ヲ立テシム

第二條 官設鐵道用品資金ハ官設鐵道會計ノ据置運轉資本ノ内金百八十萬圓ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 官設鐵道用品資金ヲ以テ購入貯藏シタル物品ノ製作改製及修理ノ費用ハ該資金ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

第四條 官設鐵道用品資金會計ニ屬スル諸品ノ賣拂價格ハ其ノ自然ノ損減參合製作改製及修理費

竝ニ其ノ附屬費用及購入ニ附隨スル諸費ヲ其ノ購入原價ニ加算シテ之ヲ定ムヘシ

第五條 官設鐵道用品資金特別會計ノ決算上該資金額ニ過剩ヲ生スルトキハ其ノ過剩金ヲ同年度一般ノ歲入ニ編入スヘシ

第六條 政府ハ毎年官設鐵道用品資金特別會計ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

第七條 官設鐵道用品資金特別會計ノ收入支出ニ關スル規程ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

貨幣整理資金特別會計法

(明治三十年三月法律第十七號)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル貨幣整理資金特別會計法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

貨幣整理資金特別會計法

第一條 一圓銀貨幣及流通不便ノ貨幣引揚交換ノ爲貨幣整理資金ヲ置キ其ノ歲入歲出ハ一般會計ト區別シ特別ノ會計ヲ設置ス

第二條 明治三十年度以後造幣局特別會計作業益金ハ貨幣整理資金ニ充ツヘシ

第三條 交換ノ上引揚タル一圓銀貨幣及流通不便ノ貨幣ヲ地金トシテ賣却スルトキハ隨意契約ニ依ルコトヲ得

第四條 毎會計年度ニ於テ貨幣整理資金特別會計ノ決算上該資金額ニ過剩ヲ生スルトキハ其ノ過剩金ヲ該資金ニ編入スヘシ

第五條 政府ハ毎貨幣整理資金特別會計ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ帝國議會ニ提出スヘシ

第六條 貨幣整理資金收入支出ニ關スル規定ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

紙幣交換基金特別會計法

(明治二十三年三月法律第二十四號)

朕紙幣交換基金特別會計法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

紙幣交換基金特別會計法

第一條 從來政府ニ於テ發行シタル紙幣ヲ廢止スル爲メ紙幣交換基金ヲ置キ漸次之ヲ交換セシム

第二條 政府所有ノ準備金一千萬圓ハ之ヲ紙幣交換基金ニ組入ルヘシ

政府ハ金二千二百萬圓ヲ限リ日本銀行ヨリ借入ヲ爲シ前項ノ交換基金ニ組入ルヘシ(明治二十三年法律第五十六號ヲ以テ本項追加)

第三條 紙幣交換基金ノ會計ハ特別トシテ一般ノ歲入歲出ト區分スヘシ

第四條 毎年度ニ於テ紙幣交換基金ノ交換未済トナリタルモノハ漸次之ヲ翌年度ヘ繰越スヘシ

第五條 紙幣交換基金ノ收入支出ニ關スル規則ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第六條 本法ハ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス

鎖店銀行紙幣交換基金特別會計法

(明治二十三年三月法律第二十五號)

朕鎖店銀行紙幣交換基金特別會計法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鎖店銀行紙幣交換基金特別會計法

第一條 國立銀行條例第九十八條ニ於テ定メタル鎖店銀行紙幣交換基金ノ會計ハ特別トシテ一般ノ歲入歲出ト區分スヘシ

第二條 毎年度ニ於テ鎖店銀行紙幣交換基金ノ交換未済トナリタル者ハ漸次翌年度ヘ繰越スヘシ

第三條 鎖店銀行紙幣交換基金ノ收入支出ニ關スル規則ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第四條 本法ハ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス

第五條 本法ハ平穩鎖店ヲ爲シ又ハ營業滿期ニ至リタル國立銀行紙幣並ニ營業滿期前ニ特別處分ヲ爲シタル國立銀行紙幣交換基金ノ會計ニモ之ヲ適用ス(明治二十八年法律第十六號及二十九年法律第十二號ヲ以テ改正追加ヲ施ス)

陸軍作業會計法

(明治二十三年三月法律第十八號)

朕陸軍作業會計法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍作業會計法

第一條 東京砲兵工廠大阪砲兵工廠及千住製絨所ハ其事業ヲ經營スル爲メ固定資本据置運轉資本ヲ置キ作業上ノ收入及其附屬雜收入ハ作業ノ費用ニ充ルコトヲ許シ特別ノ會計ヲ立テシム

第二條 東京砲兵工廠大阪砲兵工廠ニ於テハ從來使用シ及將來増加スル所ノ機械其他重要ナル器具ヲ以テ固定資本トシ從來ノ營業資本額ヲ以テ据置運轉資本トス

千住製絨所ニ於テハ從來使用シ及將來増加スル所ノ土地建物機械其他重要ナル器具ヲ以テ固定資本トシ從來ノ營業資本額ヲ以テ据置運轉資本トス

第三條 東京及大阪砲兵工廠ハ職工人夫ノ諸費材料素品機械運轉用品ノ購入費機械器具ノ維持修



理及補充費工場ノ雜費並ニ損失金ヲ作業ノ歲出トス  
千住製絨所ハ俸給諸給旅費應費生産品販賣ノ諸費職工人夫ノ諸費材料素品及機械運轉用品ノ購  
入費土地建物ノ維持修理費機械器具ノ維持修理及補充費工場ノ雜費並ニ損失金ヲ作業ノ歲出  
トス

第四條 各作業所特別會計ノ歲出額ハ豫算定額内ニ於テ實際ノ歲入及据置運轉資本ノ合計額ヲ超  
過スルヲ許サス

第五條 作業所ノ純益及固定資本ニ屬スル物件ノ賣拂代金ハ總テ一般ノ歲入ニ編入スヘシ

第六條 政府ハ毎年度各作業所特別會計ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト俱ニ之ヲ帝  
國議會ニ提出スヘシ

第七條 豫算外ニ軍用品ノ製作修理ヲ要スル場合ニ於テ其費用ヲ補フ爲メ各作業所ノ歲出豫算ニ  
豫備費ヲ設クルコトヲ得

第八條 各作業所ニ於テ機械器具材料素品及機械運轉用品ヲ外國ヨリ買入ルルトキハ前金拂ヲ爲  
スコトヲ得

第九條 各作業所特別會計ノ收入支出ニ關スル規程ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十條 本法ハ明治二十三年度ヨリ施行ス其帝國議會ニ關涉スルモノハ帝國議會開會ノ會計年度  
ヨリ施行ス

### 鎮守府造船材料資金會計法

(明治二十三年三月法律第十九號)

朕鎮守府造船材料資金會計法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鎮守府造船材料資金會計法

第一條 鎮守府造船工場ニ於テ船舶ヲ修理スル爲メニ要スル材料貯蓄ノ資本トシテ造船材料資金  
ヲ置キ特別ノ會計ヲ立テシム

第二條 造船材料資金ハ從來積須賀鎮守府小野濱造船所ニ備ヘタル營業資本ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 造船材料資金ヲ以テ貯蓄シタル材料ヲ使用スルトキハ海軍省所管經費ヲ以テ之ヲ購入ス  
ヘシ

第四條 造船材料資金ヲ以テ貯蓄シタル材料ノ損減ハ豫メ歩合ヲ定メテ材料原價ニ加算スヘシ

第五條 毎會計年度ニ於テ造船材料資金特別會計ノ決算上該資金額ニ過剩ヲ生スルトキハ其過剩  
金ヲ同年度一般ノ歲入ニ編入スヘシ

第六條 政府ハ毎年造船ト材料資金特別會計ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト俱ニ之  
ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

第七條 造船材料資金ノ收入支出ニ關スル規程ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第八條 本法ハ明治二十三年度ヨリ施行ス其帝國議會ニ關涉スルモノハ帝國議會開會後ノ會計年  
度ヨリ施行ス

### 陸海軍出師準備ノ物品ハ會計検査院法ヲ

適用セス (明治二十三年八月法律第七十號)

朕陸海軍出師準備ニ屬スル物品検査ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸海軍出師準備ニ屬スル物品ニ對シテハ陸海軍大臣其責ニ任シ會計検査院法ヲ適用スルノ限ニ在ラス

### 官立學校及圖書館會計法

(明治二十三年三月法律第二十六號)

朕官立學校及圖書館會計法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
官立學校圖書館會計法

第一條 文部省直轄學校及圖書館並農商務所管東京農林學校ハ資金ヲ所有シ政府ノ支出金資金ヨリ生ズル收入授業料寄附金及其他ノ收入ヲ以テ其歲出ニ充ツルコトヲ許シ特別ノ會計ヲ立テシム

第二條 學校及圖書館ノ資金ハ從來所有スル蓄積金政府ヨリ交付シ若クハ他ヨリ寄付シタル動産不動産及歲入殘餘ヨリ成ルモノトス

第三條 教員事務員ノ俸給諸給旅費器具器械圖書標本費授業費試驗費生徒ニ關スル諸費事務費營繕費雜支出其他寄付者ノ指定シタル費途ヲ以テ學校及圖書館ノ歲出トス

第四條 學校及圖書館ノ寄付金ニシテ特ニ用途ヲ指定シタルモノハ其約束ニ從ヒ之ヲ使用シ其會計ハ別ニ之ヲ整理スヘシ

第五條 政府ハ毎年各學校及圖書館ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

第六條 學校及圖書館ノ收入支出ニ關スル規程ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第七條 本法ハ明治二十三年度ヨリ施行ス其帝國議會ニ關涉スルモノハ帝國議會開會後ノ會計年度ヨリ施行ス

### 中央備荒儲蓄金「預金局」預金郵便貯金郵

便爲替金特別會計 (明治二十三年三月法律第二十一號)

朕中央備荒儲蓄金「預金局」預金郵便貯金預所貯金郵便爲替金特別會計ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 中央備荒儲蓄金「預金局」預金、郵便貯金預所貯金、郵便爲替金ノ會計ハ特別トシテ一般ノ歲入歲出ト區分スヘシ

第二條 中央備荒儲蓄金ハ「預金局」ニ寄托シ其利子ハ之ヲ元金ニ編入スヘシ

第三條 備荒儲蓄法ニ依リ中央備荒儲蓄金ヲ使用セントスルトキハ其金額ヲ一般ノ歲入ニ組入レ一般ノ歲出トシテ之ヲ拂出スヘシ

第四條 「預金局」預金ハ日本銀行ヲシテ之レカ運用利殖ヲ取扱ハシメ其利殖金ヲ以テ利子ノ仕拂ニ充テ殘餘アルトキハ利子仕拂元金トシテ之ヲ積立預金ト共ニ運用利殖スヘシ

第五條 「預金局」預金ニ對シテ政府ヨリ仕拂フヘキ利子ハ其金額ヲ一般ノ歲入ニ組入レ一般ノ歲出トシテ之ヲ拂出スヘシ

第六條 郵便貯金預所貯金ハ「預金局」ニ寄托シ其利子ヲ貯金利子ノ仕拂ニ充ツヘシ

第七條 郵便爲替ヲ取扱フ爲メ特ニ爲替資本ヲ置キ從來ノ資本額ヲ以テ之ニ充ツヘシ

第八條 郵便條例第四百七條第三項ニ依リ政府ノ所得ニ歸シタル郵便爲替金ハ一般ノ歲入ニ組

入ルヘシ

第九條 「預金局」預金、郵便貯金預所貯金郵便爲替金ノ收入支用ニ關スル規則ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム但勅令ヲ以テ之ヲ定ムルマテハ從前施行スル所ノ規程ニ依ルヘシ

第十條 本法ハ明治二十三年度ヨリ施行ス

### 官有財産管理規則

(明治二十三年十一月勅令第二百七十五號)

朕官有財産管理規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官有財産管理規則

第一條 此ノ規則ニ於テ官有財産ト稱スルハ國ノ所有ニ屬スル土地、森林、原野、營造物、家屋、船舶及其ノ附屬物トス

第二條 官有財産ハ主管ノ各省大臣之ヲ管理ス

第三條 官有財産ノ賣拂、讓與、交換及貸付ハ特別ノ規定アルモノヲ除ク外總テ此ノ規則ニ依ルヘシ

第四條 官有財産賣拂代金ハ其ノ財産引渡ノ際一時ニ納付セシムヘシ

第五條 官有財産ヲ貸付スルトキハ其ノ貸付料ヲ徵收スヘシ但公益ノ爲官有財産ヲ貸付シ又ハ森林經濟ノ爲森林ヲ貸付スルトキハ別ニ主管大臣ノ定ムル所ノ規則ニ依ル

第六條 官有財産ノ貸付料ハ每年前納セシムヘシ若シ前納スル能ハサルトキハ相當ノ保證ヲ出サシムヘシ

貸付財産ノ修理其ノ他ノ費用ヲ負擔スル方法ハ貸付契約ヲ爲ストキ之ヲ定ムヘシ

第一 樹木培養ニ供スル土地ハ八十年以内

第二 農工其ノ他ノ營業及住居ニ供スル土地ハ三十年以内

第三 土地森林ノ使用權ハ十五年以内

第四 右ニ掲ケタル物件ハ三年以内

第八條 官有財産ノ貸付期限中政府ニ於テ之ヲ國ノ使用ニ供スルノ必要アルトキハ貸付ノ契約ヲ解キ之ヲ返還セシムヘシ

前項ノ場合ニ於テ借受人ハ其ノ直接ニ受ケタル損失ニ付賠償ヲ求ムルコトヲ得

第九條 官有財産ノ借受人ニシテ主管大臣ノ許可ヲ得スシテ其ノ財産ノ原形ヲ變シ若ハ故意怠慢ニ由リ之ヲ荒廢ニ歸シ又ハ毀損亡失シタルトキハ主管大臣ハ其ノ損失ヲ賠償セシムヘシ

第十條 官有財産ノ借受人ハ主管大臣ノ許可ヲ得ルニアラサレハ其ノ財産ヲ他人ニ轉貸スルコトヲ得ス

第十一條 官有財産ヲ以テ他人ノ所有物ト交換スルコトヲ得ルハ同一種類ノ財産ニシテ少クトモ評定價額相均キモノニ限ル

森林、原野、田畑ハ同一種類ノ財産ト見做スコトヲ得

營造物、家屋、船舶及其ノ附屬物ハ他人ノ所有物ト交換スルコトヲ得ス

第十二條 府縣郡市町村公共ノ道路、公園、市場、河川竝木敷、堤塘、溝渠等ノ用ニ供スル爲官有ノ土地森林ヲ必要トスルトキハ主管大臣ニ於テ之ヲ其ノ府縣郡市町村ニ讓與スルコトヲ得

第十三條 府縣郡市町村ニ於テ新ニ道路、公園、市場、河川竝木敷、堤塘、溝渠等ヲ開設シ爲ニ不用ニ歸シタル官有ノ舊同種類ノ土地ハ内務大臣ニ於テ其ノ府縣郡市町村ニ讓與スルコトヲ得

但官林内若ハ官廳使用地内ニ包含セルモノ又ハ他ノ官有財産上保護上離權シ雖キモノハ此ノ限ニアラス

第十四條 官有財産ヲ賣拂貸付若ハ交換スル場合ニ於テ其ノ財産ヲ管理シ若ハ其ノ取扱ヲ爲ス官吏ハ之ヲ買受ケ又ハ自己ノ所有物ト交換スルコトヲ得ス

第十五條 此ノ規則施行ノ前ニ官有財産ノ賣拂若ハ貸付ノ契約ヲ爲シタルモノハ其ノ契約ノ滿期マテ總テ舊契約ニ依ルヘシ

貸付ノ期限ナキモノハ此ノ規則施行ノ日ヨリ三箇年以内ニ於テ此ノ規則ニ依リ更ニ契約ヲ爲スヘシ

第十六條 各省大臣ハ每十年其ノ年三月三十一日ニ現在スル所管官有財産ノ目錄ヲ調製シ其ノ年開會ノ帝國議會ニ報告ノ手續ヲ爲スヘシ

第十七條 各省大臣ハ每會計年度間ニ於ケル所管官有財産ノ増減異動報告書ヲ調製シ翌年度開會ノ帝國議會報告ノ手續ヲ爲スヘシ

第十八條 第十六條ノ目錄及第十七條ノ報告書ハ其ノ事由ニ依テ區別シ左ノ事項ヲ示スヘシ  
第一 買入ニ係ルモノハ其ノ代價

第二 賣拂ニ係ルモノハ各廳ニ於テ定メタル最低賣價實際ノ賣拂代價及目錄價格アルモノハ其ノ價格

第三 讓與交換又ハ亡失毀損等ニ係ルモノハ其ノ目錄價格

第四 交換ニ係ルモノハ其ノ交換ニ由テ得タル財産

第五 買入又ハ賣拂ノ契約ニ特別ノ條件アルモノハ其ノ條件

第十九條 此ノ規則第十六條ニ掲ケル官有財産ノ目錄ニシテ第一回ノモノハ明治二十四年三月三十一日ノ現在高キ以テ同年六月三十日マテニ之ヲ調製スヘシ但調査未濟ノ官有財産ハ調査了ルマテ其ノ概算ヲ目錄ニ掲ケヘシ

第二十條 此ノ規則ハ明治二十四年四月一日ヨリ施行ス

官有地取扱規則

(明治二十三年十一月勅令第二百七十六號)

朕官有地取扱規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
官有地取扱規則

第一條 官有地ノ賣買讓與交換及貸付ハ内務大臣之ヲ處理ス

第二條 官有地ニ關スル願書ノ指令契約ノ締結登記ノ請求收入ノ徵收及收納並訴訟ハ内務大臣地方長官ヲシテ之ヲ取扱ハシムヘシ

第三條 各廳ニ於テ官有地ヲ使用セントスルトキハ内務大臣ニ請求スヘシ

第四條 各廳ノ使用地不用ニ歸シタルトキハ内務大臣ニ還付スヘシ

第五條 甲乙兩廳ノ間ニ於テ官有地ノ使用ヲ移サントスルトキハ内務大臣其手續ヲ爲スヘシ

第六條 各廳ノ所用ニ供スル爲メ民有地ヲ寄付セントスルモノアルトキハ内務大臣受納ノ手續ヲ爲スヘシ

第七條 官有地ヲ開墾センコトヲ請フモノアルトキハ無料ニテ之ヲ貸付スヘシ但開墾成功ノ後事業者ニ於テ該地ヲ拂下クントスルトキハ豫メ契約ニ依テ代價ヲ定メ置クヘシ

第八條 官有地ト民有地ノ交換ハ兩地ノ坪數及價格相均シキ者ニアラザレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第九條 借地人ハ特ニ許可ヲ受クルニアラサレハ其地ヲ當初借用ノ目的以外ニ使用スルコトヲ得ス

借地人前項ノ規定ニ違反スルトキハ地方官ハ其使用ヨリ生シタル損害ヲ賠償セシメ返地ヲ命スルコトヲ得

第十條 借地人官ノ許可ヲ得テ土地ノ原形ヲ變シタルトキハ借地滿期ニ至リ自費ヲ以テ之ヲ原形ニ復シ返納スヘシ但特ニ許可ヲ受ケタルモノハ此限ニアラス

第十一條 官ニ屬スル公有地及公有水面ハ其公用ヲ廢シタルニアラサレハ賣拂讓與交換又ハ貸付スルコトヲ得ス但公衆ノ妨害トナラサル限りハ公用ニ供シタル儘有料又ハ無料ニテ特ニ其使用ヲ許スコトヲ得

第十二條 官ニ屬スル公有水面ヲ埋立テ民有地ト爲サンコトヲ請フモノアルトキハ公衆ノ妨害トナラサル部分ニ限り之ヲ許スコトヲ得

第十三條 官ニ屬スル私有水面ノ賣拂讓與交換貸付及使用ハ本令ニ定ムル土地ノ規定ニ準據スヘシ

第十四條 隨意ノ契約ニ依リ官ニ屬スル土地又ハ水面ノ賣拂讓與交換又ハ有料貸付有料使用ヲ爲サントスルトキハ地方官其評價ヲ爲サシムヘシ

既ニ貸付シ又ハ使用セシメタル土地又ハ水面ヲ引續キ貸付シ又ハ使用セシムル場合ニ於テモ亦前項ニ準用ス

第十五條 官有地ニ關スル事項ニシテ本令ニ規定セサルモノハ官有財産管理規則ニ依ル

第十六條 本令ハ勅令ヲ以テ特ニ規定シタルモノ及官有森林原野ニ適用セス

第十七條 官有地臺帳ニ關スル規定ハ別ニ之ヲ定ム

第十八條 此ノ規則ハ明治二十四年四月一日ヨリ施行ス

官有地特別處分規則

(明治二十三年七月勅令第三百三十五號)

朕官有地特別處分規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官有地特別處分規則

第一條 內務大臣ハ左ノ場合ニ限り官有地ヲ競争ニ付セス隨意ノ契約ヲ以テ貸渡又ハ賣渡スコトヲ得

一 直接公用ニ供スル爲又ハ公共ノ利益トナル事業ノ爲府縣郡市町村及公共組合又ハ其他ノ起業者ニ官有地ヲ貸渡又ハ賣渡ストキ

二 不用ニ屬スル官有地一箇所ノ坪數百五十坪ニ滿タス其評定價格二百圓以内ノモノヲ賣渡又ハ其貸渡料一箇年五圓以内ニシテ貸渡期限五箇年以内ノモノヲ貸渡ストキ但望人二名以上アルトキハ此限ニアラス

三 鑛山ニ於ケル鑛物運搬道路、冷溫泉場ニ於ケル汲泉場又ハ導泉敷地ノ如キ官許ヲ與ヘタル主タル事業ニ直接附隨シ必要關クヘカラスト認メタル官有地ヲ其事業者ニ貸渡又ハ賣渡ストキ

四 會計法施行以前土地ノ形質ヲ變更シ又ハ建物ヲ建設スルカ爲貸渡シタル官有地ヲ其借地人ニ賣渡シ又ハ引續キ貸渡ストキ

第二條 直接公用ニ供スル官有地ヲ特ニ府縣郡市町村又ハ公共組合ノ直接公用ニ供スルトキハ借

地料ヲ徵收セサルモノトス

第三條 府縣郡市町村又ハ公共組合ニシテ直接公用ニ供スル官有地ノ修理保存費ヲ負擔スルモノハ其直接公用ヲ廢スルトキ官有財産管理上必要ノモノヲ除ク外之ヲ其費用負擔者ニ無代下付ス府縣郡市町村又ハ公共組合ニ於テ其土地ヲ賣拂ハントスルトキハ隣接地主ハ先買ノ權ヲ有スルモノトス

第四條 北海道官有未開ノ土地並官有森林原野ニハ本令ヲ適用セス

### 官有森林原野及特別處分規則

(明治二十三年四月勅令第六十九號)

朕官有森林原野及產物特別處分規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官有森林原野及產物特別處分規則

第一條 農商務大臣ハ左ノ場合ニ限り官有森林原野及其產物ヲ競争ニ付セス隨意ノ契約ヲ以テ賣渡又ハ賣却スルコトヲ得

- 一 官廳又ハ公共ノ用ニ供スル爲メ森林原野ヲ賣渡シ若クハ賣渡シ及其建築材料ヲ賣渡ストキ
- 二 開墾若クハ牧畜ノ爲メ森林原野ヲ賣渡シ若クハ賣渡ストキ
- 三 鑛業ノ爲メ原野ヲ賣渡シ若クハ建築材料又ハ薪炭材ヲ賣渡ストキ
- 四 植樹ノ爲メ森林原野ヲ賣渡ストキ
- 五 非常ノ災害ニ罹リタル地方人民ノ爲メ建築材料ヲ賣渡ストキ

六 從來ノ慣行ニ依リ地元人民ニ木竹薪炭材下草秣小柴若クハ土石ヲ賣渡ストキ

七 部分林ヲ仕付人ニ賣拂フトキ

八 社寺建築營繕ノ爲メ該社寺土地ノ木材若クハ土石ヲ賣渡ストキ

九 地押調査ニ由リ發見シタル開墾地ヲ其開墾人ニ賣渡ストキ

十 建築其他ノ用ニ供スヘキ土石ヲ發見シタル場合ニ於テ之ヲ其發見人ニ賣渡ストキ

十一 季節アル生產物ヲ賣拂フトキ

十二 開墾牧畜若クハ植樹ノ爲メ賣渡シタル森林原野ノ區域内ニアル產物ヲ其借受人ニ賣拂フトキ

十三 林業附帶ノ用ニ供スル爲メ森林原野ヲ賣渡シ若クハ產物ヲ賣渡ストキ

十四 部分方法ニ由リ林產物製造ノ爲メ其原料ヲ請負人ニ賣渡ストキ

十五 見積借地料一箇年金貳百圓ニ超ヘサル森林原野ヲ賣渡ストキ

十六 拾町歩以下ニシテ見積代價金貳百圓ニ超ヘサル森林原野ノ民有地又ハ道路河川ニ介在セルモノヲ接續地ノ所有者ヘ賣拂フトキ

十七 見積代價金貳百圓ニ超ヘサル主副產物ヲ賣拂フトキ(明治二十四年勅令第二百二號ヲ以テ本號改正)

十八 河海沼湖濊池ノ埋立ニ要スル土石ヲ賣渡ストキ(明治二十三年勅令第二百八十二號ヲ以テ追加)

第二條 農商務大臣ハ競争入札ニ付シタル物件ノ豫定價格ニ達セス該入札ヲ取消シタル場合ニ於テ爾後三十日內ニ豫定價格ヨリ低カラサル代價ヲ以テ同一物件ノ拂下ヲ望ム者アルトキハ隨意

之ヲ賣拂フコトヲ得

第三條 農商務大臣ハ相當ノ年限ヲ定メ社寺土地官林ノ全部又ハ幾分ヲ該社寺ニ委託シ其林地ノ使用ヲ許可シ又ハ其林地ノ產物ヲ下附スルコトヲ得 (同上法令ヲ以テ本條追加)

第四條 農商務大臣ハ社寺土地官林又ハ特別ノ緣故アル官有森林原野ニシテ存置ヲ要セスト認メタルモノハ其社寺又ハ其緣故アル者ニ限り隨意ノ契約ヲ以賣渡スコトヲ得 (明治二十四年勅令第六十六號ヲ以テ本條追加)

第五條 農商務大臣ハ森林保護ノ爲メ必要ト認ムルトキハ制限ヲ付シ地元人民ニ森林ノ副產物ヲ無料ニテ採取セシムルコトヲ得 (明治二十四年勅令第二百二號ヲ以テ本條追加)

第六條 農商務大臣ハ森林手入ノ爲メ採取シタル產物ノ全部又ハ一部ヲ手入料トシテ下付スルコトヲ得 (同上)

### 帝國議會用官有財產事務掌理方

(明治二十四年二月勅令第十五號)

朕帝國議會ノ用ニ供スル官有財產ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 帝國議會ノ用ニ供スル官有財產ニ關スル行政事務ハ各院書記官長之ヲ掌ル

第二條 前條事務ノ指揮監督ハ大藏大臣之ヲ行フ (明治二十七年勅令第六十一號ヲ以テ內務大臣トアリシヲ大藏大臣ト改ム)

### 陸軍給與ニ關スル委任經理

(明治二十三年三月法律第二十七號)

朕陸軍給與ニ關スル委任經理ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 陸軍軍隊ノ糧食被服消耗品陣營具及馬匹ニ係ル給與ハ其定額ヲ各隊ニ交付シ隊長ニ經理ヲ委任スルコトヲ得

第二條 陸軍諸學校生徒ニ屬スル給與其他軍隊ニ準據スヘキ必要アルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定メ經理ヲ委任スルコトヲ得

第三條 委任經理ニ係ル給與ノ殘金ハ各各其費目ニ屬スル積立金ト爲シ便宜之ヲ使用スルコトヲ得

第四條 委任經理ニ屬スル廢物賣却代及損壞遺失等ノ補償金ハ各各其經理費ニ充ルコトヲ得

第五條 委任經理ニ係ル會計ノ檢査ハ會計檢査院法第十六條ニ依ル

### 保管金規則

(明治二十三年三月法律第一號)

朕保管金規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 法律勅令又ハ從來ノ規則ニ依リ政府ニ於テ保管スル公有金私有金ハ左ノ計算法ニ從ヒ滿三十年ヲ過キテ拂戻ノ請求ナキトキハ政府ノ所得トス但別ニ法律ヲ以テ失權ノ期限ヲ定メタルモノハ各其定ムル所ニ依ル

第一 保管義務解除ノ期アルモノハ其義務ヲ解除シタル翌日ヨリ起算ス

- 第二 保管義務解除ノ期ナキモノハ保管ノ翌日ヨリ起算ス
- 第三 訴訟事件ノ爲拂戻ヲ請求スル能ハサル場合ニ於テハ裁判確定ノ翌日ヨリ起算ス
- 第二條 保管金ハ法律勅令又ハ從來ノ規則若クハ契約ニ依ルノ外利子ヲ付セス
- 第三條 保管金ノ證書ハ賣買讓與又ハ書入質入スルコトヲ得ス
- 第四條 保管金ノ受渡ニ屬スル證書ハ證券印稅ヲ納ムルニ及ハス

◎ 保管物取扱規程 (明治二十六年九月大藏省令第二十號)

明治二十三年大藏省令第八號保管金取扱規程左ノ通改正シ本年十一月一日ヨリ施行ス  
保管物取扱規程

- 第一條 明治二十三年勅令第二號明治二十六年勅令第七十號ニ依ル金錢有價證券ノ保管受渡ハ此規程ニ依リ金庫ニ於テ取扱フモノトス
- 第二條 現金又ハ有價證券ハ權利者ヨリ寄托スルモノト官廳ヨリ寄托スルモノトノ二種ニ分チ之ヲ取扱フヘシ
- 第三條 取扱官廳ニ於テ權利者ヲシテ現金又ハ有價證券ヲ寄托セシムルトキハ第一號書式ノ寄托通知書ヲ製シ之ヲ權利者ヘ交付スヘシ
- 第四條 權利者ハ現金又ハ有價證券ニ前條ノ寄托通知書ヲ添ヘ之ヲ金庫ヘ差出スヘシ
- 第五條 金庫ニ於テ前條ノ寄托ヲ受ケタルトキハ第二號書式ノ保管證書ヲ製シ之ヲ權利者ヘ交付スヘシ
- 第六條 官廳ニ於テ現金又ハ有價證券ヲ寄托スルトキハ第三號書式ノ送付書ヲ製シ之ヲ現金又ハ有價證券ニ添ヘ金庫ヘ送付スヘシ

- 第七條 金庫ニ於テ前條ノ寄托ヲ受ケタルトキハ第四號書式ノ領收證書ヲ製シ之ヲ寄托官廳ヘ交付スヘシ
- 第八條 官廳ニ於テ數人ノ權利者ニ屬スル現金ヲ取纏メ寄托スルトキハ其送付書ニ第五號書式ノ仕譯書ヲ添付スヘシ但權利者不分明ナル者ハ其旨ヲ送付書又ハ仕譯書ニ記入スヘシ
- 第九條 取扱官廳ハ本規程ニ依リ現金又ハ有價證券等受渡ノ證明ニ供スル爲メ豫メ其廳取扱主任官ノ印鑑ヲ金庫ヘ送付スヘシ廳印ノ更改主任官ノ改印又ハ主任官ノ變更ノ場合ニ於テモ亦同シ
- 有價證券ニ屬スル利札交付ノトキ其受渡ヲ證明スル爲メ權利者ハ有價證券寄托ノ際印鑑ヲ金庫ヘ差出シ置クヘシ
- 第十條 權利者ニ於テ其寄托シタル現金又ハ有價證券ノ拂戻ヲ受ケントスルトキハ取扱官廳ノ裏書ヲ爲シタル保管證書ヲ得テ金庫ヘ差出シ之カ拂戻ヲ請求スヘシ
- 第十一條 取扱官廳ノ裏書アル保管證書ヲ以テ現金又ハ有價證券ノ拂戻ヲ請求スル者アルトキハ金庫ハ取扱官廳及主任官ノ印鑑ニ照合シ相違ナキモノハ之ト引換ニ現金又ハ證券ヲ交付スヘシ
- 第十二條 權利者ニ於テ官廳ヨリ寄托シタル現金又ハ有價證券ノ拂戻ヲ受ケントスルトキハ其事由ヲ具シ其取扱官廳ニ請求スヘシ
- 取扱官廳ニ於テ前項ノ請求ヲ審査シ相當ト認ムルトキハ金庫ニ宛タル第六號書式ノ拂渡證書ヲ製シ之ヲ權利者ヘ交付スヘシ



權利者ニ於テ前項ノ拂渡證書ヲ受ケタルトキハ之ヲ金庫ヘ差出シ現金又ハ證券ノ拂渡ヲ受クヘシ

第十三條 金庫ハ前條ノ拂渡證書ヲ以テ現金又ハ有價證券ノ拂渡ヲ請求スル者アルトキハ取扱官廳及主任官ノ印鑑ニ照合シ相違ナキモノハ之ト引換ニ現金又ハ證券ヲ交付スヘシ

第十四條 政府ノ所有ニ歸シタル保管金ハ左ノ手續ニ依リ取扱フヘシ  
一 保管證書ヲ發シタルモノハ取扱官廳ニ於テ該證書ノ裏面ニ事由ヲ記載シ收入官吏ヲシテ歳入トシテ金庫ヘ納付セシムヘシ

一 保管證書ヲ發セサルモノハ大藏大臣ノ令達ニ依リ金庫ニ於テ歳入ヘ編入スヘシ

第十五條 取扱官廳ニ於テ保管金ノ幾分ヲ歳入ト爲シ又ハ幾分ヲ權利者ニ拂戻スコトヲ要スルトキハ保管證書ニ事由ヲ付シ保管證書ノ分割ヲ金庫ニ請求スヘシ

第十六條 金庫ニ於テ前條ノ請求ヲ受ケタルトキハ新ニ保管證書ヲ製シ舊保管證書ト交換スヘシ  
第十七條 保管金ノ利子ハ毎年三月三十一日ヲ期トシテ之カ計算ヲ爲スヘシ

權利者ニ於テ保管金利子ノ拂渡ヲ請求スルトキハ第七號書式ノ請求書ヲ取扱金庫ヘ差出スヘシ  
第十八條 大藏省ハ前條ノ請求書ニ依リ第八號書式ノ通知書ヲ製シ取扱官廳ヲ經テ權利者ヘ交付シ請求書ハ案内トシテ之ヲ日本銀行ヘ送付スヘシ

權利者ニ於テ前項ノ通知書ヲ受ケタルトキハ式ノ如ク裏面ニ領收ノ證印ヲ爲シ之ヲ其通知書ニ記載シタル日本銀行本支店又ハ其代理店ヘ差出シ現金ノ拂渡ヲ受クヘシ

第十九條 官廳又ハ權利者ニ於テ其寄托シタル有價證券ニ屬スル利子ノ渡期ニ至リ之カ利札ノ交付ヲ請求セントスルトキハ第九號書式ノ請求書ヲ金庫ヘ差出スヘシ

金庫ニ於テ前項ノ請求ヲ受ケタルトキハ第十號書式ノ領收證書ヲ製シ之ト引換ニ利札ヲ交付スヘシ  
第二十條 保管證書又ハ領收證書ヲ亡失シタルカ爲メ官廳又ハ權利者ヨリ保管ノ證明方チ金庫ニ請求スルトキハ金庫ニ於テハ第十一號書式ノ證明書ヲ製シ之ヲ官廳又ハ權利者ヘ交付スヘシ  
保管證書又ハ領收證書ヲ汚染毀傷シ證書ノ要點ヲ見認メ難キニ至リタルカ爲メ官廳又ハ權利者ヨリ之カ引換チ金庫ニ請求スルトキハ金庫ハ更ニ保管證書又ハ領收證書ヲ製シ舊證書ト交換スヘシ

第二十一條 官廳ニ於テ金庫ヘ寄托シタル保管金ニシテ權利移轉又ハ其他ノ事故ノ爲メ其送付書ニ記載シタル期滿失効ノ年月日(本文期滿失効ノ年月日トハ各其據ルヘキ法律規則ニ依リ算出シタルモノヲ云フ)ニ變更ヲ生スルトキハ即日其旨チ金庫ヘ通知スヘシ(明治二十七年大藏省令第一號ヲ以テ本條追加)

前項保管金ニシテ權利者自ラ其權利ヲ拋棄シ又ハ其他ノ事故ノ爲メ保管ノ必要ナク歳入ヘ編入スヘキモノハ其旨チ金庫ニ通知スヘシ(同上)

附 則 (明治二十七年大藏省令第一號ヲ以テ附則追加)

第二十二條 前條保管金ニシテ本令發布以前既ニ其送付書ニ記載シタル期滿失効ノ年月日ニ變更ヲ生シタルモノハ明治二十七年二月二十八日迄ニ當該官廳ヨリ其旨チ金庫ヘ通知スヘシ

第二十三條 金庫ニ於テ前條ノ通知ヲ受ケタルトキハ直ニ調査シ全ク期滿失効トナリタルモノハ計算書ヲ作リ明治二十七年三月三十一日迄ニ當該官廳ニ送付シ其證明ヲ受ケ之ヲ整理スヘシ

(附屬書式ハ之ヲ略ス)

### ◎政府保管ノ義務アル公私有金寄托方

(明治二十三年一月勅令第二號)

朕政府ニ於テ保管ノ義務ヲ有スル公私有金ニ關スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
預金規則ニ定メタルモノノ外法律勅令又ハ從來ノ規則ニ依リ政府ニ於テ保管ノ義務ヲ有スル公有  
金私有金ハ總テ大藏省「預金局」ニ寄托スヘシ  
法律勅令又ハ從來ノ規則ニ依ルノ外政府ハ公有金私有金ヲ保管セス

### ◎各官廳管理政府所有及政府保管ノ義務ヲ

有スル有價證券寄托方 (明治二十六年七月勅令第七十號)

朕各官廳ニ於テ管理スル政府所有ノ有價證券及政府ニ於テ保管ノ義務ヲ有スル有價證券寄托ノ件  
ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
各官廳ニ於テ管理スル政府所有ノ有價證券ハ保管ノ爲メ大藏省「預金局」ニ寄托スヘシ  
政府ニ於テ保管ノ義務ヲ有スル公有私有ノ有價證券ハ大藏省「預金局」ニ寄托スヘシ

### ◎預金規則

(明治十八年五月第十三號布告)

預金規則左ノ通制定ス  
預金規則

第一條 大藏省中ニ「預金局」ヲ置キ左ノ貯金積立金ヲ預リ之ヲ保管利殖セシム

第一 「驛遞局」貯金

第二 各官廳ノ成規ニ從ヒタル積立金

第三 社寺教會社其他人民ノ共有ニ係ル積立金ニシテ其請願ニ據ルモノ

第二條 預リ金取扱手續ハ「大藏卿」之ヲ定ム

第三條 預リ金ノ利子割合ハ「大藏卿」之ヲ定ム

第四條 預リ金ニ關スル損益ハ國庫ノ負擔トス

第五條 預リ金ノ證書ハ賣買讓與又ハ書入質入スルヲ得ス

第六條 預リ金ノ運用ハ日本銀行ヲシテ取扱ハシムルモノトス

第七條 「大藏卿」ハ便宜ノ地ヲ撰ミ「預金局」出張所ヲ設置シ又ハ國庫金取扱所ヲシテ預リ金受渡

ヲ取扱ハシムルコトアルヘシ

第八條 預リ金ノ受渡ニ屬スル證書ハ證券印稅ヲ納ムルニ及ハス

### ◎預金取扱規程

(明治二十六年九月大藏省令第十九號)

明治二十三年大藏省令第三十三條預金取扱規程左ノ通改正シ本年十一月一日ヨリ施行ス  
預金取扱規程

第一條 明治十八年布告第十三號明治二十三年法律第七十五號ニ依ル預金ノ保管受渡ハ此規程ニ

依リ金庫ニ於テ取扱フモノトス

第二條 預ク人ニ於テ預ク金ヲ爲ストキハ現金ニ第一號書式ノ拂込書及第二號書式ノ印鑑ヲ添ヘ

金庫へ差出スヘシ但第二回以後ノ預ケ金ヲ爲ス場合ニハ印鑑ヲ要セス  
第三條 金庫ニ於テ前條ノ現金ヲ領收シタルトキハ第三號書式ノ預金通帳ニ記入證明シ之ヲ預ケ人ニ交付スヘシ

第四條 預ケ人ニ於テ預金ヲ以テ公債證書ノ購入ヲ請求スル時ハ第四號書式ノ請求書ヲ其預ケ金ヲ爲シタル金庫へ差出スヘシ金庫ハ式ノ如ク該預リ金額ヲ記入證明シ之ヲ大藏省へ進達スヘシ

第五條 大藏省ニ於テ前條ノ請求書ヲ受ケタルトキハ請求書到達ノ日ヨリ休日ヲ除キ五日以内ニ日本銀行ヲシテ時價ヲ以テ公債證書ヲ購入シ之ヲ中央金庫へ納付セシメ其額面金高購入代價ヲ記載シタル第五號書式ノ通知書ヲ

第六條 大藏省ニ於テ預金制限超過額ヲ以テ公債證書ヲ購入スル場合ニハ日本銀行ヲシテ時價ヲ以テ購入シ之ヲ中央金庫へ納付セシメ其額面金高購入代價ヲ記載シタル第五號書式ノ通知書ヲ製シ金庫ヲ經テ之ヲ預ケ人へ送付スヘシ

第七條 中央金庫ニ於テ前二條ニ依リ日本銀行ヨリ公債證書ヲ領收シタルトキハ第六號書式ノ保管書ヲ調製シ之ヲ取扱金庫へ送付スヘシ

第八條 預ケ人ニ於テ公債證書購入濟ノ通知ヲ受ケタルトキハ該通知書ニ式ノ如ク保管證書領收ノ證明ヲ爲シ預金通帳ヲ添ヘ之ヲ金庫へ差出シ該通帳ニ購入代價ニ對スル預金仕拂ノ記入證明ヲ受ケ保管證書ヲ受取ルヘシ

第九條 預ケ人ニ於テ預金ノ拂戻ヲ要スルトキハ第七號書式ノ領收證書ニ預金通帳ヲ添ヘ之ヲ其預ケ金ヲ爲シタル金庫へ差出スヘシ

第十條 金庫ニ於テ前條ノ拂戻請求ヲ受ケタルトキハ預金通帳へ式ノ如ク記入證明シ現金ノ仕拂

ヲ爲スヘシ

官立學校及圖書館會計規則第四條ニ依ル預金ノ拂戻額及公債證書購入代金トシテ仕拂額ハ同會計資金部歳出豫算額ニ超過スルヲ得ス(明治二十七年大藏省令第六號ヲ以テ本項追加)

第十一條 預ケ人ニ於テ公債證書全部ノ受戻ヲ請求スルトキハ保管證書へ式ノ書ク裏書ヲ第八號書式ノ請求書ト共ニ中央金庫へ差出スヘシ

第十二條 預ケ人ニ於テ公債證書ノ内幾分受戻ヲ請求スルトキハ第九號書式ノ請求書ニ第十號書式ノ領收證書及保管證書ヲ添ヘ之ヲ中央金庫へ差出スヘシ

中央金庫ニ於テ前項ノ請求ヲ受ケタルトキハ保管證書ニ式ノ如ク裏書ヲ爲シ該公債證書ト共ニ返付スヘシ

第十三條 中央金庫ニ於テ前二條ノ請求ヲ受ケタルトキハ請求書到達ノ日ヨリ休日ヲ除キ五日以内ニ保管ノ公債證書ヲ交付スヘシ

書留郵便其他ノ運送便ヲ以テ遞送ヲ望ムモノアルトキハ預ケ人ノ危險ニテ之ヲ遞送スヘシ

第十四條 前條ノ遞送費ハ預ケ人ノ負擔トシ書留郵便ヲ以テ遞送ヲ要スルモノハ相當ノ郵便切手ヲ前以テ中央金庫へ送付シ其他ノ便ニヨルモノハ遞送賃金先拂ヲ以テ遞送スヘシ

第十五條 預金ノ利子ハ毎年三月末日ヲ期トシテ之ヲ計算シ其元金ニ組入ルヘシ

第十六條 元金ニ加ヘサル預金ノ利子ハ預金ノ全額ヲ拂戻ストキニ限り之方仕拂ヲ爲スモノトス

預ケ人ニ於テ前項ノ利子ヲ受取ラントスルトキハ第十一號書式ノ請求書ヲ金庫へ差出スヘシ金庫ハ式ノ如ク利子金額ヲ記入證明シ之ヲ大藏省へ進達スヘシ

第十七條 大藏省ハ前條第二項ノ請求書ニ依リ第十二號書式ノ通知書ヲ製シ金庫ヲ經テ預ケ人ヘ  
交付シ請求書ハ案内トシテ之ヲ日本銀行ヘ送付スヘシ  
第十八條 預ケ人ニ於テ前條ノ通知書ヲ受ケタルトキハ式ノ如ク裏面ニ領收ノ證印ヲ爲シ之ヲ其  
通知書ニ記載シタル日本銀行本支店又ハ其代理店ヘ差出シ現金ノ仕拂ヲ受クヘシ  
第十九條 預金ハ預ケ入タル月及拂戻ス月ハ其金額ニ利子ヲ附セス  
預金ハ十錢未満ノ端金ニ利子ヲ附セス  
第二十條 第七條ニ依リ領收シタル公債證書ノ利子ハ中央金庫ニ於テ受取り取扱ノ金庫ヲシテ之  
ヲ其所有主ノ預金ニ組入レシメ第十三號書式ノ通知書ヲ製シ金庫ヲ經テ之ヲ預ケ人ヘ送付スヘ  
シ

第二十一條 預ケ人ニ於テ前條ノ通知ヲ受ケタルトキハ預金通帳ニ該通知書ヲ添ヘ其預ケ金ヲ爲  
シタル金庫ヘ差出シ金額預ケ入ノ記入ヲ受クヘシ  
第二十二條 預ケ人ニ於テ預金金額ノ拂戻ヲ受ケタルトキハ預金通帳ヲ返付スヘシ  
第二十三條 預ケ人ニ於テ甲ノ金庫ヨリ交付シタル預金通帳ヲ以テ乙ノ金庫ニテ受渡ヲ請求スル  
トキハ第十四號書式ノ申込書及印鑑ニ預金通帳ヲ添ヘ乙金庫ヘ差出シ番記號ノ書換ヲ受クヘシ  
第二十四條 預金ノ受渡ニ關スル書類ニハ共有ニ係ルモノハ其總代人二名調印シ又社寺教會會社  
ニアリテハ其名稱ヲ記シ且押印ヲ爲シ其擔當者一名記名調印スヘシ但法人タル會社ニアリテハ  
擔當者ノ記名調印ヲ要セス

第二十五條 前條ノ社寺教會會社ニシテ名義變更改印位置移轉シタルトキハ其旨金庫ヘ届出ヘシ  
擔當者總代人氏名變換改印轉住ノトキ亦同シ

前項改印ノ届書ニハ印鑑ヲ添フヘシ  
第二十六條 前條ノ擔當者及總代人變更シタルトキハ前任者連署ノ届書ニ後任者ノ印鑑ヲ添ヘ金  
庫ヘ差出スヘシ但前任者連署シ能ハサルトキハ證人ヲ立ツヘシ  
(書式ハ之ヲ略ス)

前項改印ノ届書ニハ印鑑ヲ添フヘシ  
第二十六條 前條ノ擔當者及總代人變更シタルトキハ前任者連署ノ届書ニ後任者ノ印鑑ヲ添ヘ金  
庫ヘ差出スヘシ但前任者連署シ能ハサルトキハ證人ヲ立ツヘシ  
(書式ハ之ヲ略ス)

### 預金ニ制限ヲ置キ整理公債證書ニ交換方

(明治二十三年八月法律第七十五號)

朕預金ニ制限ヲ置キ整理公債證書ニ交換ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
第一條 預金規則第一條第二條第三條ニ依リ「預金局」ニ預リタル金額三百圓以上ニ達スルトキハ  
預ケ人ノ請求ニ依リ整理公債證書ヲ購入シテ之ヲ預ケ人ニ交付スルコトヲ得  
第二條 前條預金ノ額二千圓ヲ超過スルトキハ「預金局長」ハ其超過額ヲ以テ整理公債證書ヲ購入  
シテ之ヲ預ケ人ニ交付スルコトヲ得  
第三條 第二條ニ依リ購入シタル整理公債證書ハ預金ノ全額ヲ仕拂又ハ拂戻シタル場合ヲ除クノ  
外所有者ノ望ニ依リ之ヲ預金局ニ保管スルコトヲ得  
第四條 本法ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行ス

### 供託規則 (明治二十三年七月勅令第百四十五號)

朕供託規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
供託規則

第一條 法律ノ規定ニ依リ供託スル所ノ金錢有價證券ハ總テ大藏省「預金局」ニ於テ之ヲ保管スヘシ

第二條 「供託シタル金錢ハ拂込ノ日ヨリ六十日ヲ過ルトキハ拂込ノ翌月ヨリ拂渡請求ノ前月マテ通常預金ノ利子ヲ付スヘシ」

第三條 供託ヲ爲サントスルトキハ大藏大臣定ムル所ノ式ニ依リ供託書ヲ製シテ供託物ニ添ヘ其申込ヲ爲スヘシ

第四條 供託者ハ民法財産編第四百七十七條債權擔保編第二百六十八條及商法第七百四十條ノ場合ニ於テハ其供託シタル旨ヲ債權者ニ通知スヘシ

第五條 供託物ハ供託者ノ指定シタル者ニ拂渡シ又ハ裁判所ノ通知ニ依リ拂渡スヘキモノトス但供託者ニ於テモ其受領スヘキ理由アルコトヲ證明シ返戻ヲ請求スルコトヲ得

第六條 有價證券ノ償還金利子又ハ配當金ヲ受取ントスルトキハ有權者ヨリ大藏省「預金局」ニ請求スヘシ此請求ナキトキハ政府ハ損害ノ責ニ任セサルヘシ

第七條 前條ノ請求ニ依リ大藏省「預金局」ニ於テ受取リタル償還金利子又ハ配當金ハ代供託物又ハ附屬供託物トシテ之ヲ保管スヘシ

供託物取扱規程 (明治二十六年九月大藏省令第二十一號)

明治二十三年大藏省令第三十九號供託物取扱規程左ノ通改正シ本年十一月一日ヨリ施行ス

供託物取扱規程

第一條 明治二十三年勅令第四百四十五號ニ依リ保管スル供託物ノ保管受渡ハ此規程ニ依リ金庫

ニ於テ取扱モノトス

第二條 供託者ニ於テ金錢有價證券ヲ供託セントスルトキハ其物件ニ左ノ事項ヲ記載シタル第一號書式ノ供託書ニ通テ添ヘ金庫へ差出スヘシ但金錢ト有價證券トハ各別ニ供託書ヲ調製スヘシ

第一 供託者ノ住所氏名若シ代人ヲ用ユルトキハ尙代人ノ住所氏名官吏ノ公務上取扱ニ係ルモノハ其官廳名官氏名

第二 金錢ハ其金額

有價證券ハ其種類記號番號券面ノ金額枚數但種類其他多敷ニテ一紙ニ認メ難キトキハ別冊ニ調製添付スルモ妨ナシ

第三 供託ヲ爲スヘキ法律ノ條項

供託ノ事由但裁判中ノ事件ニ係リ供託ヲ爲ストキハ尙其件名及其裁判所名ヲ記スヘシ

第四 年月日

第三條 金庫ニ於テ前條ノ供託書ヲ受ケタルトキハ其物件ヲ供託書ニ照シ之ヲ受領シ其一通ニ受領ノ旨記載捺印シ供託者ヘ交付スヘシ

第四條 供託物ハ郵便ヲ以テ寄託スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ金錢ハ寄託スヘキ金庫所在ノ銀行又ハ郵便局ニ於テ拂渡スヘキ送金手形若クハ爲換券等ヲ以テ寄託スルコトヲ得

第五條 金庫ニ於テ前條ノ送金手形若クハ爲換券ヲ以テ寄託ヲ受ケタルトキハ之ヲ其現金ニ交換シタル後ヲ第三條ニ於ケル受領ノ手續ヲ爲スヘシ

第六條 供託者ニ於テ供託物ノ分割ヲ要スルトキハ更ニ分割シタル供託書各通ヲ調製シ第二號

書式ノ請求書ニ第三條及第九條ノ受領證ヲ添ヘ金庫ヘ差出スヘシ

第七條 金庫ニ於テ前條ノ分割請求ヲ受ケタルトキハ更ニ差出シタル供託書ニ第三條ニ於ケル受領ノ手續ヲ爲シ新受領書ヲ舊受領證ト引換ニ交付スヘシ

第八條 供託者ニ於テ有價證券ノ償還金利子又ハ配當金ノ受取方ヲ要スルトキハ第三號書式ノ請求書ニ通テ調製シ委任狀ヲ添ヘ之ヲ金庫ヘ差出スヘシ

第九條 金庫ニ於テ前條ノ請求ニ依リ償還金利子又ハ配當金ヲ受取リタルトキハ償還金ハ代供託物トシ利子又ハ配當金ハ附屬供託物トシテ之ヲ領收シ請求書ノ一通ニ受領ノ旨記載捺印シ請求者ヘ交付スヘシ

第十條 供託者ニ於テ供託物ノ全部又ハ幾分ノ拂渡又ハ返戻ヲ請求スルトキハ其事由ヲ記載シタル第四號書式ノ請求書ニ第三條及第九條ノ受領證ヲ添ヘ金庫ヘ請求スヘシ

其全部拂戻ノトキハ式ノ如ク與書ヲ爲シタル受領證幾分拂戻ノトキハ第五號書式ノ受取證ヲ差出スヘシ但供託者ニ於テ返戻ヲ受ケル場合ニ官廳ノ證明書ヲ要スルモノハ其證明書ヲ第四號請求書ニ添付スヘシ

第十一條 裁判所ニ於テ裁判ノ結果等等ニ依リ供託物ノ分割拂渡ヲ要スルトキハ第六號書式ノ請求書ニ第三條及第九條ノ受領證ヲ添ヘ之ヲ金庫ヘ送付シ同時ニ第七號書式ノ拂戻證書ヲ調製シ之ヲ受取人ヘ交付スヘシ

第十二條 受取人ニ於テ前條ノ拂戻書ヲ受ケタルトキハ其末尾ニ式ノ如ク領收ノ旨記載捺印シ之ヲ金庫ヘ差出シ拂渡ヲ受ケヘシ

第十三條 金庫ニ於テ第十條及第十二條ノ拂戻又ハ返戻ノ請求ヲ受ケタルトキハ供託物ヲ受取人

ヘ交付スヘシ

金庫ニ於テ裁判所ノ通知ニ依リ供託物ノ全部ヲ一時ニ拂渡ストキハ式ノ如ク與書ヲ爲シタル第三條及第九條ノ受領證ト引換ニ供託物ヲ受取人ヘ交付スヘシ

金庫ニ於テ裁判所ノ通知ニ依リ供託物ノ内幾分ヲ拂戻ストキハ其送付ヲ受ケタル第三條及第九條ノ受領書ニ式ノ如ク内渡ノ旨記入捺印シ受取人ヨリ第五號書式ノ受取證ヲ徴シ其供託物ヲ交付スヘシ

第十四條 供託者ニ於テ明治二十六年十一月三十日以前ニ屬スル供託金ノ利子ヲ受ケルニハ其元金仕拂ノ後チ第八號書式ノ請求書ヲ金庫ヘ差出スヘシ金庫ハ式ノ如ク利子金額ヲ記入證明シ之ヲ大藏省ヘ進達スヘシ

第十五條 大藏省ハ前條ノ請求書ニ依リ第九號書式ノ通知書ヲ製シ金庫ヲ經テ請求人ヘ交付シ請求書ハ案内トシテ之ヲ日本銀行ヘ送付スヘシ

第十六條 請求人ニ於テ前條ノ通知書ヲ受ケタルトキハ式ノ如ク裏面ニ領收ノ證印ヲ爲シ之ヲ其通知書ニ記載シタル日本銀行本支店又ハ其代理店ヘ差出シ現金ノ仕拂ヲ受ケヘシ  
(書式ハ之ヲ略ス)

金庫規則

(明治二十二年十二月勅令第二百二十六號)

朕金庫規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

金庫規則

第一條 金庫ハ國庫ニ於テ保管出納スル現金ヲ取扱フ所トス

第二條 金庫ヲ分テ左ノ三種トス

第一 中央金庫

第二 本金庫

第三 支金庫

第三條 東京ニ中央金庫ヲ置キ地方ニ本金庫及支金庫ヲ置ク(明治二十八年勅令第百二十九號ヲ以テ全條改正)

本金庫支金庫ノ位置及各金庫ノ出納區域ハ大藏大臣之ヲ定ム

第四條 金庫ハ大藏大臣之ヲ管理ス

第五條 中央金庫ハ各地ノ本金庫ヲ統轄シ本金庫ハ支金庫ヲ統轄ス但本金庫ヲ置カサル地方ノ支

金庫ハ中央金庫之ヲ總轄ス(同上法令ヲ以テ本條改正)

第六條 中央金庫本金庫支金庫ノ現金ノ保管出納ハ日本銀行ヲシテ取扱ハシム

第七條 日本銀行ハ本金庫支金庫ノ現金ノ保管出納ヲ取扱フ爲メ各地ニ其支店出張店又ハ代理店ヲ設置スヘシ(同上)

第八條 日本銀行ノ支店長又日本銀行ノ代理店長ハ金庫出納役ノ代理人トシテ其事務ヲ分擔スヘシ但代理店ノ支店ニ於テ金庫ノ事務ヲ取扱フ時ハ代理店長其支店長ニ代理ノ事務ヲ委囑スヘシ

第九條 日本銀行ハ第七條ニ據リ各地ノ代理店ヲ定メントスルトキハ大藏大臣ノ認可ヲ要ス

第十條 大藏大臣ハ検査官吏ヲ派出シ何時ニテモ金庫ノ金櫃帳簿ヲ検査スルコトヲ得

此場合ニ於テハ日本銀行本支店出張店代理店タル銀行全部ノ金櫃帳簿ヲ併セテ検査スルコトアルヘシ(同上)

第十一條 日本銀行ハ中央金庫本金庫支金庫ノ現金ノ保管出納ニ付政府ニ對シ一切ノ責任ヲ有ス  
第十二條 金庫ニ於テ備フヘキ帳簿ノ種類其規程出納ノ順序及金庫ノ検査規程ハ大藏大臣ノ定ムル所ニ依ル  
第十三條 本規則ハ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス

### 金庫検査規程 (明治二十二年十二月大藏省令第十七號)

金庫検査規程左ノ通り相定ム

金庫検査規程

第一條 金庫ノ検査ハ定時及臨時ニ之レヲ施行ス

第二條 定時検査ハ毎年三月三十一日(當日ノ出納ヲ結了セシ處ヲ以テ検査ス)臨時検査ハ金庫出納役及其代理人交替スルトキ若シクハ大藏大臣必要ト認ムルトキニ於テ之ヲ施行ス

第三條 検査官吏中央金庫若クハ本金庫ハ臨檢ノ節ハ出納役若クハ其代理人ヨリ其金庫現金出納原籍ノ計算表及現金殘高書ヲ徴シ之ヲ該原簿ノ各科目及各補助簿ノ員額ニ對照シ又現金科目ノ員額ト現金種類別簿ト其金櫃ニ保管スルノ所ノ現在金ト對查スヘシ

支金庫ハ臨檢ノ節ハ其出納役代理人ヨリ各帳簿ノ出納金額及現金殘高書ヲ徴シ之ヲ各帳簿ニ對照シ殘高書ノ金額ト現金受拂簿ノ殘金額ト金櫃ニ保管スル所ノ現在金ト對查スヘシ

検査官吏前各項ノ對查ヲ了シタルトキハ檢定書二通ヲ製シ金庫出納役若シクハ其代理人ヲシテ之レニ署名捺印セシメ其一通(即チ甲號)ハ金庫出納役若シクハ其代理人ヘ交付スヘシ

第四條 検査官吏ハ金庫ノ検査ヲ了シタルトキハ検査報告書ヲ作り之レニ第三條第一項ノ現金出

納原簿ノ計算表及現金殘高書同條第二項ノ支金庫各帳簿ノ出納金額及現金殘高書同條第三項ノ檢定書(即チ乙號)ヲ添付シ定時検査ニ係ルモノハ其年四月三日迄ニ臨時検査ニ係ルモノハ直ニ其地ヲ發シ大藏大臣ニ送付スヘシ  
第五條 検査官吏金庫へ臨檢ノトキハ大藏大臣ノ命令書ヲ携帶シ之ヲ金庫出納役若クハ其代理人ニ示スヘシ

●國庫金出納上一時貸借方 (明治二十七年六月法律第十六號)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル國庫金出納上一時貸借ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
第一條 政府ハ國庫金出納上一會計年度間餘裕アルトキハ相當ノ利子ヲ徵シテ之ヲ當座預又ハ定期預トシテ日本銀行ニ預ケ入ルルコトヲ得  
第二條 政府ハ國庫金出納上一會計年度間一時不足ヲ生スルトキハ相當ノ利子ヲ附シ日本銀行ヨリ借入ヲ爲スコトヲ得  
第三條 前條ニ依リ政府ノ借入ルルコトヲ得ヘキ金額ハ大藏省證券發行額ト合セテ當該年度該證券ノ發行最高額ヲ超過スルコトヲ得ス

●出納官吏身元保證金納付方 (明治二十三年一月勅令第四號)

朕出納官吏身元保證金ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
第一條 左ノ出納官吏ニシテ其取扱金額一箇年五百圓以上又ハ常時保管スル物品ノ價格千圓以上ニ達スルモノハ身元保證金ヲ納ムヘシ但兵備品ノ出納ヲ取扱フ武官ハ本條ノ限ニアラス (明治

二十四年勅令第五十一號ヲ以テ但書追加)

- 第一 現金ノ領收ヲ常職トスル官吏
- 第二 常時現金前渡ヲ受クル官吏
- 第三 物品會計官吏
- 第二條 身元保證金ハ就職ノ時納付スヘキモノトス但現ニ明治二十三年四月一日ニ在職セル出納官吏ニ限り明治二十三年四月以後明治二十八年三月マテ五箇年間ヲ期シ其身元保證金額ヲ平均シ毎年四期又ハ毎月ニ之ヲ納付セシムヘシ  
前項明治二十三年四月一日ニ在職セル出納官吏ニシテ土地若クハ公債證書ヲ以テ身元保證金ニ代用セントスルモノハ明治二十三年九月マテ一時ニ納付セシムヘシ
- 第三條 身元保證金ニ代用セントスル公債證書ハ有利足ノモノヲ以テシ明治二十三年三月中東京取引所平均ノ相場ニ依リ爾後五箇年毎ニ其年三月中ノ同所平均相場ニ依リ其價格ヲ改定スヘシ但明治二十三年三月以後新ニ發行シタル公債證書ノ價格ハ身元保證金納付前月ノ東京取引所ノ平均相場ニ依リ爾後本條ノ期限ト同時ニ其價格ヲ改定スヘシ
- 第四條 身元保證金ニ代用セントスル土地ノ價格ハ總テ土地臺帳ニ登記ノ價格ニ依ルヘシ
- 第五條 會計規則第百五條第二項ニ依リ身元保證金ニ代用シタル公債證書若クハ土地ヲ公賣スルトキハ其公賣公告入費ハ損失金ノ辨償ヲ命セラレタル出納官吏ヲシテ辨償セシムヘシ
- 第六條 (明治二十六年勅令第二百四號ヲ以テ本條削除)

●出納官吏現金取扱規則 (明治二十二年十月大藏省令第十三號)



出納官吏現金取扱規則左ノ通り相定ム  
出納官吏現金取扱規則

第一章 義務委托

第一條 金庫所在ノ出納官吏ハ其取扱フ所ノ現金ヲ保管ノ爲メ其地ノ金庫ニ委托スヘシ  
第二條 前條ニ據リ委托ヲ爲シタルトキハ出納官吏ハ其資格氏名ヲ記シタル印鑑ヲ金庫ニ送付スヘシ(明治二十三年大藏省令第四十一號ヲ以テ改正)

第三條 出納官吏ヨリ保管金ノ拂込ヲナストキハ金庫ハ其保管證書ヲ製シ保管金引出切符用紙ヲ添ヘ現金ト引換ニ之ヲ出納官吏ニ交付スヘシ(同上)

第四條 出納官吏ノ職務ヲ任命シタル當該官ハ其義務委托ヲナスヘキ出納官吏ノ資格氏名ヲ金庫ヘ通知スヘシ(同上法令ヲ以テ本條改正)但陸軍省海軍省ノ出納官吏資格氏名ハ其所屬長官ヨリ通知スヘシ

第五條 金庫ハ前條出納官吏資格氏名ノ通知ヲ受クルニ非サレハ現金ノ仕拂ヲナスヘカラス(同上)

第六條 出納官吏ハ保管金ノ支拂金庫ニ請求スルトキハ總テ引出切符ヲ以テスヘシ

第七條 出納官吏ハ其委托シタル保管金ト同種ノ貨幣ヲ以テ仕拂ヲ請ハントスルトキハ拂込ノ際特ニ之ヲ金庫ニ求ムヘシ拂込ノ際特別ノ請求ナキモノハ總テ有合ノ通貨ヲ以テ仕拂フヘシ

第八條 出納官吏ハ其委托シタル保管金ヲ以テ收入又ハ返納ノ爲メ金庫ニ拂込ヲサントスルトキハ引出切符ヲ以テ拂込ヲナスヘシ

第九條 (明治二十六年大藏省令第二十五號ヲ以テ本條削除)

第十條 陸海軍隊費ニシテ現金仕拂ヲ要スル場合及廳中雜費工事費ニシテ小口ノ現金仕拂ヲ要スル場合ニ於テハ金庫所在地ニアリテモ所要ノ金額ニ限り本規則第二章ニ據リ現金ヲ保管スルコトヲ得

前項所要ノ金額ハ仕拂命令官之ヲ定ム

第二章 隨意保管

第十一條 金庫ノ設ナキ場所ニ於テ現金ヲ保管スル所ノ出納官吏ハ堅牢ナル函ヲ備ヘ之ニ其保管ニ係ル現金及ヒ出納ノ帳簿ヲ藏置スヘシ

二人以上共同責任ヲ以テ現金ヲ保管スル場合ニ於テハ二箇以上ノ鎖鑰ヲ有スル堅牢ノ函ヲ備ヘ出納官吏其鎖鑰ヲ分管スヘシ

出納官吏現金ヲ携帶シテ旅行スル場合ニ於テハ前二項ニ據ラス相當ノ保護法ヲ設クルコトヲ得

第十二條 出納官吏ノ保管ニ係ル現金ハ私有金ト混スルヲ得ス

第十三條 出納官吏他ノ公金ノ出納ヲ兼掌スルトキハ其現金ヲ官金ト同一ノ函中ニ藏置スルコトヲ得

第十四條 出納官吏ハ第十一條ニ據リ現金保管ヲナシ難キ場合ニ於テハ自己ノ責任ヲ以テ確實ナル銀行又ハ身代ノ確實ナル一人私人ニ其保管スヘキ現金ノ保管ヲ托スルコトヲ得

第十五條 金庫所在地ノ收入官吏現金ヲ以テ租稅其他ノ收入ヲ收納スルトキハ毎日之ヲ取纏メ拂込書ヲ添ヘテ翌日マテニ金庫ニ拂込ムヘシ但收入金額五十圓未滿ナルトキハ每一箇月取纏メ金

第三章 拂込

庫ニ拂込ムコトヲ得

第十六條 金庫ノ設置ナキ地方ノ收入官吏現金ヲ以テ租稅其他ノ收入ヲ收納スルトキハ左ノ制限ニ從ヒ之ヲ取纏メ拂込書ヲ添テ大藏大臣ノ指定シタル金庫ニ拂込ムヘシ但次條ニ定メタル場合ハ此限ニアラス

第一 收入金高五十圓未滿ハ 每一箇月(明治二十三年大藏省令第十三號ヲ以テ本項ヲ追加シ從前ノ第一ヲ第二ニ以下順次繰下ク)

第二 同 百 圓未滿ハ 毎十日

第三 同 三百圓未滿ハ 毎五日

第四 同 三百圓以上ハ 翌日限

第十七條 運輸通信ノ不便ナル地方ニシテ金庫ノ設置ナキ場合ニ於テ收入官吏現金ヲ以テ租稅其他ノ收入ヲ收納スルトキハ其金額ノ監守證ヲ製シ最近便ヲ以テ大藏大臣ノ指定シタル金庫ニ送付スヘシ(明治二十六年同省令第二十五號ヲ以テ本條改正)

第十八條 金庫ハ前條ノ場合ニ於テ收入官吏ト同場所又ハ其場所ト爲替送金ノ便アル地方ニ於テ任拂フヘキ任拂命令ヲ受ルトキハ收入官吏ノ監守證ニ領收證ヲ添ヘテ之ヲ受取人ニ送付スヘシ(同上)

第十九條 收入官吏ハ前條ノ受取人ヨリ監守證ヲ以テ現金ノ拂渡ヲ請求セラルルトキハ其監守證ト引換ニ現金ヲ交付シテ金庫ノ領收證ヲ受クヘシ

雜 則

第二十條 本規則ハ收入官吏現金前渡ヲ受タル官吏特別會計ニ係ル官金出納官吏ニ適用ス

第二十一條 本規則ハ明治二十三年四月會計法施行ノ日ヨリ施行ス

### ●郵便爲替金及貯金ノ出納官吏身元保證金

(明治二十三年六月勅令第百五號)

朕郵便爲替金及郵便貯金ヲ取扱フ出納官吏ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 郵便爲替金及郵便貯金ヲ取扱フ出納官吏ハ明治二十三年勅令第一條ノ制限ニ依ラス身元保證金ヲ納ムヘシ

第二條 三等郵便電信局及郵便局ノ前條出納官吏ニハ明治二十三年勅令第四號第二條ノ但書ヲ適用セス

第三條 會計規則第百四條第百五條及明治二十三年勅令第四號第六條ニ依リ大藏大臣ノ爲スヘキ職務ハ遞信大臣之ヲ行フヘシ

### ●歳入歳出外現金出納取扱官吏ノ準則

(明治二十三年三月勅令第三十五號)

朕政府ニ關スル歳入歳出外ノ現金ヲ取扱フ出納官吏ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

政府ニ關スル歳入歳出外ノ現金ヲ取扱フ出納官吏ニ關スル規則ハ會計規則第八章及第九章中現金ヲ領收スル收入官吏ニ關スル各條ニ準據ス

會計及官公有財産終

第二十一類 貨幣

◎貨幣法 (明治三十年三月法律第十六號)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル貨幣法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
貨幣法

第一條 貨幣ノ製造及發行ノ權ハ政府ニ屬ス

第二條 純金ノ量目二分ヲ以テ價格ノ單位ト爲シ之ヲ圓ト稱ス

第三條 貨幣ノ種類ハ左ノ九種トス

金貨幣

二十圓

十圓

五圓

銀貨幣

五十錢

二十錢

十錢

白銅貨幣

五錢

青銅貨幣

一錢

第四條 貨幣ノ算則ハ總テ十進一位ノ法ヲ用非一圓以下ハ一圓ノ百分ノ一ヲ錢ト稱シ錢ノ十分ノ一ヲ厘ト稱ス

第五條 貨幣ノ品位ハ左ノ如シ

- 一 金貨幣 純金九百分參和銅一百分
- 二 銀貨幣 純銀八百分參和銅二百分
- 三 白銅貨幣 「ニツケル」二百五十分參和銅七百五十分
- 四 青銅貨幣 銅九百五十分錫四十分亞鉛十分

第六條 貨幣ノ量目ハ左ノ如シ

- 一 二十圓金貨幣 四匁四分四厘四毛四(十六「グラム」六六六五)
- 二 十圓金貨幣 二匁二分二厘二毛二(八「グラム」三三三三)
- 三 五圓金貨幣 一匁一分一厘一毛一(四「グラム」二六六六)
- 四 五十錢銀貨幣 三匁五分九厘四毛二(十三「グラム」四七八三)
- 五 二十錢銀貨幣 一匁四分三厘七毛七(五「グラム」三九一四)
- 六 十錢銀貨幣 七分一厘八毛八(二「グラム」六九五五)
- 七 白銅貨幣 一匁二分四厘四毛二(四「グラム」六六五四)
- 八 一錢青銅貨幣 一匁九分零厘零毛八(七「グラム」二二八〇)
- 九 五厘青銅貨幣 九分五厘零毛四(三「グラム」五六四〇)

第七條 金貨幣ハ其ノ額ニ制限ナク法貨トシテ通用ス銀貨幣ハ十圓マテ白銅貨幣及青銅貨幣ハ一圓マテテテ限リ法貨トシテ通用ス

第八條 貨幣ノ形式ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第九條 金銀貨幣純分ノ公差ハ金貨幣ハ一千分ノ一銀貨幣ハ一千分ノ三トス

第十條 金銀貨幣量目ノ公差ハ左ノ如シ

- 一 金貨幣二十圓ハ每片八毛六四(〇「グラム」〇三二四〇)一千枚毎ニ八分三厘(三「グラム」一二五〇)十圓ハ每片六毛零五(〇「グラム」〇二二六九)一千枚毎ニ六分二厘(二「グラム」三二五〇〇)五圓ハ每片四毛三二(〇「グラム」〇一六二〇)一千枚毎ニ四分一厘(一「グラム」五三七五〇)トス
- 二 銀貨幣ハ各種共每片二厘五毛九二(〇「グラム」〇九七二〇)五十錢銀貨幣ハ一千枚毎ニ一匁二分四厘(四「グラム」六五〇〇〇)二十錢銀貨幣ハ一千枚毎ニ八分三厘(三「グラム」二二二五〇)十錢銀貨幣ハ一千枚毎ニ四分一厘(一「グラム」五三七五〇)トス

第十一條 金貨幣ノ通用最輕量目ハ二十圓金貨幣四匁四分二厘(十六「グラム」五七五〇)十圓金貨幣二匁二分一厘(八「グラム」二八七五)五圓金貨幣一匁一分零厘五毛(四「グラム」一四三八)トス

第十二條 金貨幣ニシテ磨損ノ爲通用最輕量目ナ下ルモノ及銀貨幣白銅貨幣又ハ青銅貨幣ニシテ著シク磨損シタルモノ其ノ他流通不便ノ貨幣ハ其ノ額面價格ヲ以テ無手数料ニテ政府ニ於テ之ヲ引換フヘシ

第十三條 貨幣ニシテ模様ノ認識シ難キモノ又ハ私ニ極印ヲ爲シ其ノ他故意ニ毀傷セリト認ムルモノハ貨幣タルノ效用ナキモノトス

第十四條 金地金を輸納シ金貨幣ノ製造ヲ請フ者アルトキハ政府ハ其ノ請求ニ應スヘシ  
附則

第十五條 從來發行ノ金貨幣ハ此ノ法律ニ依リ發スル金貨幣ノ倍位ニ通用スヘシ  
第十六條 從來發行ノ一圓銀貨幣ハ金貨幣一圓ノ割合ヲ以テ政府ノ都合ニ依リ漸次之ヲ引換フヘシ

前項引換ノ終了マテハ金貨幣一圓ノ割合ヲ以テ無制限ニ法貨トシテ其ノ通用ヲ許シ通用禁止ノ場合ニ於テハ六箇月以前ニ勅令ヲ以テ之ヲ公布スヘシ通用禁止ノ翌日ヨリ起算シ滿五箇年内ニ引換ヲ請求セサルトキハ爾後地金トシテ取扱フヘシ

第十七條 從來發行ノ五錢銀貨幣及銅貨幣ハ從前ノ通り通用スヘシ  
第十八條 此ノ法律發布以後ハ一圓銀貨幣ノ製造ヲ廢ス但右期日以前ニ政府ニ輸納シタル銀地金ハ此ノ限ニ在ラス

第十九條 此ノ法律ニ牴觸スル從前ノ法令ハ總テ之ヲ廢止ス  
第二十條 此ノ法律ハ第十八條ヲ除ク外明治三十年十月一日ヨリ施行ス

貨幣ノ形式ヲ定ム (明治三十年四月勅令第四百四十四號)

朕貨幣ノ形式ヲ定ムルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
貨幣法第八條ニ依リ貨幣ノ形式ヲ定ムルコト左ノ如シ

(形式ハ之ヲ略ス)

造幣規則 (明治三十年四月勅令第三百三十八號)

朕造幣規則ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
造幣規則

第一條 金貨幣ノ製造ヲ請ハントスル者ハ金地金ヲ造幣局ニ輸納スヘシ

第二條 貨幣製造ノ爲メ受取ル地金ハ品位一千分中金九百九十以上ニシテ其ノ含有物ノ性質造幣ニ障害ナキモノニ限ル但含有物銅ノミナルトキハ金九百以上トス

第三條 貨幣製造ノ爲メ受取ル地金ハ其ノ量目一百匁以上トス但金銀地金精製及品位證明規則ニ依リ貨幣ノ製造ヲ請フトキハ此ノ限ニアラス

第四條 輸納ノ地金ハ輸納人又ハ其ノ代理者ヲ立會ハシメ之ヲ秤量シテ預リ證書ヲ交付スヘシ

第五條 地金ノ品位及性質ハ試驗ノ上之ヲ定ム

第六條 地金ノ試驗了リタルトキハ勘定書ニ試驗表ヲ添ヘ之ヲ輸納人ニ送付スヘシ

第七條 輸納人前條書類ノ送名ヲ受ケ異議ナキトキハ預リ證書ヲ提出シテ貨幣拂渡證書ヲ請求スヘシ但異議アル者ハ三日以内ニ其ノ旨ヲ申告スヘシ此ノ期限内ニ異議ノ申告ヲ爲ササルトキハ承諾シタルモノト見做スヘシ

第八條 輸納人前條ニ依リ異議ノ申告ヲ爲シタルトキハ其ノ輸納地金ヲ返付スヘシ此ノ場合ニ於テハ手数料トシテ地金四匁及及其ノ端數毎ニ金三圓ヲ徵收ス

第九條 輸納地金ノ溶解減ハ輸納人ノ負擔トス

第十條 輸納地金ノ取扱ハ一般休暇日ノ外三月十六日ヨリ同三十一日マテノ間之ヲ停止ス但臨時停止ヲ要スルトキハ大藏大臣之ヲ告示ス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

### 金銀地金精製及品位證明規則

(明治三十年四月勅令第三百三十九號)

朕金銀地金及品位證明規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

金銀地金精製及品位證明規則

第一條 造幣局ハ金銀地金ノ精製又ハ品位證明ヲ請フ者アルトキハ本規則ノ定ムル所ニ依リ其ノ精製又ハ證明ヲナスヘシ

第二條 精製又ハ品位證明ノ爲メ輸納スル地金ハ品位一千分中金銀七百五十以上量目二百匁以上ノモノニ限ル但金銀混合地金ナルトキハ金銀合シテ七百五十以上トス

第三條 輸納ノ地金ハ輸納人又ハ其ノ代理者ヲ立會ハシメ之ヲ秤量シテ預リ證書ヲ交付スヘシ

第四條 品位證明ノ爲メ輸納シタル地金ハ定型塊ト爲シ其品位ヲ證明シ之ヲ輸納人ニ交付スヘシ  
金銀混合地金又ハ精製スルニアラサレハ定型塊ト爲シ難キ地金ノ品位證明ヲ請フ者アルトキハ精製ノ上位ヲ證明ス

第五條 造幣局ニ於テ製造スル定型塊ハ金銀一百匁以上トス

第六條 精製ノ爲メ輸納シタル地金ノ品位證明ヲ請ヒ又ハ其ノ金分ヲ以テ貨幣ノ製造ヲ請ハントスル者ハ輸納ノ際其ノ旨申告スヘシ

第七條 輸納シタル地金試験ノ後精製又ハ品位證明ヲ爲サスシテ返付ヲ要スルトキハ手数料トシテ地金一塊毎ニ金二圓ヲ徴收ス

第八條 輸納地金ノ餘解減ハ輸納人ノ負擔トス

第九條 輸納地金ノ品位證明ヲ爲シタルトキハ手数料トシテ金ハ四貫匁又ハ其ノ端數毎ニ銀ハ八貫匁又ハ其ノ端數毎ニ各金三圓ヲ徴收ス

第十條 輸納地金ノ精製ヲ爲シタルトキハ左ノ割合ニ依リ手数料ヲ徴收ス

一千分中金銀九百五十以上	純金一百匁ニ付	純銀一百匁ニ付	金七十六錢
一千分中金銀九百以上	純金一百匁ニ付	純銀一百匁ニ付	金二十錢
一千分中金銀八百五十以上	純金一百匁ニ付	純銀一百匁ニ付	金八十錢
一千分中金銀八百以上	純金一百匁ニ付	純銀一百匁ニ付	金二十三錢
一千分中金銀七百五十以上	純金一百匁ニ付	純銀一百匁ニ付	金九十一錢
一千分中金銀七百以上	純金一百匁ニ付	純銀一百匁ニ付	金二十七錢
一千分中金銀六百五十以上	純金一百匁ニ付	純銀一百匁ニ付	金一圓
一千分中金銀六百以上	純金一百匁ニ付	純銀一百匁ニ付	金三十二錢
一千分中金銀五百五十以上	純金一百匁ニ付	純銀一百匁ニ付	金一圓十錢
一千分中金銀五百以上	純金一百匁ニ付	純銀一百匁ニ付	金三十八錢

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

### 流通不便ノ金銀銅貨交換方

(明治二十二年二月大藏省令第三號)

流通不便ノ金銀銅貨ハ本年四月一日以後當省金庫局及同局大阪出張所ニ於テ左ノ區別ヲ以テ交換スヘシ但手数料ハ徴收セス

一量目減少セサル者  
一量目減少セラル者

全額  
現存價格

◎通用貨幣鑄解及毀傷スルヲ禁ス

(明治十一年一月第二號布告)

通用貨幣ヲ鑄解シ又ハ其體面ヲ毀傷スル等其他總テ流通ノ用ヲ闕キ候所爲一切不相成候條此旨布告候事

◎貿易銀一般通用ヲ許ス

(明治十一年五月第十二號布告)

貿易銀貨ノ儀ハ從來各開港場貿易便利ノ爲メ鑄造シ各開港場ニ限リ通用候處今般更ニ一般ニ令通用候條租稅其他公私ノ取引上都テ授受可致此旨布告候事

◎一圓銀貨通用禁止ノ件

(明治三十年九月勅令第三百三十八號)

朕一圓銀貨幣通用禁止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
從來發行ノ一圓銀貨幣ハ來ル明治三十一年四月一日限リ其ノ通用ヲ禁止ス

◎政府極印附一圓銀貨臺灣ニ使用ノ件

(明治三十年十月勅令第三百七十四號)

朕臺灣ニ於テ政府極印附一圓銀貨幣公納使用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 臺灣ニ於テハ當分ノ内政府ノ極印ヲ施セル一圓銀貨幣ヲ時價ヲ以テ公納及政府ノ支拂ニ

用ウルコトヲ得但政府ノ支拂ハ合意ニ依ルヘキモノトス

第二條 前條ノ極印ハ左ノ形式ニ依リ政府引換濟一圓銀貨幣ノ表面ニ施スモノトス

◎ 徑一分五厘

第三條 外國紙幣及ヒ私ニ極印ヲ施シタル貨幣ハ爾後公納ニ用フルコトヲ得ス但特ニ外國貨幣ヲ

以テ公納ニ用フルコトヲ規定シアルモノハ此ノ限ニアラス

◎舊銅貨ノ品位ヲ定ム

(明治四年十二月布告)

舊銅貨之儀去ル辰年定價被仰出候處今般新貨御發行ニ付各種比較商量ノ上當分左ノ通品位被相定候條其旨相心得新貨幣並金札共取交聊無差支通用可致事

(新貨並金札之比較略之)

(舊銅貨品位圖面略之)

右ハ本位ノ新貨幣ト新銅貨トノ比例ニ依テ定ムルカ故ニ一種又ハ數種ヲ併セ用ユルトモ一口ノ取遣リ一圓ノ高ヲ限リ用ユヘシ但一圓ノ高ヲ超レハ是ヲ拒ムノ權アルヘシ尤相互ノ便宜ニ依リテ取遣リスル時ハ右制限ニ不拘勝手タルヘシ  
右之通相定候事

◎舊鐵錢ノ價位ヲ定ム

(明治五年九月第二百八十三號布告)

新貨幣御發行ニ付去辛未十二月申舊銅貨ノ定價被仰出候處猶今般舊鐵錢ノ價位當分左ノ通被相定

候條其旨相心得新貨幣並金札共取交聊無差支通用可致事

(舊鐵錢價位圖面略之)

右ハ新貨幣トノ比較ニヨリテ之ヲ定ム尤モ鐵錢一種或ハ兩種ヲ併セ用フルトモ一口ノ取遣ニ新貨五十錢高ヲ限リ用フヘシ但新貨五十錢ノ高ヲ越レハ是ヲ拒ムノ權アルヘシ然レトモ相互ノ便宜ニヨリテ取遣スル時ハ右制限ニ拘ハラズ勝手タルヘシ  
右之通相定候事

紙幣

(明治 年十二月布告)

維新已來太政官並ニ民部省發行ノ金札製造ノ粗ナルヨリ質造ヲ謀ル者間有之且又從來舊藩藩ニ於テ發行ノ金銀錢札ハ其管轄限リ通用ノ儀ニ付一般流通ノ便ヲ失ヒ其弊害不少依之今般御多端ノ折柄莫大ノ入費ヲ不被爲厭精工ノ新紙幣百圓五十圓二十圓十圓五圓二圓一圓五十錢二十錢十錢五錢ノ各種ヲ製造シ來壬申年二月十五日ヨリ右各種ノ内差向一圓五十錢二十錢十錢ノ四種ヲ發行セシメ追追製造成功ノ都合ニヨリ從來官藩兩様ノ金札ト引換條厚キ御趣意ヲ體認シ無疑念通用可致尤モ一般引換ノ都合ハ猶追テ相達候儀モ可有之依テ各種ノ新紙幣相添此段相達候事  
別紙布告文ノ通愈來二月十五日ヨリ今般新製ノ紙幣發行致シ候ニ付テハ僻地小民共ハ前以テ趣意了知セシメ篤ト心得居候様不致テハ或ハ新奇ノ思ヲナシ厭忌ノ情ヲ生シ候モ難計發行ノ際ニ臨ミ右體ノ事有之候テハ難相成候條各地方廳ニカイテ厚ク注意致シ未未ニ至ル迄解シ易キ様更ニ布告文ヘ假名ヲ加ヘ管下ノ人民ヘ遺漏ナク布達行届候様可取計尤モ各府縣へ各種紙幣十五枚ツツ相廻シ其内一枚ハ各種印章及ヒ書込文字等ノ場所へ張紙ヲ以テ記入致シ候間各地方廳ニカイテ同様

取計都合ノ地又ハ人民輻輳ノ場所へモ各布告文同様揭示イタシ置キ廣ク人民へ相示シ候様可致此段更ニ相達候事

十圓五圓一圓三種ノ紙幣改造

(明治十三年二月第五號布告)

現今流通ノ紙幣ハ紙質脆弱破裂等ノ憂不少候ニ付此度十圓五圓一圓三種ノ紙幣ヲ改造シ漸次交換候條此旨布告候事但差向一圓紙幣製造出來ニ付右見本札各管轄廳へ下ケ渡置候事

五十錢二十錢兩種ノ紙幣改造

(明治十五年八月第四十五號布告)

半圓二十錢ノ損傷紙幣交換ノ爲メ五十錢二十錢ノ紙幣ヲ改造シ漸次交換候條當分ノ内在來ノ紙幣ト取交通用スヘシ但本文紙幣ノ見本ハ大藏省ヨリ各府縣へ下ケ渡スヘシ

紙幣漸次銀貨ニ交換

(明治十八年六月第十四號布告)

政府發行ノ紙幣ハ來明治十九年一月ヨリ漸次金貨ニ交換シ其交換シタル紙幣ハ之ヲ消却スヘシ(明治三十年三月法律第十九號ニテ改正)但交換ノ手續ハ「大藏卿」之ヲ定メ日本銀行ヲシテ其事務ヲ取扱ハシムヘシ

損紙幣交換規則

(明治十七年四月大藏省告示第四十一號)



明治十四年(五月)當省第七十五號布達損傷紙幣交換規則左ノ通改正候條右ニ照準シ引換方可取計  
候此旨告示候事

損紙幣交換規則

水火災或ハ鼠喰蟲喰等ノ爲メ毀損セシモノヲ交換スルトキハ毀損ノ原因ヲ取糺シ左ノ箇條ニ照準  
交換スヘシ

第一條 小破或ハ二ツ切レ三ツ切等幾片ニ細斷スルトモ中央ノ數位(數位トハ各紙幣ノ種類ニ隨  
ヒ十圓、五圓、一圓、五十錢、二十錢トアル黑色ノ文字ヲ云フ以下皆之ニ同シ)全損シ大藏卿出納  
局長ノ印章記録局長ノ割印上下ノ番記號(四箇所)マテ接續スルモノ又全部所破損スルトモ中  
央ノ數位全損シ大藏卿出納局長ノ印章記録局長ノ割印ノ内一個上下番記號四箇所ノ内二箇所  
(記號一箇所番記號一箇所又ハ番記號ノミ二箇所記號ノミ二箇所)存在スルモノ又中央ノ數位半存ト  
雖トモ各印章全存番記號二箇所ヲ認ムルモノハ全額ヲ以テ交換スヘシ但全紙接續スルトモ左右  
ノ番記號同シカラサルモノ又ハ彩紋等不合他ノ紙幣ヲ以テ接續スルト認ムルモノハ交換ニ附セス  
第二條 縱又ハ橫斜等半片ハ消滅シ殘リ半片ノ紙幣ハ中央數位半存シ大藏卿印章或ハ出納局長ノ  
印章記録局長割印ノ内一個上下番記號ノ内一個ヲ認ムルモノハ半額ヲ以テ交換ニ附スヘシ  
第三條 大藏卿及ヒ其他ノ印章番記號トモ全存スルト雖モ中央ノ數位ヲ認メサルモノ中央ノ數位  
存在スルトモ各印章及ヒ番記號認メサルモノハ交換ニ附スヘカラス

國立銀行紙幣ノ通用及引換期限

(明治二十九年三月法律第八號)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル國立銀行紙幣ノ通用及引換期限ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セ  
シム

第一條 國立銀行紙幣ノ通用期限ハ明治三十二年十二月九日トス

第二條 國立銀行紙幣ヲ所持スル者ハ前條期日ノ翌日ヨリ起算シ滿五箇年內ニ其ノ引換方ヲ政府  
ニ請求スヘシ前項ノ引換期日ヲ過クルトキハ總テ所持人ノ損失トス

第三條 本法ハ官命又ハ平穩鑛店ニ係ル國立銀行發行ノ紙幣ニハ之ヲ適用セス

通用禁止ノ貨幣引換期限 (明治二十三年二月法律第十三號)

朕通用ヲ禁止シタル貨幣紙幣ノ引換ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

政府發行ノ補助貨幣及紙幣ニシテ通用ヲ廢止シタルモノハ其廢止ノ翌日ヨリ起算シ滿五箇年內ニ  
引換ヲ請求セサレハ期滿免除トシテ政府ハ其引換義務ヲ免ルルモノトス但明治二十年六月三十日  
ヲ以テ通用ヲ廢止シタル十錢紙幣ハ本法發布ノ日ヨリ起算シ滿三年ヲ以テ期滿免除ノ期限トス

贋造金銀銅貨紙幣等取扱規則

(明治九年四月第五十七號布告)

銀行又ハ爲替方又ハ兩替屋又ハ官廳ニ於テ備入候鑑定人等金銀銅貨紙幣ヲ鑑定ノ節贋造品取扱規  
則左ノ通相定候條此旨布告候事

贋造金銀銅貨紙幣等取扱規則

第一條 新金銀銅貨紙幣等贋造品ハ詳ニ其原由及持主ノ宿所姓名ヲ尋テ其面前ニ於テ斷截シ速ニ

其最寄警察出張所或ハ屯所或ハ區戸長ニ差出シ其額未チ申立ツヘシ若シ官廳ニ關スルトキハ  
廳ヨリ警察官署ニ通知スヘシ但持主立會ハサル時ハ必ス代理人チ出サシムヘシ遠隔ノ地ヨリ遞  
送シ來レル者ハ立會人チ取リテ之ヲ斷截シ速ニ遞送主ヘ報告スヘシ

第二條 鑑定ヲ誤リ正貨紙幣ヲ截斷シタル時ハ收入ヨリ持主ヘ其斷截シタル正貨紙幣ヲ其同等ノ  
品ト引換相渡シ其斷截シタル紙幣ハ事由ヲ詳記シテ管轄廳ヘ引換ヲ乞フヘシ

第三條 若シ正貨定メ難キモノ有之節ハ其原由及持主ノ宿所姓名ヲ分明ニ記載シ持主ノ面前ニ於  
テ其品ヲ封シ持主ヲシテ之ニ封印セシメ鑑定者ヨリ管轄廳ヘ差出スヘシ然ル時ハ該廳ニ於テ詳  
細吟味ノ上全ク正品ニシテ其製充分ナラス通用ノ際ハ民ノ疑ヲ生スヘキモノハ直ニ持主ヘ引換  
渡スヘシ其價造品ハ第一條ニ依ル

第四條 古金銀貨幣價造品ハ持主又ハ代理人ノ面前ニ於テ斷截シ直ニ其持主又ハ代理人ヘ還付ス  
ヘシ

第五條 價造ヲ知ルト雖モ斷截セスシテ持主ニ還付シ又ハ申立ヲ等閑ニスル者ハ相當ノ處罰ヲ爲  
スヘシ

●變造紙幣取扱方

(明治九年五月大藏省甲第十二號布達)

本年四月太政官第五十七號公布價造金銀銅貨紙幣取扱規則第一條新金銀銅貨紙幣等價造品ハ其持  
主ノ面前ニ於テ斷截云云ト掲載有之然ル處新紙幣ノ儀ハ百圓ト五十圓十圓ト五圓一圓ト半圓二十  
錢ト十錢何レモ堅横ノ寸法同様ニ付數字ヲ描改シ五圓札ヲ十圓二十錢札ヲ二十錢或ハ半圓ニ變換  
セシ類比比有之右ハ素ヨリ價製ノ品トモ異リ斷截候テハ不都合ニ付該紙幣發見候ハ裏面ノ紋色

(別紙ノ通各種毎ニ裏面ノ紋色ヲ分ツ)及ヒ描改ノ證ヲ所持人ヘ明示シ其儘警察出張所等ヘ差出同  
所ニ於テハ右紙幣ノ原因其外取糺處分相濟候ハ引揚切ニ取計「紙幣察」ヘ相納候儀ト可相心得此  
旨布達候事

(別紙裏面紋色略之)

貨幣終

第二十二類 公債

新舊公債證書發行條例

(明治八年五月第九十五號布告)

明治六年(三月)第百十五號及同七年(六月)第六十六號布告新舊公債證書發行條例別冊ノ通改定候條此旨布告候事

(別冊)

新舊公債證書發行條例

明治五壬申年迄ノ間從來舊諸藩縣ニ於テ内國人民ヨリノ逋債ヲ改テ政府ノ公債トシ之ヲ大藏省ニ引受ケ其債主ヘハ各此公債證書ヲ交付シ定期ヲ逐テ之ヲ償却スルニ付政府ニ於テ制定シタル條條左ノ如シ

第一條 (新舊公債ノ區別及證書ノ種類記號ノ品別等ヲ明ニス)

第一節 弘化元甲辰年ヨリ慶應三丁卯年迄舊諸藩ニ於テ借用シタルモノヲ舊公債ト稱シ明治元戊辰年太政更始以後明治四辛未年七月廢藩迄及明治五壬申年迄ノ間舊諸藩ニ於テ借用シタルモノヲ新公債ト稱スヘシ

第二節 新舊公債トモ各其高ヲ五分シテ第一第二第三第四第五トシ證書面ノ金高ヲ五百圓三百圓一百圓五十圓二十五圓ノ五種ニ區別スヘシ

第三節 新公債證書ハ向後抽籤ノ方法ヲ以テ其元金ヲ償却スヘキニ付便宜ノ爲メ四十七部分ニ別チ(いろは)四十七字ノ記號ヲ證書面ニ命名スヘシ

第二條 (新舊公債償却ノ年度及ヒ利息ノ割合ヲ明ニス)

第一節 舊公債ハ無利息ニシテ元金ハ明治五年壬申ヨリ明治五十四年迄五十箇年年賦トシ其年拂方ニ當リタル賦金ヲ毎年十二月一日ヨリ同十五日迄ノ間ニ之ヲ拂渡スヘシ

第二節 新公債ハ利息付ニシテ明治八年ヨリ明治二十九年迄二十二年間ヲ限リ大藏省ノ都合ニヨリ毎年或ハ隔年ニ抽籤ノ方法ヲ以テ其年ニ拂戻スヘキ證書ノ記號ヲ公定シ其割合ニ隨テ之ヲ拂戻スヘシ其利息ハ年年元高百分ノ四トシ明治五年壬申ヨリ明治二十九年迄毎年六月一日ヨリ十五日迄十二月一日ヨリ十五日迄ノ間ニ之ヲ拂渡スヘシ(本文總テ其金額ハ大藏省ノ都合ニヨリ金銀貨又ハ紙幣ヲ以テ之ヲ下渡スヘシ)(明治九年第五十號布告ヲ以テ毎年ノ下六月以下ノ十字ヲ加フ)

但明治八年ヨリ抽籤法ヲ以テ元金ヲ拂戻ニ當リテハ年四分ノ利息月割ヲ以テ右抽籤法行ヒシ月迄ノ分下ケ渡スヘシ

第三條 (明治二十一年勅令第七十三號ヲ以テ削除ス)

第四條 (同上)

第五條 (新公債證書拂方諸般ノ手續ヲ明ニス)

第一節 (同上法令ヲ以テ本節ヲ削除ス)

第二節 (同上)

第三節 (同上)

第四節 (同上)

第五節 凡ソ公債元金竝ニ利賦金拂渡ノ際其期日ヲ失シテ受取方申出テス其拂渡スヘキ年ノ翌年ヨリ向五箇年ヲ過クルトキハ之ヲ償還セサルヘシ(明治二十一年勅令第七十三號ヲ以テ本條改

正) 但起業公債證書(記名無名記)モ本節ニ準ス(同上)

第六條 (同上法令ヲ以テ本條削除)

第七條 (同上)

第八條 (同上)

第九條 (同上)

第十條 (同上)

第十一條 (同上)

第十二條 (同上)

第一節 政府ノ都合ニヨリテ要用ノ事アレハ利息及償却年限ヲ除クノ外此條例ヲ增補シ又ハ之ヲ改正スルコトアルヘシ

第二節 右增補改正等アレハ速ニ其由ヲ世上ニ公告スヘシ  
右之通相定候事

(附録圖面ハ之ヲ略ス)

金祿公債證書發行條例 (明治九年八月第百八號布告)

家祿賞典與典祿ノ儀永世一代或ハ年限等ヲ以テ給與有之候處其制限ヲ改メ來明治十年ヨリ別紙條例之通公債證書ヲ以テ一時ニ下賜候條此旨布告候事

(別紙)

金祿公債證書發行條例

第一條 華士族及ヒ平民トモ各自ノ家祿賞典祿給與ノ制限ヲ改メ一時ニ之ヲ下渡スコトト爲シ以テ公債證書ヲ付與スヘシ

一 永世祿ノ者ヘハ

金祿元高 (賞典祿アルモノハ家祿ニ合計シ元高トス)

七万圓以上

年限

五箇年分

六万圓未滿、六万圓以上

五箇年二分五厘分

五万圓未滿、五万圓以上

五箇年半分

四万圓未滿、四万圓以上

五箇年七分五厘分

三万圓未滿、三万圓以上

六箇年分

二万圓未滿、二万圓以上

六箇年二分五厘分

一万圓未滿、一万圓以上

六箇年半分

七千五百圓未滿、七千五百圓以上

六箇年七分五厘分

五千圓未滿、二千五百圓以上

七箇年分

二千五百圓未滿、千圓以上

七箇年二分五厘分

右二箇年五分ノ利子ヲ給ス

千圓未滿、九百圓以上

七箇年七分五厘分

九百圓未滿、八百圓以上

八箇年分

八百圓未滿、七百圓以上

八箇年二分五厘分

七百圓未滿、六百圓以上

八箇年半分

六百圓未滿、五百圓以上

八箇年七分五厘分

五百圓未滿、四百五十圓以上

九箇年分

四百五十圓未滿、四百圓以上

九箇年二分五厘分

四百圓未滿、三百五十圓以上

九箇年半分

三百五十圓未滿、三百圓以上

九箇年七分五厘分

三百圓未滿、二百五十圓以上

十箇年分

二百五十圓未滿、二百圓以上

十箇年二分五厘分

二百圓未滿、百五十圓以上

十箇年半分

百五十圓未滿、百圓以上

十一箇年分

右一箇年六分ノ利子ヲ給ス

百圓未滿、七十五圓以上

十一箇年分

七十五圓未滿、五十圓以上

十二箇年分

五十圓未滿、四十圓以上

十二箇年半分

四十圓未滿、三十圓以上

十三箇年分

三十圓未滿、二十五圓以上

十三箇年半分

二十五圓未滿以下

十四箇年分

右一箇年七分ノ利子ヲ給ス

一 終身祿ノ者ヘハ

右永世祿年限十分ノ五ヲ給ス但利子ハ永世祿ノ割合ト同シ  
一年限祿ノ者ハハ

- 十年以上ノ者ハハ右永世祿年限十分ノ四ヲ給ス
- 十年未滿八年以上ノ者ハハ右永世祿年限十分ノ三五ヲ給ス
- 八年未滿六年迄ノ者ハハ右永世祿年限十分ノ三ヲ給ス
- 六年未滿四年迄ノ者ハハ右永世祿年限十分ノ二五ヲ給ス
- 四年未滿迄ノ者ハ右永世祿年限十分ノ二ヲ給ス
- 二年ノ者ハハ右永世祿年限十分ノ一五ヲ給ス

但利子ハ永世祿ノ割合ト同シ

第二條 此公債證書ノ利子下渡シハ明治十年分ハ十一月翌年五月ニ相渡シ以後之レニ準シ年年兩度ニ下渡スコトトス但(明治二十一年勅令第七十三號ヲ以テ削除ス)

第三條 家祿賞典祿元高ヲ付與スル年限ニヨリテ利子ノ差異ヲ生スルトキ元高ニ向テ公債證書ヲ付與スル制限左ノ如シ

- 一金一萬圓 家祿賞典祿合高
- 此六箇年分金六萬五千圓此公債證書ノ利子一箇年五歩金三千二百五十圓ト成ル
- 一金九千九百圓 家祿賞典祿合高
- 此六箇年分金六萬六千八百二十五圓此公債證書ノ利子一箇年五歩金三千三百四十一圓二十五錢トナル

右比較九千九百圓ノ方利子九十一圓二十五錢ノ過ト成ル然ル時ハ一萬圓ノ利子金額ニ超過セサルヲ以テ制限トナス故ニ九十一圓二十五錢ヲ引去リ利子三千二百五十圓ニ適當スル公債證書ヲ下渡ヲ以テ規則トス其他右ニ類似ノ件ハ皆之ニ準ス

第四條 此公債證書ハ利子ノ差ニヨリ區別アリト云モ其發行スル種類ハ左ノ如シ

- 五圓 十圓 二十五圓 五十圓 百圓
- 三百圓 五百圓 千圓 五千圓

第五條 前條公債證書ヲ付與スルトキニ當リテ公債證書ニ未滿ノ端金ハ都テ通貨ニテ相渡スヘシ

第六條 此公債證書ノ元金ハ五箇年間之ヲ据置キ六箇年目ヨリ大藏省ノ都合ニ因リ毎年抽籤ノ方法ヲ以テ消却シ都合三十箇年間ニ悉皆之ヲ消却スヘシ

第七條 此公債證書發行ニ付テノ順序其外トモ此條例外ノ事件ハ都テ新舊公債證書發行條例ノ通リタルコトト心得ヘシ

### 海軍公債證書條例 (明治十九年六月勅令第四十七號)

朕海軍公債證書條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍公債證書條例

第一條 海軍公債證書ハ海軍軍備ノ費途ニ充ツル爲メ一千七百萬圓ヲ限リ三箇年間ニ漸次之ヲ發行スルモノトス

第二條 此公債ノ利子ハ一箇年百分ノ五トス

第三條 此公債ノ元金ハ證書發行ノ年ヨリ五箇年据置其翌年ヨリ向三十箇年間ニ抽籤ヲ以テ之ヲ

償還ス

- 第四條 此公債證書發行ノ價額ハ大藏大臣之ヲ定ム
- 第五條 此公債證書ハ無記名利札附ニシテ千圓五百圓百圓ノ三種トス其様式ハ大藏大臣之ヲ定ム但應募者又ハ所有者ノ望ニ由リ記名トスルコトヲ得(明治二十年勅令第一號ヲ以テ本條改正)
- 第六條 此公債證書引受申込高每期需用ノ高ニ超過スルトキハ其申込價額ノ高キモノヨリ順次證書ヲ交付シ需用額ニ滿ツルニ至テ之ヲ止ム
- 第七條 此公債ノ利子ハ毎年五月十一月ニ拂渡スモノトス
- 第八條 此公債證書抽籤ノ時ハ大藏省官吏三名以上會計検査院官吏二名以上及ヒ日本銀行役員二名以上立會ノ上之ヲ執行ス但此公債證書額面十萬圓以上ヲ有スルモノハ抽籤ノ席ニ臨ムコトヲ得(明治二十三年勅令第七十六號ヲ以テ第二項ヲ削除ス)
- 第九條 此條例外ノ事項ハ總テ明治十九年十月勅令第六十六號整理公債條例ニ據ル(明治二十年勅令第一號ヲ以テ本條改正)

整理公債條例

(明治十九年十月勅令第六十六號)

朕整理公債條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

整理公債條例

- 第一條 整理公債ハ從前發行ノ六分以上利附ノ内國債ヲ償還整理スルカ爲メニ募集スルモノトス
- 第二條 整理公債ハ一億七千五百萬圓ヲ限リ大藏大臣財政ノ便宜ヲ計リ漸次之ヲ募集スルモノトス

第三條 整理公債利子ノ割合ハ一箇年百分ノ五トス

第四條 整理公債ニ對シ發行スル證書ハ無記名利札附ニシテ五千圓千圓五百圓百圓五十圓ノ五種トス但應募者又ハ所有者ノ望ニ由リ記名スルコトヲ得

第五條 整理公債證書ノ様式ハ大藏大臣之ヲ定メ豫メ告示スヘシ

第六條 整理公債ヲ募集スルトキハ其總額價格應募申込日限應募金拂込度數等ハ大藏大臣之ヲ定メ豫メ告示スヘシ

大藏大臣ハ前項ノ手續ニ據ラス市場ノ時價ニ準シ整理公債證書ノ價格ヲ定メ臨時之ヲ發行シテ日本銀行ニ交付スルコトヲ得但發行シタル證書ノ金額及價格ハ大藏大臣其發行ノ翌日之ヲ告示スヘシ(明治二十一年勅令第四十六號ヲ以テ本項追加)

第七條 整理公債應募高每期需用ノ額ニ超過スル時ハ大藏大臣ハ應募價格ノ高キモノヨリ順次證書ヲ交付シ需要額ニ滿ルニ至テ止ム其價格同シキモノハ申込ノ高ヲ割合減少スルモノトス但時宜ニ依リ二百圓以下ノ應募者ニハ之ヲ減少セサルコトアルヘシ(同上法令ヲ以テ但書ヲ追加ス)

第八條 整理公債應募金ノ拂込ヲ數回ニ分ツ場合ニ於テ拂込期ノ末日マテニ拂込未済ノモノアルトキハ其翌日ヨリ現拂込ノ日マテ一箇年百分ノ七ノ割合ヲ以テ利子ヲ徵收スヘシ

前項拂込期日後三箇月ヲ過キ猶ホ拂込ヲナササルトキハ公債證書ヲ交付セス且既ニ拂込ノ金額ハ還付セサルモノトス

第九條 整理公債元金ハ募集ノ年ヨリ五箇年据置其翌年ヨリ向五十箇年間ニ抽籤法ヲ償還スルモノトス但償還金額ハ其時時大藏大臣之ヲ定メ豫メ告示スヘシ

第十條 整理公債元金償還ノ爲メ抽籤ヲ爲ストキハ日本銀行本店ニ於テ大藏省官吏三名以上會計

検査院官吏二名以上日本銀行役員二名以上立會ノ上之ヲ執行ス但整理公債證書額面三十萬圓以上ヲ有スルモノハ抽籤ニ臨席スルコトヲ得

抽籤ノ後ハ日本銀行ヲシテ當籤證書ノ記號番號種類及ヒ金額等ヲ廣告セシムルモノトス

第十一條 整理公債ノ利子ハ毎年六月十二月ニ於テ支拂フモノトス

第十二條 整理公債ノ利子ハ其元金拂込ノ時月ノ十五日以前ニ在ルモノハ下半年分ヨリ支拂ヒ月ノ十六日以後ニ在ルモノハ翌月分ヨリ支拂ヒ元金償還ノ年ニ於テハ其償還ノ月マテ月割ヲ以テ

支拂フモノトス

第十三條 整理公債證書ノ利札ハ利子請取ノ時其所有者各自之ヲ截斷シテ日本銀行本店又ハ代理

店ニ持參スヘシ

第十四條 整理公債元利ノ支拂ヲ請求セサルモノアルトキハ元金ハ償還ノ月ヨリ滿十五箇年利子

ハ支拂ノ期月後滿五箇年ヲ過クレハ之ヲ支拂ハサルヘシ但證書ノ紛失汚染及ヒ毀損等ニ由リ元

利ノ支拂ヲ見合セ及ヒ訴訟事件ニ由リ請求ヲ爲シ難キ場合アルトキハ其間ノ日數ヲ算セス

第十五條 無記名證書ヲ記名ニ變換セントスルモノハ其請書ニ戶長ノ與書ヲ受ケ證書ヲ添ヘ日本

銀行本支店又ハ代理店ヲ經由シテ大藏省ニ申出ヘシ

第十六條 記名證書ノ賣買讓與ヲ爲シタルモノハ雙方連署ノ請求書ニ證書ヲ添ヘ日本銀行本支店

又ハ代理店ニ差出シ名前書換ヲ請フヘシ

第十七條 記名證書ノ所有者死去シタルトキ其相續人ハ請求書ニ正當ノ相續人タルコトヲ證スル

戶長ノ與書ヲ受ケ前條名前書換ノ手續ヲ爲スヘシ

第十八條 記名證書ノ所有者ノ遺言ニ依リ相續人ニ非スシテ證書ヲ讓リ受ケルモノアルトキハ右

相續人ヲ以テ保證人ト爲シ前條名前書換ノ手續ヲ爲スヘシ但相續人ナキ場合ニ於テハ前所有者ノ親戚二名以上ヲ以テ保證人ト爲スヘシ

第十九條 記名證書ノ所有者身代限ノ處分ヲ受ケ證書ノ所有權他ヘ移轉シタルトキ其引受人ハ裁判所ノ證明書ヲ承ケ之ヲ證書ニ添ヘ前條名前書換ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十條 整理公債證書若クハ其利札水火災等ニ由リ消滅シタルトキハ二名以上ノ保證人ヲ立テ

日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經由シテ大藏省ニ屆書代證書若クハ代利札ノ交付又ハ利子ノ支拂

ヲ請求スルコトヲ得此場合ニ於テ大藏省ハ其消滅ノ證據明確ナリト認ムルトキハ直ニ代證書若

クハ代利札ヲ交付シ又ハ利子ヲ支拂フヘシ

第二十一條 整理公債證書又ハ利札ヲ紛失シタルモノハ日本銀行本支店又ハ代理店ニ届出ヘシ其

發見ノ時亦同シ

前項ノ届出アル時ハ銀行ハ直ニ其次第ヲ廣告スヘシ但廣告料ハ届出人ヨリ納メシムルモノトス

第二十二條 公債證書又ハ利札紛失ノ届出アルトキハ日本銀行本支店又ハ代理店ハ之カ支拂ヲ見

合スヘシ

第二十三條 紛失届出ノ證書又ハ利札ヲ日本銀行本支店又ハ代理店ニ持參スルモノアルトキハ銀

行ハ之ヲ預リ置キ其旨ヲ届出人ニ報知シ持參人ト届出人ト相當ノ手續ヲ經テ所有權ヲ證明スル

ヲ待テ其取扱ヲ爲スヘシ

第二十四條 記名證書紛失届出後一回ノ利拂了リタル上ハ二名以上ノ保證人ヲ立テ日本銀行本支

店又ハ代理店ヲ經由シテ大藏省ニ申出代證書ノ交付ヲ請求スルコトヲ得

第二十五條 紛失無記名證書其届出ヨリ滿六箇年ヲ過キ紛失利札其支拂期限ヨリ滿四箇年ヲ過キ



ヲ紛失證書又ハ利札ヲ持參スルモノアルモ届出人ニ對シテノミ起訴ノ權アルモノトス

第二十六條 紛失證書ノ當藏ハ無効ノモノトス

第二十七條 整理公債證書ヲ汚染又ハ毀損シタルトキハ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經由シテ其證書ヲ大藏省ニ差出シ代證書ノ交付ヲ請求スルコトヲ得大藏省ニ於テ其真正ヲ鑑別シ得ヘキモ

ノニハ代證書ヲ交付シ鑑別シ難キモノニハ其取扱總テ紛失證書ノ例ニ準セシム

第二十八條 第十五條ノ證書交換ヲ受クルトキ第十六條第十七條第十八條第十九條ノ名前書換ノ

トキ第二十條第二十四條第二十五條第二十七條ノ代證書ヲ受クルトキ及ヒ記名證書ノ取扱店ヲ

變更スルトキハ日本銀行本支店又ハ代理店ハ相當ノ手数料ヲ本人ヨリ納メシムルコトヲ得

第二十九條 第二十條第二十四條ノ保證人ハ日本銀行本支店又ハ代理店ニ於テ満足スルモノニ限

ルヘシ

第三十條 從前發行ノ六分以上利附ノ公債證書ヲ所有スルモノハ元金償還ノ時本人ノ請求ニ由

リ大藏省ノ都合ヲ以テ整理公債證書ヲ交付スルコトアルヘシ

第三十一條 整理公債證書ノ製造費發行費及ヒ募集初年ノ利子ハ募集金ヲ以テ支出スルコトヲ得

第三十二條 整理公債ノ募集償還利子ノ拂渡證書ノ書換等ニ關スル取扱手續ハ大藏大臣之ヲ定メ

日本銀行ヲシテ其事務ヲ取扱ハシム

### 鐵道費補充公債條例

(明治二十二年一月勅令第六號)

朕鐵道費補充公債條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鐵道費補充公債條例

第一條 鐵道費補充公債ハ神奈川縣下戸塚橫須賀間滋賀縣下大津長瀨間ノ鐵道布設資金ヲ補充スル爲メニ證書面二百萬圓ヲ限リ募集スルモノトス

第二條 此公債募集ノ方法元金ノ償還年限利歩合利子支拂期日及ヒ其他ノ事項ハ總テ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例ニ依ル

### 軍費支辨ノ爲メ公債募集ノ件

(明治二十七年十月法律第二十五號)

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル軍費支辨ノ爲メ公債募集ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
清國及朝鮮國トノ交渉事件ニ關スル軍費支辨ノ爲メ一億圓ヲ限リ一箇年六朱以下ノ利子ヲ以テ漸次公債ヲ募集シ若クハ借入金ヲ爲スコトヲ得但募集借入ノ方法規約償還年限其他必要ナル事項ハ大藏大臣之ヲ定ム

### 軍費支辨ノ爲メ公債募集ノ件

(明治二十八年三月法律第八號)

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル軍費支辨ノ爲メ公債募集ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
清國トノ交渉事件ニ關スル軍費支辨ノ爲更ニ一億圓ヲ限リ一箇年六朱以下ノ利子ヲ以テ漸次公債ヲ募集シ若クハ借入金ヲ爲スコトヲ得但募集ノ價額募集借入ノ方法規約償還年限其他必要ナル事項ハ大藏大臣之ヲ定ム

●軍事公債條例

(明治二十七年八月勅令第百四十四號)

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ公債條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 軍事公債ハ勅令第百四十三號ニ依リ金額五千萬圓ヲ限リ漸次募集スルモノトス

第二條 此ノ公債ノ利子ハ一箇年百分ノ六以下トシ元金償還ニ至ルマテ毎年六月及十二月ノ兩度ニ之ヲ支拂フ

第三條 此ノ公債ノ元金ハ證書發行ノ年ヨリ五箇年据置其ノ翌年ヨリ向五十箇年以内ニ償還ス

第四條 此ノ公債ヲ募集スルニ付キ其ノ總額、價格、利子歩合、應募申込日限應募金拂込度數其ノ他必要ナル事項ハ大藏大臣之ヲ定ム

第五條 此ノ公債證書ノ交付元利仕拂ニ關スル時效證書ノ取扱其ノ他此ノ條例ヲ以テ規定セサル事項ハ總テ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例ニ據ル

●事業公債條例

(明治二十九年三月法律第五十九號)

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル事業公債條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

事業公債條例

第一條 事業公債ハ既設官線鐵道改良、北海道鐵道建設製鋼事業、電話擴張ノ費途、葉煙草專賣資

金及國防事業ノ費用ニ充ツルカ爲證書額面一億三千五百萬圓ヲ限リ漸次之ヲ募集ス

第二條 本公債ノ利子ハ一箇年百分ノ五以下トシ募集ノ都度大藏大臣之ヲ定ム

第三條 本公債ニ關シ本條例ニ規定セサルモノハ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例ノ各條

項ヲ適用ス

●鐵道公債事業公債證書ノ様式及名稱變更

ノ件 (明治三十年十一月大藏省告示第七十六號)

明治二十六年法律第四號鐵道敷設法同二十九年法律第五十九號事業公債條例及同年法律第九十三號北海道鐵道敷設法ニ據リ一箇年百分ノ五利率ヲ以テ起債スル公債證書ハ其様式ヲ同一ニシ大日本帝國政府五分利公債證書ノ名稱ヲ以テ發行ス但證書及月割利札ノ見本ハ日本銀行本支店及代理店ニ備ヘ置カシム照鑑ヲ要スルモノハ就テ觀ルヘシ

●鐵道公債及事業公債利子支拂改正

(明治三十年二月法律第一號)

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル鐵道公債及事業公債利子支拂期改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
明治二十五年法律第四號鐵道敷設法明治二十九年法律第五十九號事業公債條例及明治二十九年法律第九十三號北海道鐵道敷設法ニ依ル公債ノ利子ハ毎年三月九月ニ於テ支拂フモノトス

●國債證券買入鎖却法

(明治二十九年二月法律第五號)

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル國債證券買入鎖却法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
國債證券買入鎖却法

第一條 政府ハ毎年度國債費豫算定額以内ニ於テ國債證券ヲ買入レ之カ銷却ヲ爲スコトヲ得

前項買入ノ價格ハ該證券金額ヲ超過スルコトヲ得ス

第二條 國債證券ノ買入銷却ヲ爲シタルトキハ大藏大臣ハ其ノ證券ノ種類番號總額及其ノ買入價格ヲ告示スヘシ

第三條 銷却ノ爲ニスル國債證券ノ買入ハ隨意契約ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

◎國事ニ關スル犯罪ノ爲諸祿ヲ沒收セラレ

タル者ニ關スル件 (明治二十七年六月法律第二十號)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル國事ニ關スル犯罪ノ爲諸祿ヲ沒收セラレタル者ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 明治三年九月十日太政官布告藩制施行ヨリ同九年八月太政官第百八號布告實施マテノ間ニ於テ國事ニ關スル犯罪ノ爲家祿賞典祿ヲ沒收セラレタル者及本法施行ノ日ニ於テ現ニ其ノ其ノ家名繼襲人タル者ニ限り其ノ沒收セラレタル當時ノ祿高二基キ明治九年太政官第百八號布告

第一條ノ率ニ據リタル金祿公債證書額ニ相當スル金額ヲ一時國庫ヨリ支出シテ之ヲ給與ス

第二條 前條ノ祿高ハ明治四年七月二十日士族卒祿高取調ニ關スル民部省達同年同月二十四日同件取調ニ關スル太政官同件取調ニ關スル太政官布告又同年九月賞典祿取調帳並士族卒祿高人別取調帳等ニ關スル大藏省達明治八年太政官第百三十八號布告ニ基キ調査シタル祿高二依ルモノトス但祿高調査以前ノ收祿ニ係ルモノハ收祿ノトキ實際給與ヲ受ケタル祿高二依ル

前條ノ祿高ヲ金額ニ換算スルノ必要アル場合ニ於テハ明治八年太政官第百三十八號布告ニ依ル第三條 第一條ニ依リ給與ヲ受ケムトスル者ハ國事ニ關スル犯罪ノ處刑ヲ宣告セラレタル裁判所又ハ其ノ事務引繼ヲ受ケタル官廳ヨリ本法第四條ノ認定及收祿ニ係ル證明書ヲ受ケ地方廳ニ出願スヘシ但本法施行ノ日ヨリ三箇月内ニ其ノ認定及證明ヲ求メス又ハ認定及證明ヲ受ケタル日ヨリ一箇月内ニ出願ヲ爲ササル者ハ第一條ノ給與ヲ受ケルコトヲ得

附則

第四條 本法ニ於テ國事ニ關スル犯罪トハ其ノ處刑ヲ宣告シタル裁判所又ハ其ノ事務引繼ヲ受ケタル官廳ニ於テ刑法第百十七條、第百十九條、第百二十一條、第百二十三條、第百二十五條、第百二十六條、第百二十七條、第百二十九條、第百三十條、第百三十一條、第百三十二條、第百三十三條、及第百三十四條ノ罪ト同視スヘキ認定ヲ經タルモノヲ云フ

◎國事ニ關スル犯罪ノタメ諸祿ヲ沒收セラ

レタル者ニ關スル件ニ付施行手續

(明治二十七年六月大藏省令第十一號)

本年法律第二十號施行手續左ノ通之ヲ定ム

第一條 法律第二十號第三條ニ依リ給與ヲ出願セントスルモノハ其認定書證明書ト共ニ願書ヲ本籍地ノ道廳府縣ヘ差出スヘシ但願書ニハ收祿當時ノ管轄廳名ヲ記入スヘシ  
出願者ニシテ家名繼襲人タルトキハ戶籍上ノ證明書ヲ本籍地ノ市町村長若クハ區戶長ヨリ申受

ケ之ヲ添付スヘシ

- 第二條 道廳府縣ニ於テ前條ノ願書ヲ受ケタルトキハ左ノ各項ニ依リテ調査シ該法律第一條第二條ニ基キ別記書式ニ依リ給與金額仕譯書ヲ製シ願書及附屬書トモ之ヲ大藏大臣ヘ差出スヘシ
- 一 法律第二條但書ニ該當スルモノハ收祿ノ當時實際給與ヲ受ケタル祿高ヲ認ムルニ足ルヘキ舊記其他ノ參考書類ニ就キ之カ當否ヲ調査スヘシ
- 二 明治八年(九月)太政官第百三十八號布告實施以前ノ收祿ニ係ルモノハ道廳府縣ニ保存スル士族卒祿高取調帳副本ニ就キ其餘高ノ當否ヲ調査スヘシ
- 三 前項布告實施後明治九年(八月)第百八號布告實施以前ノ收祿ニ係ルモノハ地方廳ニ保存スル金祿調帳ニ就キ其當否ヲ調査スヘシ

(別記仕譯書式ハ之ヲ略ス)

### 家祿賞典祿處分法

(明治三十年十月法律第五十號)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル家祿賞典祿處分法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

家祿賞典祿處分法

- 第一條 明治三年九月十日太政官布告藩制施行以後家祿賞典祿ヲ有シタル者及其ノ家名承繼人ニシテ明治九年八月太政官第百八號布告及同年十二月太政官第百五十二號布告施行ノ際其ノ祿高ニ對スル全部ノ給與ヲ受ケサル者若ハ相當額ノ給與ニ不足アル者明治四年七月二十四日祿高ニ關スル太政官布告ニ依リ調査シタル以後ノ祿高及其ノ調査以前ニ係ル藩制施行以後ノ祿高ニ錯誤アルトキハ本法施行ノ日ニ於テ其ノ本人又ハ其ノ家名承繼人ニ限リ其ノ給與未濟額ヲ明治九

年八月太政官第百八號布告第一條及同年十二月太政官第百五十二號布告ノ率ニ據リ換算シ其ノ元金額ヲ祿高整理ノ爲發行スル公債證書ヲ以テ給與ス但常事犯ノ爲沒祿若ハ減祿セラレタル者ハ此ノ限ニ在ラス

第二條 明治六年十二月太政官第四百二十五號布告ニ據リ處分ヲ受ケタル者ニシテ其ノ祿高ニ對スル相當額ノ給與ニ不足アル者ハ其ノ本人及本法施行ノ日ニ於テ現ニ其ノ家名承繼人タル者ニ限リ其ノ給與未濟額ヲ明治六年十二月太政官第四百二十六號布告第一條ノ率ニ據リ換算シ其ノ元金額ヲ祿高整理ノ爲發行スル公債證書ヲ以テ給與ス

第三條 第一條及第二條ノ祿高ヲ金額ニ換算スルハ明治八年九月太政官第百三十八號布告ニ據リ取調ヘタル既定ノ石代相場ニ據ル

第四條 第一條及第二條ノ給與ヲ受ケムトスル者ハ其ノ理由及證據ヲ具シ地方廳ヲ經由シテ大藏大臣ニ願出ツヘシ但本法施行ノ日ヨリ一箇年以内ニ願出サルトキハ本法ノ給與ヲ受ケルコトヲ得ス

附則

第五條 此ノ法律ニ牴觸スル法律命令ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ其ノ效力ヲ失フモノトス

### 大藏省證券條例

(明治十七年九月第二十四號布告)

大藏省證券條例別紙ノ通制定ス

(別紙)

大藏省證券條例

第一條 大藏省證券ハ出納上一時使用ノ爲メ大藏省ヨリ發行スルモノトス

ス

第二條 大藏省證券ハ無記名利付定期拂ニシテ其發行シタル年度ノ歳入ヲ以テ仕拂ヲ爲スモノト

第三條 大藏省證券ノ發行金額及利子金額ハ「大藏卿」之ヲ豫定シ「太政官」ノ裁可ヲ受クヘシ

第四條 大藏省證券ハ百圓、五百圓、千圓、五千圓、一萬圓及十萬圓ノ六種ニ別チ其ノ支拂期限ハ十

二箇月以内トス(明治二十六年法律第十九號ヲ以テ本條ヲ改正ス)

第五條 大藏省證券ハ何人ニテモ授受賣買スルヲ得

第六條 大藏省證券ノ仕拂及ヒ引換ニ關スル事務ハ日本銀行ニ於テ取扱ハシムヘシ

第七條 大藏省證券ノ所持人ハ其仕拂ノ期日ニ至リ日本銀行本支店又ハ代理店ニ於テ其仕拂ヲ請

求スヘシ但其仕拂ハ通貨ヲ以テスルモノトス

第八條 大藏省證券ハ其仕拂期日ヨリ起算シ滿六箇月間ハ之ヲ仕拂フヘシ滿六箇月ヲ過ルトキハ

一切仕拂ヲ爲ササルモノトス但仕拂期日後ハ其利子ヲ付セサルモノトス

第九條 大藏省證券汚染又ハ毀損セシトキハ日本銀行本支店又ハ代理店ニ差出シ證券ノ引換ヲ請

フヘシ但其券面金額記號番號及ヒ主要ノ印部ヲ檢査シ其眞正タルヲ證認シ得ヘキ者ニアラザル

ハ引換サルヘシ

第十條 大藏省證券ノ所持人其證券ヲ亡失セシトキハ其事由竝ニ券面ノ金額支拂期日記號番號及

ヒ所有セシトキノ手續ヲ詳記シ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經テ大藏省ニ届出ヘシ「大藏卿」ハ

其證券ノ授受賣買引換及ヒ仕拂ヲ差止ムヘキ旨ヲ告示スルモノトス但發見シタルトキハ同様ノ

手續ヲ以テ届出スヘシ

第十一條 亡失セシ證券ハ之ヲ發見セサルモ日本銀行本支店又ハ代理店ニ於テ満足スル保證人二

人以上ノ證明アルニ於テハ其元利金額ヲ仕拂フヘシ

第十二條 大藏省證券ヲ偽造若クハ變造シテ行使シタルモノハ刑法第二百四條第二項ニ依テ處斷

ス

公債終

第二十二類 學事

教育ニ關スル勅語

(明治二十三年十月文部省訓令第八號)

今般教育ニ關シ

勅語ヲ下タシタマヒタルニ付其謄本ヲ頒チ本大臣ノ訓示ヲ發ス管内公私立學校へ各一通ヲ交付シ能ク

聖意ノ在ル所ヲシテ貫徹セシムヘシ

別紙

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉已レテ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ咸其德チ一ニセンコトヲ庶幾フ

訓示

學

事

一

謹テ惟フニ我カ

天皇陛下深ク臣民ノ教育ニ軫念シタマヒ茲ニ添ク

勅語ヲ下タシタマフ顯正職ヲ文部ニ奉シ躬重任ヲ荷ヒ日夕省思シテ繼フ所ヲ愆ランコトヲ恐ル令

勅語ヲ奉承シテ感蓄措ク能ハス謹テ

勅語ノ膺本ヲ作り管ク之ヲ全國ノ學校ニ頒ツ凡ソ教育ノ職ニ在ル者須ク常ニ聖意ヲ奉體シテ研磨

薰陶ノ務ヲ怠ラサルヘク殊ニ學校ノ式日及其他便宜日時ヲ定メ生徒ヲ會集シテ勅語ヲ奉讀シ且意

ヲ加ヘテ諄諄誨告シ生徒ヲシテ夙夜ニ佩服スル所アラシムヘシ

◎帝國大學令 (明治十九年三月勅令第三號)

朕帝國大學令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝國大學令

第一條 帝國大學ハ國家ノ須要ニ應スル學術技藝ヲ教授シ及其蘊奧ヲ攻究スルヲ以テ目的トス

第二條 帝國大學ハ大學院及分科大學ヲ以テ構成ス大學院ハ學術技藝ノ蘊奧ヲ攻究シ分科大學ハ

學術技藝ノ理論及應用ヲ教授スル所トス

第三條 分科大學ノ學科ヲ卒ヘ定規ノ試験ヲ經タル者ニハ卒業證書ヲ授與ス

第四條 分科大學ノ卒業生若クハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者ニシテ大學院ニ入り學術技藝ノ蘊奧

ヲ攻究シ定期ノ試験ヲ經タル者ニハ學位ヲ授與ス

第五條 帝國大學總長ハ帝國大學ヲ總轄シ帝國大學内部ノ秩序ヲ保持ス (明治二十六年勅令第八

十二號ヲ以テ改正)

第六條 帝國大學ニ評議會ヲ設ク (同上)

評議會ハ各分科大學長及各分科大學教授各一名ヲ以テ會員トス

帝國大學總長ハ評議會ヲ召集シ其ノ議長トナル

第七條 教授ニシテ評議員タルモノハ各分科大學毎ニ教授ノ互撰ニ依リ文部大臣之ヲ命ス (同上)

前項ノ評議員ハ三箇年ヲ以テ任期トス但滿期ノ後再撰セラレコトヲ得

第八條 評議會ハ左ノ事項ヲ審議ス (明治二十六年勅令第八十二號ヲ以テ改正)

第一 各分科大學ニ於ケル學科ノ設置廢止ノ件

第二 講座ノ種類ニ付諮詢ノ件

第三 大學内部ノ制規但勅令又ハ省令ヲ發スルノ必要アルモノハ其建議案

第四 學位授與ノ件

第五 其他文部大臣又ハ帝國大學總長ヨリ諮詢ノ件

評議會ハ高等教育ニ關スル事項ニ付其ノ意見ヲ文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第九條 分科大學ハ法科大學醫科大學工科大學理科大學農科大學トス (同上)

第十條 分科大學長ハ分科大學ノ學務ヲ統理ス (同上)

第十一條 各分科大學ノ教官ハ教授及助教授トス (同上)

第十二條 必要ナル場合ニ於テハ帝國大學總長ハ講師ヲ囑託スルコトヲ得 (同上)

第十三條 帝國大學ニ功勞アリ又ハ學術上成績アル者ニ對シ勅旨ニ由リ又ハ文部大臣ノ奏宣ニ由

リ名譽教授ノ名稱ヲ與フルコトアルヘシ (同上)

第十四條 各分科大學ニ教授會ヲ設ケ教授ヲ以テ會員トス (同上法令ヲ以テ本條追加)

分科大學長ハ教授會ヲ召集シ其ノ議長トナル

第十五條 教授會ハ左ノ事項ヲ審議ス(同上法令ヲ以テ本條以下ヲ追加ス)

第一 分科大學ノ學科課程ニ關スル件

第二 學生試驗ノ件

第三 學位授與資格ノ審査

第四 其ノ他文部大臣又ハ帝國大學總長ヨリ諮詢ノ件

第十六條 分科大學長ハ必要アリト認ムルトキハ教授ノ外助教授又ハ囑託講師ヲ教授會ニ列席セ

シムルコトヲ得

第十七條 各分科大學ニ講座ヲ置キ教授ヲシテ之ヲ擔任セシム

教授ヲ缺ク場合ニ於テハ助教授又ハ囑託講師ヲシテ講座ヲ擔任セシムルコトアルヘシ

第十八條 講座ノ種類及其數ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十九條 本令ハ明治二十六年九月十一日ヨリ施行ス

### 師範教育令 (明治三十年十月勅令第三百四十六號)

朕師範教育令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

師範教育令

第一條 高等師範學校ハ師範學校尋常中學校及高等女學校ノ教員タルヘキ者ヲ養成スル所トス

女子高等師範學校ハ師範學校女子部高等女學校ノ教員タルヘキ者ヲ養成スル所トス

師範學校ハ小學校ノ教員タルヘキ者ヲ養成スル所トス

前三項ニ記載シタル學校ニ於テハ順其信愛威重ノ徳性ヲ涵養スルコトヲ務ムヘシ

第二條 高等師範學校及女子高等師範學校ハ東京ニ各一校ヲ設置シ師範學校ハ北海道及各府縣ニ

各一校若ハ數校ヲ設置ス

第三條 高等師範學校及女子高等師範學校ハ文部大臣ノ管理ニ屬シ師範學校ハ地方長官ノ管理ニ

屬ス

第四條 師範學校ノ經費(北海道及沖繩縣ヲ除ク)ハ府縣稅又ハ地方稅ノ負擔トス

第五條 師範學校ノ設備ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第六條 高等師範學校女子高等師範學校及師範學校ノ生徒ノ募集及卒業後ノ服務ニ關スル規則ハ

文部大臣之ヲ定ム

第七條 高等師範學校女子高等師範學校及師範學校生徒ノ學資ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依リ其ノ

學校ヨリ之ヲ支給スヘシ

前項ノ外文部大臣ノ定ムル所ニ依リ私費生ヲ置クコトヲ得

第八條 高等師範學校女子高等師範學校及師範學校ノ學科及其ノ程度並教科書ハ文部大臣之ヲ定

ム

第九條 師範學校ニ豫備科小學校教員講習科及幼稚園保姆講習科ヲ置クコトヲ得

附 則

第十條 本令ハ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス

明治十九年勅令第十三號師範學校令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

第十一條 他ノ法令中尋常師範學校トアルハ本令施行ノ日ヨリ當然師範學校ト改正セラレタルモ



ノト看做ス

### 師範學校生徒定員ニ關スル件

(明治三十年十月勅令第三百四十七號)

朕師範學校生徒定員ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

師範學校生徒定員

第一條 師範學校ハ道府縣管内學齡兒童數三分ノ二ニ對シ一學級七十名ノ割合ヲ以テ算出スル全學級數ノ二十分ノ一以上ニ相當スル卒業生ヲ出スニ足ルヘキ生徒ヲ毎年募集スヘシ

第二條 男女生徒員數ノ割合ハ地方長官之ヲ定メ文部大臣ニ開申スヘシ

第三條 地方ノ情況ニ依リ女生徒ヲ置カサルトキハ其ノ事由ヲ具シテ文部大臣ノ認可ヲ經ヘシ

附則

第四條 本令ハ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス

設備ノ都合ニ依リ已ムヲ得サル場合ニ於テハ地方長官ハ文部大臣ノ許可ヲ受ケ前項期限ヨリ一箇以內生徒定員ニ關スル從前ノ規程ヲ適用スルコトヲ得

### 師範學校私費生規則

(明治三十年十月文部省令第二十一號)

師範學校私費生規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

師範學校生徒私費生規則

第一條 師範學校ニ於テ私費生ヲ置カントスルトキハ地方長官ハ其ノ員數ヲ定メ文部大臣ノ認可

ヲ受ケヘシ

第二條 私費生ハ文部省令ヲ以テ特別ノ規定ヲ設クルモノノ外總テ公費生ト同シキモノトス

第三條 私費生ニ關シ必要ナル規則ハ地方長官之ヲ定ム

附則

第四條 此省令ハ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス

### 工業教員養成規程

(明治二十七年六月文部省令第十二號)

工業教員養成規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

工業教員養成規程

第一條 實業教育費國庫補助法第七條ニ基キ徒弟學校及工業補習學校教員ヲ養成スル爲ニ工業教員養成所ヲ置ク

工業教員養成所ハ東京工業學校ヲシテ之ヲ管理セシム

第二條 工業教員養成所ニ本科及速成科ヲ置キ本科生徒ノ定員ハ百名トシ速成科生徒ノ定員ハ四十名トス

第三條 本所生徒ニハ學資ヲ補給ス

第四條 本科ノ修業年限ハ二箇年トス但學校長ノ意見ニ依リ仍一箇年間補習セシムルコトヲ得速成科ノ修業年限ハ一箇年トス

第五條 本科ニ入ルヘキ生徒ハ年齢十七年以上ノ男子ニシテ尋常中學校ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

入學生ノ一部ハ地方長官ヲシテ之ヲ薦舉セシメ他ノ一部ハ競争試験ニ依ル

速成科ニ入ルヘキ生徒ノ資格ハ文部大臣ノ許可ヲ經テ東京工業學校長之ヲ定ム

第六條 本科生徒ハ卒業ノ日ヨリ六箇年間文部大臣ノ指定スル學校教員ノ職ニ從事スルノ義務ヲ有ス其ノ地方長官ノ薦舉ニ依ル者ハ地方長官ニ於テ指定スル學校教員ノ職ニ從事スヘキ義務ヲ有ス但薦舉シタル地方ニ於テ就職スヘキ學校ナキトキハ文部大臣ニ於テ指定スヘシ

第七條 速成科生徒ハ卒業ノ日ヨリ二箇年間文部大臣ノ指定スル學校教員ノ職ニ從事スヘキ義務ヲ有ス

第八條 半途退學ノ者又ハ卒業後第六條及第七條ニ定ムル義務ヲ盡ササル者ハ補給シタル學資ヲ償還スヘシ但文部大臣ハ學校長ノ具申ニ依リ事情ヲ酌量シテ其ノ全部又ハ一部ノ償還ヲ免除スルコトアルヘシ

第九條 本規程ハ明治二十七年九月一日ヨリ施行ス

### 諸學校通則 (明治十九年四月勅令第十六號)

朕諸學校通則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

諸學校通則

第一條 師範學校ヲ除クノ外各種ノ學校又ハ書籍館ヲ設置維持スルニ足ルヘキ金額ヲ寄附シ其管理ヲ文部大臣又ハ府知事「縣令」ニ願出ルモノアルトキハ之ヲ許可シ官立又ハ府縣立ト同一ニ之ヲ認ルコトヲ得但寄附人ノ望ニ依リ其名稱ヲ附スルコトヲ得

第二條 寄附金ハ其寄附人ヨリ指定セシ用途ノ外ニ支消スルコトヲ得ス

第三條

學校幼稚圖書籍館等ノ設置變更廢止其府縣立ニ係ルモノハ文部大臣ノ認可ヲ經ヘク其區町村立ニ係ルモノハ府知事「縣令」ノ認可ヲ經ヘシ其私立ニ係ルモノハ設置變更ハ府知事「縣令」ノ認可ヲ經ヘク廢止ハ府知事「縣令」ニ上申スヘシ

第四條 凡教員ハ文部大臣若クハ府知事「縣令」ノ免許狀ヲ得タルモノタルヘシ

第五條 公立學校ノ用地ハ免稅タルヘシ

### 高等學校令 (明治二十七年六月勅令第七十五號)

朕高等學校令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

高等學校令

第一條 第一高等中學校、第二高等中學校、第三高等中學校、第四高等中學校及第五高等中學校ヲ高等學校ト改稱ス

第二條 高等學校ハ專門學科ヲ教授スル所トス但帝國大學ニ入學スル者ノ爲メ豫科ヲ設クルコトヲ得

第三條 高等學校ハ其ノ附屬トシテ低度ナル特別學科ヲ設クルコトヲ得

第四條 高等學校ニ於テ設クル所ノ學科及講座ノ數ハ文部大臣之ヲ定ム

附則

第五條 本令ハ明治二十七年九月十一日ヨリ施行ス但各高等學校ニ於テ學科ヲ設置スルノ時期ハ文部大臣之ヲ指定スヘシ

本令ヲ施行シ又ハ一部ヲ施行スル所ノ高等學校ニ於テ高等中學校ノ學科ヲ履修スル年期内ニ在

ル生徒ノ爲ニ舊學科ヲ存スルコトヲ得

### ◎高等學校ニ法學部醫學部工學部及大學

豫科ヲ設置ス (明治二十七年七月文部省令第十五號)

第三高等學校ニ法學部醫學部工學部ヲ設置シ第一第二第四第五高等學校ニ醫學部及大學豫科ヲ設置ス

此ノ省令ハ明治二十七年九月十一日ヨリ施行ス

### ◎高等學校修業年限及入學程度

(明治二十七年七月文部省令第十六號)

高等學校ノ修業年限及入學程度ヲ定ムルコト左ノ如シ

高等學校修業年限及入學程度

第一條 第三高等學校ノ法學部工學部各高等學校ノ醫學部ノ修業年限ハ四箇年トス但醫學部ニ於

ケル藥學科ノ修業年限ハ舊ニ仍ル

大學豫科ノ修業年限ハ三箇年トス

第二條 高等學校入學ノ程度ハ尋常中學校卒業ノ程度ニ依ル

### ◎中學校令 (明治十九年四月勅令第十五號)

朕中學校令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

#### 中學校令

第一條 中學校ハ實業ニ就カント欲シ又ハ高等ノ學校ニ入ラント欲スルモノニ須要ナル教育ヲ爲ス所トス

第二條 中學校ヲ分チテ「高等」尋常ノ二等トス「高等中學校」ハ文部大臣ノ管理ニ屬ス

第三條 「高等中學校」ハ法科醫科工科文科理科農業商業等ノ分科ヲ設クルコトヲ得

第四條 「高等中學校」ハ全國(北海道沖繩縣ヲ除ク)ヲ五區ニ分畫シ每區ニ一箇所ヲ設置ス其區域ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

第五條 「高等中學校」ノ經費ハ國庫ヨリ之ヲ支辨シ又ハ國庫ト該學校設置區域内ニ在ル府縣ノ地方稅トニ依リ之ヲ支辨スルコトアルヘシ但此場合ニ於テハ其管理及經費負擔ノ方法等ハ別ニ之ヲ定ムヘシ

第六條 尋常中學校ハ各府縣ニ於テ一校ヲ設置スヘキモノトス但土地ノ情況ニ依リ文部大臣ノ許可ヲ得テ數校ヲ設置シ又ハ本文ノ一校ヲ設置セサルコトヲ得 (明治二十四年勅令第二百四十三號ヲ以テ改正)

第七條 中學校ノ學科及其程度ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

第八條 中學校ノ教科書ハ文部大臣ノ檢定シタルモノニ限ルヘシ

第九條 郡市町村ニ於テハ土地ノ情況ニ依リ須要ニシテ其區域内小學教育ノ施設上妨ナキ場合ニアラサレハ尋常中學校ヲ設置スルコトヲ得ス(同上)

前項ノ制限内ニ於テ府縣知事尋常中學校ノ設置ヲ認可セントスルトキハ豫メ文部大臣ノ指揮ヲ請フヘシ(同上法令ヲ以テ本條追加)

第十條 尋常中學校ノ設備ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム  
 第十一條 中學校ノ教員ハ文部大臣ノ免許狀ヲ得タルモノタルヘシ  
 第十二條 尋常中學校ハ農業工業商業等ノ專修科ヲ設クルコトヲ得  
 第十三條 「高等中學校」及公立尋常中學校ハ相當ノ授業料等ヲ徴收スヘキモノトス但獎勵ノ爲メ  
 品行端正學業優秀ノ生徒ニ之ヲ減免スルハ此限ニ在ラス  
 第十四條 高等女學校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ施ス所ニシテ尋常中學校ノ種類トス  
 高等女學校ハ女子ニ須要ナル技藝專修科ヲ設クルコトヲ得  
 附則  
 本令ハ明治二十五年四月一日ヨリ施行ス但既設ノ尋常中學校ニシテ本令ノ規程ニ依リ難キ場合ニ  
 於テハ明治二十六年三月三十一日迄其ノ施行ヲ延期スルコトヲ得  
 第九條中ニ掲クル郡ハ郡制ヲ施行シタルモノニ限ル

尋常中學校ノ學科程度 (明治二十七年三月文部省令第七號)

尋常中學校ノ學科及程度ニ關シ改正スルコト左ノ如シ  
 第一條 尋常中學校ノ學科ハ倫理、國語及漢文、外國語、歷史、地理、數學、博物、物理及化學、習字、  
 圖畫、體操トス  
 第二條 尋常中學校ノ各學科授業ノ時數ハ左表ノ如シ但府縣立學校ハ地方長官ニ於テ、郡市町村  
 立又ハ私立學校ハ地方長官ヲ經テ文部大臣ノ認可ヲ受ク之ヲ斟酌スルコトヲ得

	第一	第二	第三	第四	第五
倫理	一	一	一	一	一
國語及漢文	七	七	七	七	七
外國語	六	七	七	七	七
歷史		三	三	三	四
地理	三	三	三	三	四
數學	四	四	四	四	四
博物					
物理及化學	一	一	二	四	四
習字	一	一	一		
圖畫	二	一	一	一	
體操	三	三	三	三	三
計	二八	二八	二九	三〇	三〇

第三條 明治十九年文部省令第十四號第五條ニ定メタル各學科ノ程度中漢文ノ書取作文及數學ノ  
 球面三角ヲ削ル  
 第四條 尋常中學校ニ於テハ實業ニ就カント欲スルモノニ適切ナル教育ヲ施ス爲ニ第四年級以上  
 ニ於テ本科ノ外分テ實科ヲ設クルコトヲ得此ノ場合ニ府テハ府縣立學校ハ地方長官ニ於テ、

郡市町村立又ハ私立學校ハ地方長官ヲ經テ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第五條 明治十九年文部省令第十四號第七條ヲ削除ス

第六條 従前ノ規定ニシテ本令ニ牴觸スルモノハ之ヲ廢ス

第七條 沖繩縣ニ於ケル尋常中學校ハ同縣知事ニ於テ文部大臣ノ認可ヲ受ク特別ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第八條 本令ハ明治二十七年四月一日ヨリ施行ス

第九條 本令施行ノ前ニ入學シタルモノニハ其ノ卒業ニ至ルマテ従前ノ規定ニ依リ若ハ新舊ノ規定ヲ斟酌シテ教授スルコトヲ得前項ニ依リ規定ヲ斟酌シタル場合ニ於テハ府縣立學校ハ地方長官ニ於テ郡市町村立又ハ私立學校ハ地方長官ヲ經テ文部大臣ニ開申スヘシ

尋常中學校實科規程 (明治二十七年六月文部省令第十三號)

尋常中學校實科規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

尋常中學校實科規程

第一條 明治二十七年文部省令第七號第四條ノ規定ニ依リ第四年級以上ニ於テ設クル所ノ實ノ科目ハ倫理、國語及漢文、歴史、地理、數學、博物、物理及化學、實業要項、體操トス

前項ノ外隨意科トシテ簿記、習字、圖畫、測量、外國語ノ一科又ハ數科ヲ加フルコトヲ得

第二條 地方ノ必要ニ從ヒ專ラ實業ニ就カントスル者ニ適切ナル教育ヲ施ス爲ニ第一年級ヨリ專ラ實科ヲ授クル所ノ尋常中學校ヲ設クルコトヲ得此場合ニ於テハ第一條ニ掲ケタル科目ニ依リ仍習字、圖畫ヲ必修科トスヘシ

第三條 前條ノ尋常中學校ハ實科中學校ト稱フルコトヲ得

第四條 實科ノ各學科及授業時數ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ムヘシ學科ノ教授時數ハ體操及實習時間ヲ除キ每週二十七時ヲ越エヘカラス

尋常中學校入學規程 (明治二十七年九月勅令第二十四號)

尋常中學校入學規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

尋常中學校入學規程

第一條 尋常中學校ノ第一年級ニ入學セシムヘキ者ハ身體健康年齡滿十二年以上ニシテ高等小學校第二年ノ課程ヲ取リタル者若クハ之ニ均シキ學力ヲ有スル者トス

第二條 尋常中學校第一年級入學者ノ學力ノ檢定ハ高等小學校第二年ノ規程ヲ卒リタル志願者ニ對シテハ其修業證書ニ依リ其他ノ志願者ニ對シテハ試験ニ依ル

高等小學校第二年ノ課程ヲ卒リタル志願者ニハ其他ノ志願者ニ先チテ入學ヲ許スコトヲ得但高等小學校第二年ノ課程ヲ卒リタル志願者ノ數入學セシムヘキ人員ニ超過スルトキハ仍試験ニ依リテ入學者ヲ選抜スヘシ

第三條 尋常中學校第一年級ノ入學試験ハ高等小學校第二年ノ課程ヲ卒リタル者ニ對シテハ讀書作文、習字、算術ニ就キ其他ノ志願者ニ對シテハ尙日本歴史、日本地理ヲ加ヘ高等小學校第二年卒業ノ程度ニ依リ之ヲ行フヘシ

尋常中學校設備規則 (明治二十四年十二月文部省令第二十七號)

明治十九年四月勅令第十五號中學校令第十條ニ基キ尋常中學校ノ設備ニ關スル規則ヲ定ムルコト  
左ノ如シ

尋常中學校設備規則

第一條 校地ハ學校ノ規模ニ適應ナル地積ヲ有シ道德上並衛生上ニ害ナキ所タルヘシ

第二條 校地内ニハ體操場ニ充ツヘキ相當ノ場所ヲ設クヘシ土地ノ情況ニ依リ校地内ニ之ヲ設ク  
ルコトヲ得サルトキハ他ノ場所ニ設クルモ妨ケナシ

第三條 校舍ハ左ノ教室等ヲ備フヘシ

- 一 生徒各組ニ應スル通常教室
- 一 物理化學博物圖畫ノ特別教室
- 一 圖書室機械室藥品室標本室
- 一 講堂

一 職員室生徒控室其他所要ノ諸室等

前項ノ外土地ノ情況ニ依リ體操場ニ充ツヘキ相當ノ建物ヲ設クヘシ

第四條 生徒ヲ寄宿セシムヘキ學校ニ於テハ寄宿舎ヲ設クヘシ

寄宿舎ハ自修室寢室ヲ區別シ且舍監室食堂浴室盥嗽場等ヲ備フヘシ

第五條 校舍ハ其構造堅牢ニシテ教授上管理上及衛生上ニ適スルモノタルヘシ

第六條 教室ニ要スル黑板机腰掛等ハ適應ナルモノヲ備ヘ其他舍室ニ要スル器品等ヲ備フヘシ

第七條 物理化學植物動物礦物地理數學生理圖畫等ノ教授用器械標本模型掛圖其他體操用器具等  
ノ尋常中學校ノ學校程度ヲ教授スルニ差支ナキ様之ヲ備フヘシ

第八條 圖書ハ教授用參考用ノモノヲ備フヘシ

第九條 教員ハ受持學科授業時數及生徒ノ組數ニ依リ相當ノ員數ヲ置クヘシ

第十條 農業工業商業等ノ專修科ヲ設クルトキハ特ニ農業ニ於テハ實驗用田圃及農具等商業ニ於  
テハ商業實習室及商品見本等工業ニ於テハ實習工場及工具等ノ設備ヲ爲スヘク其他ノ專修科ヲ  
設クル場合ニ於テモ亦之ニ準シ其特殊ノ設備ヲ爲スヘシ

◎中學校ノ學科程度ト同等以上ト認ムヘキ學校

(明治二十二年五月文部省令第一號)

明治二十二年(一月)法律第一號徵兵令第十一條中學校ノ學科程度ノ同等以上ト認ムヘキ學校ハ其  
市町村立ニ係ルモノハ左ノ第一項第二項ニ該當シ私立ニ係ルモノハ左ノ各項ニ該當スルヲ要スル  
儀ニ付該事項ヲ具備スルモノアリト思考スルトキハ其狀況ヲ稟申スヘシ

- 一 普通學校ニ在リテハ中學校ノ成規ニ準據シタルモノタルヘク農工商等ノ實業學校ニ在リテ  
ハ入學生徒ハ高等小學校卒業ノ者若クハ之ニ均シキ學力ヲ有スル者ニシテ三箇年以上ノ學  
科課程ヲ具フルモノタルヘク其他專門學校ニ在リテハ入學生徒ハ尋常中學校卒業ノ者若ク  
ハ概テ尋常中學校ノ程度ニ據リ相當ナル豫備ノ學科ヲ修メタル者ニシテ三箇年以上ノ學科  
課程ヲ具フルモノタルヘキ事

- 一 所定ノ學科ヲ教授スルニ足ルヘキ教員及校舍器具地所等ヲ具備スル事
- 一 學校長及教員任免ノ方法一定確實ナル事
- 一 授業料束脩等ノ如キ豫メ確定シ難キ收入金ヲ除キ毎年ノ資金中二千四百圓以上ハ全ク資本

ノ利子ト認メ得ヘキモノアル事  
一 設置以來三箇年ヲ經テ相當ノ成績アルモノタルヘキ事

地方學事通則

(明治二十三年十月法律第八十九號)

朕地方學事通則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

地方學事通則

第一條 町村ハ教育事務ノ爲勅令ノ規程ニ依リ町村學校組合ヲ設ク

町村學校組合ニハ町村制第百十七條ヲ適用ス

第二條 市町村及町村學校組合ハ勅令ノ規程ニ依リ小學校教育事務ノ爲之ヲ數區ニ分置ス

前項ノ場合ニ於テ其區ニ區會者クハ區總會ノ設ナキトキハ市制第百十三條町村制第百十四條ノ

規程ヲ適用ス

一區若クハ數區ヲシテ專ラ使用セシムル小學校ニ關シテハ其區内ニ住居シ若クハ滞在シ又ハ土

地家屋ヲ所有シ營業(店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク)ヲナス者ニ於テ設立維持ヲ負擔スヘシ但其區

ノ所有財產アルトキハ其收入ヲ以テ先ツ其費用ニ充ツヘシ

市制第六十條町村制第六十四條ノ區長並其代理者ハ命令ノ定ムル所ニ從ヒ其區ニ屬スル國ノ教

育事務ヲ補助執行ス

第三條 教育事務ニ關シテハ市町村内ノ區及町村學校組合若クハ其區ニ對シ市若クハ町村ニ關ス

ル法律ノ規程ヲ適用スルコトヲ得

第四條 町村及町村學校組合若クハ其區ハ郡長ノ指定ニ從ヒ他町村又ハ町村學校組合若クハ其區

ノ兒童教育事務ノ委託ニ應スヘシ

第五條 町村學校組合ヲ解ク場合町村學校組合内ノ某町村ヲシテ其小學校數校中ノ一校若クハ若

干校ノ設立維持ヲ一町村限リ負擔セシムル場合又ハ町村學校組合内ノ某町村ヲシテ兒童教育事

務ノ委託ヲ一町村限リ負擔セシムル場合ニ於テ財產處分ニ付關係町村ノ協議整ハサルトキハ郡

參事會ニ於テ之ヲ議決スヘシ

兒童教育事務ノ委託ニ對スル報酬金ノ給否金額及其他必要ノ事項ニ付關係町村ノ協議整ハサル

トキモ亦前項ノ例ニ依ル

第六條 府縣郡市町村及町村學校組合ハ教育事務ノ爲勅令ノ定ムル所ニ依リ學務委員ヲ置クヘシ

市町村内若クハ町村學校組合内ノ區ハ小學校教育事務ノ爲勅令ノ定ムル所ニ依リ學務委員ヲ置

クコトヲ得

第七條 市町村立學校長其他校員學務委員及區長並其代理者等ノ執行スル國ノ教育事務ハ市制第

三十一條第二本文町村制第三十三條第二本文ニ依ルノ限ニ在ラス

第八條 府縣郡市町村吏員ニ對スル懲戒處分ニシテ國ノ教育事務取扱ニ關スルモノニ就キテハ其

懲戒ノ規程ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第九條 府縣郡市町村町村學校組合及市町村内若クハ町村學校組合内ノ區ハ學校基本財産ヲ設ク

ルコトヲ得

學校基本財産ハ單ニ某學校ノ爲之ヲ設ケ又ハ通シテ數學校ノ爲之ヲ設クルコトヲ得

學校基本財産ノ設置及處分ハ監督官廳ノ許可ヲ受クヘシ(明治二十九年法律第八十一號ヲ以テ

本項改正)

學校基本財産ノ收入ヲ教育ニ關スル目的ノ外ニ使用スルトキハ監督官廳ノ許可ヲ受ケヘシ

第十條 府縣郡市町村學校組合及市町村内若クハ町村學校組合内ノ區ハ教育ニ關スル寄附金等アルトキハ學校基本財産トナスヘシ但寄附者其使用ノ目的ヲ定ムルモノハ此限ニ在ラス

公立學校ノ授業料入學試驗料書器使用料等ハ學校基本財産トナスコトヲ得  
府縣郡市町村學校組合及市町村内若クハ町村學校組合内ノ區ハ歳出ノ殘餘ヲ以テ學校基本財産トナシ又ハ特ニ歳入ノ幾分ヲ増加シテ學校基本財産トナスコトヲ得(同上)

第十一條 従前學校ノ爲設ケタル積立金等ニシテ市制第八十一條町村制第八十一條ニ依リ市町村基本財産ニ加入シタルモノハ本法實施後二年間ハ府縣郡參事會ノ許可ヲ受ケ之ヲ區分シテ學校基本財産トナスコトヲ得

第十二條 府縣制郡制市制町村制ニ規定シタル内務大臣ノ職務及關係ハ教育ニ關スル事項ニ就キテハ内務文部兩大臣ニ屬スルモノトス

第十三條 本法ハ市制町村制ヲ施行シタル府縣ニ施行スルモノトス其施行ノ時期ハ府縣知事ノ具申ニ依リ文部大臣之ヲ定ム

### 小學校令

(明治二十三年十月勅令第二百十五號)

朕小學校令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

小學校令

#### 第一章 小學校ノ本旨及種類

第一條 小學校ハ兒童身體ノ發達ニ留意シテ道德教育及國民教育ノ基礎並其生活ニ必須ナル普通

ノ智識技能ヲ授クルヲ以テ本旨トス

第二條 小學校ハ之ヲ分テ尋常小學校及高等小學校トス

市町村若クハ町村學校組合又ハ其區ノ負擔ヲ以テ設置スルモノヲ市町村立小學校トシ一人若クハ數人ノ費用ヲ以テ設置スルモノヲ私立小學校トス  
徒弟學校及實業補習學校モ亦小學校ノ種類トス

#### 第二章 小學校ノ編制

第三條 尋常小學校ノ教科目ハ修身讀書作文習字算術體操トス

土地ノ情況ニ依リ體操ヲ缺クコトヲ得又日本地理日本歴史圖畫唱歌手工ノ一科目若クハ數科目ヲ加ヘ女兒ノ爲ニハ裁縫ヲ加フルコトヲ得

第四條 高等小學校ノ教科目ハ修身讀書作文習字算術日本地理日本歴史外國地理理科圖畫唱歌體操トス女兒ノ爲ニハ裁縫ヲ加フルモノトス

土地ノ情況ニ依リ外國地理唱歌ノ一科目若クハ二科目ヲ缺クコトヲ得又幾何ノ初歩外國語農業手工ノ一科目若クハ數科目ヲ加フルコトヲ得

第五條 尋常小學校ノ教科ト高等小學校ノ教科トナ一校ニ併セ置クコトヲ得

第六條 高等小學校ニ於テハ土地ノ情況ニ依リ農科商科工科ノ一科若クハ數科ノ專修科ヲ置クコトヲ得其專修科ハ正教科ニ併セ置キ又ハ之ニ代フルモノトス

第七條 尋常小學校又ハ高等小學校ニ補習科ヲ置クコトヲ得

第八條 尋常小學校ノ修業年限ハ三箇年又ハ四箇年トシ高等小學校ノ修業年限ハ二箇年三箇年又ハ四箇年トス



第九條 專修科補習科徒弟學校及實業補習學校ノ教科目及修業年限ハ文部大臣之ヲ定ム  
第十條 小學校ノ某教科目ハ文部大臣定ムル所ノ規則ニ從ヒ之ヲ隨意科目トナシ又ハ之ヲ學習シ  
能ハサル兒童ニ課セサルコトヲ得

第十一條 第三條又ハ第四條ニ依リ小學校ノ教科目ヲ加除スルニハ市町村立小學校ニ就キテハ其  
市參事會又ハ町村長ニ於テ私立小學校ニ就キテハ其設立者ニ於テ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ  
第五條ニ依リ尋常小學校ノ教科ト高等小學校ノ教科トナ一校ニ併セ置キ又ハ其併置ヲ止ムルニ  
ハ市町村立小學校ニ就キテハ其市町村ニ於テ私立小學校ニ就キテハ其設立者ニ於テ府縣知事ノ  
許可ヲ受クヘシ

第六條第七條又ハ第八條ニ依リ正教科專修科若クハ補習科ヲ設置廢止シ又ハ修業年限ヲ定ムル  
ニハ市町村立小學校ニ就キテハ其市町村ニ於テ私立小學校ニ就キテハ其設立者ニ於テ府縣知事  
ノ許可ヲ受クヘシ  
第十二條 小學校教則ノ大綱ハ文部大臣之ヲ定ム

府縣知事ハ小學校教則ノ大綱ニ基キ其府縣ノ小學校教則ヲ定メ文部大臣ノ許可ヲ受クヘシ  
第十三條 小學校ノ單數多級ノ制男女ヲ區別シ教授スヘキ場合多級ノ學校ニ學校長ヲ置クヘキ場  
合一教員ノ教授シ得ヘキ兒童ノ數等ニ關シテハ文部大臣之ヲ規定ス  
第十四條 小學校ノ休業ハ日曜日ヲ除クノ外毎年九十日ヲ超エサルモノトス但徒弟學校實業補習  
學校補習科等ニ就キテハ此限ニ在ラス

特別ノ事情アルトキハ府縣知事ニ於テ文部大臣ノ許可ヲ受ケテ前項ニ依ラサルコトヲ得  
傳染病ノ流行其他非常變災アルトキハ市内ニ在ル小學校ニ就キテハ府縣知事町村内ニ在ル小學

校ニ就キテハ郡長ニ於テ一時之ヲ閉サシムヘシ急迫ナル場合ニ於テハ市町村長ニ於テモ亦之ヲ  
閉ツルコトヲ得

第十五條 小學校ノ每週教授時間ノ制限及祝日大祭日ノ儀式等ニ關シテハ文部大臣之ヲ規定ス  
第十六條 小學校ノ教科用圖書ハ文部大臣ノ檢定シタルモノニ就キ小學校圖書審查員委ニ於テ審  
査シ府縣知事ノ許可ヲ受ケタルモノニ限ルヘシ  
審查委員ハ府縣ニ置キ府縣官府縣參事員尋常師範學校校長教員尋常中學校教員ヲ以テ之ヲ組織會  
ス

第十七條 小學校ニ於テハ校舍校地校具體操場ヲ備ヘ又農科ヲ設クル小學校ニ於テハ農業練習場  
ヲ備フヘキモノトス  
特別ノ事情アルトキハ體操場農業練習場ヲ備ヘサルコトヲ得此場合ニ於テハ市町村立小學校ニ

就キテハ其市町村ニ於テ監督官廳ノ許可ヲ受クヘク市内ニ在ル私立小學校ニ就キテハ其設立者  
ニ於テ府縣知事町村内ニ在ル私立小學校ニ就キテハ其設立者ニ於テ郡長ノ許可ヲ受クヘシ  
第十八條 校舍校地校具體操場農業練習場ハ非常變災ノ場合ヲ除クノ外小學校ノ目的ニ關セサル  
事件ノ爲使用スルコトヲ得ス若シ特別ノ事情アリテ之ヲ使用セントスルトキハ市町村小學校ニ

就キテハ其ノ市町村長ニ於テ監督官廳ノ許可ヲ受クヘク市内ニ在ル私立小學校ニ就キテハ其設  
立者ニ於テ府縣知事町村内ニ在ル私立小學校ニ就テハ其設立者ニ於テ郡長ノ許可ヲ受クヘシ  
第十九條 校舍校地校具體操場農業練習場ノ設備ニ關スル規則ハ文部大臣定ムル所ノ準則ニ基キ  
府縣知事ニ於テ土地ノ情況ヲ量リ之ヲ定ムヘシ

第三章 就學

第二十條 兒童滿六歲ヨリ滿十四歲ニ至ル八箇年ヲ以テ學齡トス  
學齡兒童ヲ保護スヘキ者ハ其學齡兒童ヲシテ尋常小學校ノ教科ヲ卒ラサル間ハ就學セシムルノ  
義務アルモノトス

前項ノ義務ハ兒童ノ學齡ニ達シタル年ノ學年ノ始メヨリ生スルモノトス  
學齡兒童ヲ保護スヘキ者ト認ムヘキ要件ハ文部大臣之ヲ規定ス

第二十一條 貧窮ノ爲又ハ兒童ノ疾病ノ爲其他已ムヲ得サル事故ノ爲學齡兒童ヲ就學セシムルコ  
ト能ハサルトキハ學齡兒童ヲ保護スヘキ者ハ就學ノ猶豫又ハ免除ヲ市町村長ニ申立ツヘシ

市町村長ハ前項ノ申立ニ依リ必要ナリト認ムルトキ又ハ前項ノ申立ナキモ猶必要ナリト認ムル  
トキハ學齡兒童若クハ學齡兒童ヲ保護スヘキ者ニ就キテ検査ヲ行フコトヲ得

市町村長ハ本條第二項ノ申立又ハ第二項ノ検査ニ依リ就學ヲ猶豫シ又ハ免除スルトキハ監督官  
廳ノ許可ヲ受クヘシ

第二十二條 學齡兒童ヲ保護スヘキ者ハ其學齡兒童ヲ市町村立小學校又ハ之ニ代用スル私立小學  
校ニ出席セシムヘシ若シ家庭又ハ其他ニ於テ尋常小學校ノ教科ヲ修メシメントスルトキハ其市  
町村長ノ許可ヲ受クヘシ

第二十三條 傳染病者クハ厭惡スヘキ疾病ニ罹ル兒童又ハ一家中ニ傳染病者アル兒童又ハ不良ノ  
行爲アル兒童又ハ課業ニ堪ヘサル兒童等ハ小學校ニ出席スルコトヲ許サス  
前項ニ關スル規則ハ府縣知事之ヲ定ム

第二十四條 學齡兒童ノ就學及家庭教育等ニ關スル規則ハ府縣知事之ヲ定メ文部大臣ノ許可ヲ受  
クヘシ

第四章 小學校ノ設置

第二十五條 各市町村ニ於テ其市町村内ノ學齡兒童ヲ就學セシムルニ足ルヘキ尋常小學校ヲ設置  
ス

町村組合ニシテ組合會ヲ設ケ其町村一切ノ事務ヲ共同處分スルモノハ本令ニ關シテハ之ヲ一町  
村ト同視ス

第二十六條 市ニ於テ設置スヘキ尋常小學校ノ校數並位置ハ府縣知事其市ノ意見ヲ聞キ之ヲ定ム  
ヘシ

町村ニ於テ設置スヘキ尋常小學校ノ校數並位置ハ郡長其町村ノ意見ヲ聞キ之ヲ定メ府縣知事ノ  
許可ヲ受クヘシ

第二十七條 郡長ハ一町村ノ資力其町村ニ相當スヘキ尋常小學校設置ノ負擔ニ堪ヘスト認定スル  
場合ニ於テハ其町村ヲシテ尋常小學校設置ノ爲他ノ町村ト學校組合ヲ設ケシメ及其學校組合ニ  
於テ設置スヘキ尋常小學校ノ校數並位置ヲ定ムヘシ

第二十八條 郡長ハ一町村内ノ就學スヘキ學齡兒童ノ數一尋常小學校ヲ構成スルニ足ラスト認定  
スル場合又ハ一町村内ノ就學スヘキ學齡兒童ノ數尋常小學校ヲ構成スルニ足ルモ道路ノ遠隔者  
クハ困難ナルカ爲適度ノ通學路程内ニ於テ一尋常小學校ヲ構成スルニ足ルヘキ數ヲ得ルコト能  
ハスト認定スル場合ニ於テハ左ノ例ニ依ルヘシ

一 其町村ヲシテ尋常小學校設置ノ爲他ノ町村ト學校組合ヲ設ケシメ及其學校組合ニ於テ設置  
スヘキ尋常小學校ノ校數並位置ヲ定ムヘシ

二 其町村ヲシテ其町村内ノ就學スヘキ學齡兒童ノ全部若クハ一部ノ教育事務ヲ他町村又ハ町

村學校組合若クハ其區ニ委託セシムヘシ

郡長ハ町村ノ一部ニシテ前項ノ事情アルモノ道路ノ遠隔若クハ困難ナルカ爲其兒童ヲシテ其町

村ノ尋常小學校ニ通學セシムルコト能ハサル事情アリト認定スル場合ニ於テハ前項ノ例ニ依ル

ヘシ 郡長ハ町村學校組合ニシテ前項ノ事情アリト認定スル場合ニ於テハ本條第一項第二ノ例ニ依ル

ヘシ

第二十九條 郡長ハ第二十七條及第二十八條ニ依リ町村學校組合ヲ設ケシムルトキハ關係町村及

郡參事會ノ意見ヲ聞キ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

其學校組合ニ於テ設置スヘキ尋常小學校ノ校數並位置ヲ定ムルトキモ亦同シ

郡長ハ第二十八條ニ依リ兒童教育事務ヲ委託セシムルトキハ關係町村町村學校組合及郡參事會

ノ意見ヲ聞キ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

第三十條 府縣知事ハ市ニ於テ設置スヘキ尋常小學校數校アルトキハ市内ノ一區若クハ數區ニ

對シ又ハ市ヲ分畫シテ數區トナシ其一區若クハ數區ニ對シ小學校設置ニ關スル負擔ノ爲其使用

スヘキ小學校ヲ指定スルコトヲ得

郡長ハ町村若クハ町村學校組合ニシテ左ノ場合ニ該當スルモノアルトキ其他必要ノ事情アルト

キハ町村内若クハ町村學校組合内ノ一區若クハ數區ニ對シ又ハ町村若クハ町村學校組合ヲ分畫

シテ數區トナシ其一區若クハ數區ニ對シ小學校設置ニ關スル負擔若クハ兒童教育事務委託ノ爲

其使用スヘキ小學校ヲ指定スルコトヲ得

一 町村若クハ町村學校組合ニ於テ設置スヘキ尋常小學校數校アルトキ

二 町村内若クハ其一部内又ハ町村學校組合ノ一部内ノ就校スヘキ兒童ノ全部若クハ一部ノ教

育事務ヲ他町村又ハ町村學校組合若クハ其區ニ委託スルコトヲ要スル場所數箇所アルトキ

三 町村若クハ町村學校組合ニ於テ設置スヘキ尋常小學校ト其一部内ノ兒童ノ全部若クハ一部

ノ教育事務ヲ他町村又ハ町村學校組合若クハ其區ニ委託スルコトヲ要スル場所アルトキ

本條第一項ノ處分ヲナシ又ハ之ヲ止ムルトキハ關係市及區ノ意見ヲ聞クヘシ

本條第二項ノ處分ヲナシ又ハ之ヲ止ムルトキハ關係町村町村學校組合及區ノ意見ヲ聞キ府縣知

事ノ許可ヲ受クヘシ

第三十一條 郡長ハ第二十八條第一項ノ事情アルモノ同項ニ依ルコトヲ得スト認定スルトキハ府縣

知事ノ許可ヲ受ケ其町村ヲシテ尋常小學校ノ設置又ハ兒童教育事務ノ委託ニ關ル義務ヲ免レン

ムルコトヲ得

郡長ハ第二十八條第二項若クハ第三項ノ事情アルモノ同項ニ依ルコトヲ得スト認定スルトキハ府

縣知事ノ許可ヲ受ケ其町村若クハ町村學校組合ヲシテ其一部ニ關シテハ尋常小學校ノ設置又ハ

兒童教育事務ノ委託ニ關ル義務ヲ免レンシムルコトヲ得

本條ノ場合ニ於テモ町村若クハ町村學校組合ハ特別ノ事情アルトキハ猶郡長ノ許可ヲ受ケテ尋

常小學校ヲ設スルコトヲ得其小學校ノ位置ハ其町村若クハ町村學校組合ニ於テ之ヲ定メ郡長ノ

許可ヲ受クヘシ

第三十二條 郡長ハ町村學校組合ヲ解カシムルトキハ關係町村及郡參事會ノ意見ヲ聞キ府縣知事

ノ許可ヲ受クヘシ

郡長ハ町村内若クハ其一部内又ハ町村學校組合ノ一部内ノ就學スヘキ學齡兒童ノ全部若クハ一部ノ教育事務ヲ他町村又ハ町村學校組合若クハ其區ニ委託セシムルコトヲ止ムルトキハ關係町村町村學校組合及區ノ意見ヲ聞キ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

第三十三條 町村ハ一町村限りノ負擔ヲ以テ尋常小學校ヲ設置スルニ比シ猶優等ナル尋常小學校ヲ得ヘキ場合又ハ其費用ヲ輕減シ得ヘキ場合ニ於テハ數町村ノ協議ニ依リ郡長ノ許可ヲ受ケテ學校組合ヲ設ケ其學校組合ニ相當スル尋常小學校ヲ設置スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ設置スヘキ尋常小學校ノ校數並位置ハ其學校組合ヲ設クルノ協議ヲナスノ際併セテ之ヲ定メ郡長ノ許可ヲ受クヘシ

第三十四條 前條ノ町村學校組合ハ郡長ノ許可ヲ得ルニアラサレハ之ヲ解クコトヲ得ス

郡長ハ前條及本條ノ場合ニ於テ府縣知事ノ指揮ヲ受クヘシ

第三十五條 府縣知事ハ市内ニ私立尋常小學校アルトキハ其市立小學校ノ設置若クハ其一部ノ設備ヲ猶豫シ其私立小學校ヲ以テ之ニ代用セシムルコトヲ得

郡長ハ町村内若クハ町村學校組合内ニ私立尋常小學校アルトキハ其町村立小學校ノ設置若クハ其一部ノ設備又ハ兒童教育事務委託ノ事ヲ猶豫シ其私立小學校ヲ以テ之ニ代用セシムルコトヲ得

私立小學校代用ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第三十六條 市町村ハ府縣知事ノ許可ヲ受ケ高等小學校ヲ設置シ又ハ其區ヲシテ之ヲ設置セシムルコトヲ得

第三十七條 町村ハ數町村ノ協議ニ依リ郡長ノ許可ヲ受ケテ町村學校組合ヲ設ケ府縣知事ノ許可

ヲ受ケテ高等小學校ヲ設置スルコトヲ得

郡長ハ前項ノ場合ニ於テハ府縣知事ノ指揮ヲ受クヘシ

本條ノ學校組合ニ就キテハ第三十四條ヲ適用ス

第三十八條 第三十六條及第三十七條ノ規程ハ徒弟學校及實業補習學校ニ關シ之ヲ適用ス

第三十九條 第三十一條末項第三十三條第三十六條第三十七條及第三十八條ニ掲ケル小學校ノ廢止ハ其設立ノ例ニ依ルヘシ

第四十條 市町村ハ幼稚園圖書館盲啞學校其他小學校ニ類スル各種學校等ヲ設置スルコトヲ得

此場合ニ於テハ第三十六條第三十七條及第三十九條ノ規程ヲ適用ス

第四十一條 私立ノ小學校幼稚園圖書館盲啞學校其他小學校ニ類スル各種學校等ノ設置ハ其設立者ニ於テ府縣知事ノ許可ヲ受ケ其廢止ハ之ヲ府縣知事ニ上申スヘシ

第四十二條 第四十條及第四十一條ノ學校等ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第五章 小學校ニ關スル府縣郡市町村ノ負擔及授業料

第四十三條 市町村立小學校ノ設置ニ關ル市町村及町村學校組合並區ノ負擔ノ概目左ノ如シ

一 校舍校地校具體操場農業練習場ノ供給及支持

二 小學校教員ノ俸給旅費等

三 小學校ニ關スル諸費

第四十四條 市町村立小學校ニ就學スル兒童ヲ保護スヘキ者ハ授業料規則ニ依リ授業料ヲ納ムヘシ

授業料ハ市町村ニ屬スル收入トス

一家ノ兒童同時ニ數名就學スルトキハ授業料ヲ減スルコトヲ得  
市町村長ハ兒童ヲ保護スヘキ者貧窮ナル場合ニ於テハ授業料ノ全額若クハ一部ヲ免除スヘシ  
授業料ハ物品若クハ勞力ヲ以テ之ニ代フルヲ許スコトヲ得

授業料規則ハ府縣知事之ヲ定メ文部大臣ノ許可ヲ受クヘシ

第四十五條 郡長ハ町村學校組合ニ於テ設置スヘキ尋常小學校數校アルトキハ學校組合内ノ某町  
村ヲシテ其數校中ノ一校若クハ若干校ノ設置ヲ一町村限り負擔セシムルコトヲ得

郡長ハ第二十八條ニ依リ町村學校組合ヲシテ兒童教育事務ヲ委託セシムルトキハ其學校組合内  
某町村ヲシテ其委託ノ事ヲ一町村限り負擔セシムルコトヲ得

本條ノ處分ヲナシ又ハ之ヲ止ムルトキハ關係町村及町村學校組合ノ意見ヲ聞キ府縣知事ノ許可  
ヲ受クヘシ

第四十六條 局長ニ於テ町村學校組合ノ資力其學校組合ニ相當スル尋常小學校設置ノ負擔ニ堪ヘ  
スト認定シ又ハ町村學校組合ノ一部タル町村ノ資力其學校組合費用ノ負擔ニ堪ヘスト認定スル  
トキハ郡ハ郡費ヲ以テ其學校組合若クハ町村ニ相當ノ補助ヲ與フヘシ

前項ノ認定ニ就キテハ郡ハ郡參事會ノ意見ヲ聞キ府縣知事ノ指揮ヲ受クヘシ

第四十七條 郡長ニ於テ第二十七條ノ事情アルモ同條ニ依ルコトヲ得スト認定スルトキハ郡ハ郡  
費ヲ以テ其町村ニ相當ノ補助ヲ與フヘシ

前項ノ認可ニ就キテハ郡長ハ郡參事會ノ意見ヲ聞キ府縣知事ノ指揮ヲ受クヘシ

第四十八條 府縣知事ニ於テ市ノ資力其市ニ相當スル尋常小學校設置ノ負擔ニ堪ヘスト認定スル  
トキハ府縣ハ府縣費ヲ以テ其市ニ相當ノ補助ヲ與フヘシ

前項ノ認定ニ就キテハ府縣知事ハ府縣參事會ノ意見ヲ聞キ文部大臣ノ指揮ヲ受クヘシ

第四十九條 府縣知事ニ於テ郡ノ資力第四十六條又ハ第四十七條ノ補助ヲ負擔スルニ堪ヘスト認  
定スルトキハ府縣ハ府縣費ヲ以テ其郡ニ相當ノ補助ヲ與フヘシ

前項ノ認定ニ就キテハ府縣知事ハ府縣參事會ノ意見ヲ聞キ文部大臣ノ指揮ヲ受クヘシ

第五十條 區長並其代理者及學務委員ニ於テ國ノ教育事務ヲ執行スルカ爲ニ要スル費用ハ市町  
村若クハ町村學校組合ノ負擔トス但區長並其代理者及區ノ學務委員ニ關スルモノハ市町村會又  
ハ町村學校組合ノ議決ヲ以テ區ノ負擔トナスコトヲ得

第五十一條 郡視學ノ給料旅費退隱料等ハ郡ノ負擔トス其額及支給方法ハ郡會ノ決議ニ依リ府縣  
知事ノ許可ヲ受ケテ之ヲ定ムヘシ

第五十二條 小學校教員檢定委員及檢定ニ關スル費用ニシテ府縣ニ屬スルモノ並小學校教科用圖  
書審查委員ニ關スル費用ハ府縣ノ負擔トス

第六章 小學校長及教員

第五十三條 小學校ノ教員中小學校ノ某教科目ヲ教授スル者ヲ專科教員トシ其他ノ者ヲ本科教員  
トス

小學校ノ教員中小學校ノ教科目ヲ補助教授シ又ハ一時教授スル者ヲ准教員トシ其他ノ者ヲ正教  
員トス

第五十四條 小學校ノ教員ハ小學校教員免許狀ヲ有スル者タルヘシ

第五十五條 小學校教員免許狀ヲ得ルニハ檢定ニ合格スルコトヲ要ス  
檢定ハ府縣ニ小學校教員檢定委員ヲ置キ之ヲ施行ス但某種ノ小學校教員ノ檢定ハ文部省ニ於テ

之ヲ施行ス

檢定委員ノ組織權限檢定ノ科目方法受檢者ノ資格教員免許狀教員候補者等ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第五十六條 小學校長及教員ノ任用解職其他進退ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第五十七條 市町村立小學校長及教員ノ名稱及待遇法ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第五十八條 市町村立小學校長及教員ノ任用解職ハ府縣知事之ヲ行フ

第五十九條 (二十六年勅令第二百六十號ヲ以テ第一項ヨリ三項マテヲ削除ス)

市町村立小學校長ハ府縣知事其學校ノ教員中ニ就キテ之ヲ兼任スルモノトス

第六十條 市町村立小學校教員ノ給料額及旅費額ノ標準並給料旅費其他諸給與ノ支給方法ハ府

縣知事ニ於テ之ヲ規定シ文部大臣ノ許可ヲ受クヘシ

前項ノ給料額及旅費額標準ノ範圍内ニ於テ教員ニ交付スヘキ給料及旅費ノ額ハ市參事會又ハ町

村長ノ意見ヲ聞キ府縣知事之ヲ確定ス

市町村立小學校教員ノ給料ノ若干分ハ土地ノ使用又ハ物品ヲ以テ之ヲ換給スルコトヲ得但其步

合ハ府縣知事ニ於テ之ヲ規定シ文部大臣ノ許可ヲ受クヘシ

前項ニ依リ換給スル土地ノ使用又ハ物品ノ價格ハ市町村ノ申出ニ依リ監督官廳之ヲ確定ス其確

定シタル價格ハ監督官廳ニ於テ必要ナリト認ムルトキハ何時ニテモ之ヲ訂正スルコトヲ得又監

督官廳ハ前項ノ換給ヲ適當ナラスト認ムルトキハ之ヲ許ササルコトヲ得

第六十一條 小學校長及教員ノ職務及服務規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第六十二條 市町村立小學校教員ハ學務委員ニ任セラレタルトキハ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第六十三條 小學校長及教員ハ兒童ニ體罰ヲ加フルコトヲ得ス

第六十四條 市町村立小學校長及教員職務ヲ粗略ニシ若クハ職務上遵奉スヘキ指命ニ違背シ又ハ

體面ヲ汚辱スルノ行爲アルトキハ府縣知事懲戒處分ヲ行フヘシ其處分ハ譴責罰俸免職免許狀褫

奪トス

私立小學校長及教員ニシテ前項ノ行爲アルトキハ其情狀ニ依リ府縣知事ニ於テ其業務ヲ停止シ

又ハ免許狀ヲ褫奪スヘシ

免職若クハ業務停止又ハ免許狀褫奪ノ處分ニ不服アルモハ十四日以内ニ文部大臣ニ訴願スルコ

トヲ得

市町村立小學校長及教員ノ懲戒處分ニ關スル規則並私立小學校長及教員ノ業務停止及免許狀褫

奪ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第六十五條 小學校教員禁錮以上ノ刑ニ處セラレ又ハ信用若クハ風俗ヲ害スル罪ヲ犯シテ罰金ノ

刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレタルトキハ其職ヲ失ヒ免許狀ヲ褫奪セラレルモノトス

第七章 管理及監督

第六十六條 郡ニ郡視學一名ヲ置キ府縣知事之ヲ任免ス

郡視學ハ府縣稅ヲ以テ支辨スル郡吏員ト同一ノ待遇ヲ受ケルモノトス

第六十七條 郡視學ハ郡長ノ指揮命令ヲ受ケテ郡内ノ教育事務ヲ監督ス

第六十八條 府縣知事ハ郡ノ申出ニ依リ特ニ郡視學ヲ置カサルコトヲ得此場合ニ於テハ府縣知事

ハ府縣稅ヲ以テ支辨スル郡吏員ノ一名ニ命シテ郡視學ノ名義ヲ以テ其職務ヲ行ハシム

第六十九條 郡視學ニ對スル懲戒處分ハ官吏懲戒例ニ依リ府縣知事之ヲ行フ

第七十條 市町村長ハ市町村ニ屬スル國ノ教育事務ヲ管掌シ市町村立小學校ヲ管理ス但學校如

若クハ首席教員ノ管理ニ屬スル事務ハ之ヲ監督ス

第七十一條 市町村長ニ對スル懲戒處分ニシテ國ノ教育事務取扱ニ關スルモノニ就キテハ市制第

百二十四條町村制第二百二十八條ヲ適用ス

第七十二條 市ハ教育事務ノ爲市制第六十一條ニ依リ學務委員ヲ置クヘシ但市會ノ議決ニ依ルノ

限ニ在ラス

委員ニハ市立小學校男教員ヲ加フヘキモノトス其數ハ委員總數ノ四分之一ニ下ルコトヲ得ス

委員中教員ヨリ出ツル者ハ市長之ヲ任免ス

第七十三條 市ノ學務委員ハ市ニ屬スル國ノ教育事務ニ就キ市長ヲ補助ス

第七十四條 府縣知事ハ市ノ區長及其代理者ヲシテ市長ノ機關トナリ其指揮命令ヲ受ケテ區ニ屬

スル國ノ教育事務ヲ補助執行セシムルコトヲ得

第七十五條 市ハ教育事務ノ爲市條例ノ規程ニ依リ市内ノ區ニ學務委員ヲ置クコトヲ得

委員ニハ市立小學校男教員ヲ加フヘキモノトス

第七十六條 府縣知事ハ前條ノ學務委員ヲシテ其區ニ屬スル國ノ教育事務ニ就キ市長區長並其代

理者ヲ補助セシムルコトヲ得

第七十七條 市ノ區長及其代理者並第七十二條及第七十五條ノ學務委員ニ對スル懲戒處分ニシテ

國ノ教育事務取扱ニ關スルモノニ就キテハ左ノ例ニ依ル

一 市制第六十四條第五ノ規程ニ依リ市長ニ於テ懲戒處分ヲ行フ此場合ニ於テハ市制第二百三十

四條第二項第一ノ規程ヲ適用ス

二 市制第二百二十四條第一項及第二項第二第三第四ノ規程ヲ適用ス

第七十八條 第七十三條及第七十六條ノ事務執行ニ關スル市長區長及其代理者並學務委員ノ關係

及其他必要ナル規則ハ府縣知事之ヲ定ムルコトヲ得

第七十九條 町村ハ教育事務ノ爲町村制第六十五條ニ依リ學務委員ヲ置クヘシ但町村會ノ議決ニ

依ルノ限ニ在ラス

委員ニハ町村立小學校男教員ヲ加フヘキモノトス其數ハ委員總數ノ四分之一ニ下ルコトヲ得ス

委員中教員ヨリ出ツル者ハ町村長之ヲ任免ス

第八十條 町村ノ學務委員ハ町村ニ屬スル國ノ教育事務ニ就キ町村長ヲ補助ス

第八十一條 府縣知事ハ町村ノ區長及其代理者ヲシテ町村長ノ機關トナリ其指揮命令ヲ受ケテ區

ニ屬スル國ノ教育事務ヲ補助執行セシムルコトヲ得

第八十二條 町村ハ教育事務ノ爲町村條例ノ規程ニ依リ町村内ノ區ニ學務委員ヲ置クコトヲ得

委員ニハ町村立小學校男教員ヲ加フヘキモノトス

第八十三條 府縣知事ハ前條ノ學務委員ヲシテ其區ニ屬スル國ノ教育事務ニ就キ町村長區長並其

代理者ヲ補助セシムルコトヲ得

第八十四條 町村ノ區長及其代理者並第七十九條及第八十二條ノ學務委員ニ對スル懲戒處分ニシ

テ國ノ教育事務取扱ニ關スルモノニ就キテハ左ノ例ニ依ル

一 町村制第六十八條第五ノ規程ニ依リ町村長ニ於テ懲戒處分ヲ行フ此場合ニ於テハ町村制第

百二十八條第二項第一ノ規程ヲ適用ス

二 町村制第二百二十八條第一項及第二項第二第三第四ノ規程ヲ適用ス

第八十五條 第八十條及第八十三條ノ事務執行ニ關スル町村長區長及其代理者並學務委員ノ關係及其他必要ナル規則ハ府縣知事之ヲ定ムルコトヲ得

第八十六條 町村學校組合ハ教育事務ノ爲條例ノ規程ニ依リ學務委員ヲ置クヘシ  
町村學校組合ハ教育事務ノ爲條例ノ規程ニ依リ學校組合内ノ區ニ學務委員ヲ置クコトヲ得

本條ノ委員ニハ町村立小學校男教員ヲ加フヘキモノトス

第八十七條 町村學校組合ノ學務委員ハ町村學校組合ニ屬スル國ノ教育事務ニ就キ組合長ヲ補助ス

府縣知事ハ町村學校組合内ノ區ノ學務委員ヲシテ區ニ屬スル國ノ教育事務ニ就キ組合長ヲ補助セシムルコトヲ得

第八十八條 第八十六條ノ學務委員ニ對スル懲戒處分ニシテ國ノ教育事務取扱ニ關スルモノニ就キテハ左ノ例ニ依ル

- 一 町村制第六十八條第五ノ規程ニ依リ組合長ニ於テ懲戒處分ヲ行フ此場合ニ於テハ町村制第一百二十八條第二項第一ノ規程ヲ適用ス
- 二 町村制第一百二十八條第一項及第二項第二第三第四ノ規程ヲ適用ス

第八十九條 第八十七條ノ事務執行ニ關スル組合長及學務委員ノ關係及其他必要ナル規則ハ府縣知事之ヲ定ムルコトヲ得

第九十條 特別ノ事情アル町村若クハ町村學校組合ニ於テハ府縣知事ノ許可ヲ受ケ學務委員ヲ置カサルコトヲ得

第九十一條 文部大臣ハ私立小學校ニシテ法律命令ノ規程ニ戾ルモノアルトキハ府縣知事ニ命シ

テ之ヲ閉鎖セシムルコトヲ得

第九十二條 前諸條ニ掲グル教育事務トハ專ラ小學校教育ノ範圍ニ屬スル事務ヲ謂フ

第八章 附則

第九十三條 本令ハ市制町村制ヲ施行シタル府縣ニ施行スルモノトス其施行ノ時期ハ府縣知事ノ具申ニ依リ文部大臣之ヲ定ム

第九十四條 幼稚園圖書館盲啞學校其他小學校ニ類スル各種學校等ニ就キテハ本令ノ規程ヲ適用スルコトヲ得但尋常小學校設置ノ義務就學ノ義務等ニ關スル規程ハ此限ニ在ラス

第九十五條 本令ニ依ラスシテ授與シタル小學校教員免許狀ハ仍其效力ヲ有スルモノトス但正教員准教員ノ別ハ文部大臣之ヲ定ム

第九十六條 明治十九年四月勅令第十四號小學校令其他本令ニ抵觸スル成規ハ本令施行ノ府縣ニ於テ其施行ノ時期ヨリ總テ之ヲ廢止ス

◎小學校設備準則 (明治二十四年四月文部省令第二號)

明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令第十九條ニ基キ小學校設備準則ヲ定ムルコト左ノ如シ

小學校設備準則

第一條 校地ハ日當リ好ク且成ルヘク開豁乾爽ナルヲ要ス

校地ハ喧鬧ニシテ授業ニ妨アル場所、危險ナル場所、道德上嫌忌スヘキ場所、停滯セル池水其他凡テ惡臭アリ若クハ衛生上ニ害アル蒸發氣ヲ生スル場所ニ接近スヘカラス



校地ヲ擇フニ方リ衛生上ノ利害明ナラサルトキハ醫師ノ意見ヲ聞クコトヲ要ス

第二條 校舍ニハ

天皇陛下及

皇后陛下ノ御影並教育ニ關スル 勅語ノ謄本ヲ奉置スヘキ場所ヲ一定シ置クヲ要ス

第三條 校舍ハ成ルヘク平屋造ナルヲ要ス若シ二階造ナルトキハ成ルヘク幼年生ノ教室ヲ階下ニ

置クコトヲ要ス

校舍ヲ新築スルニ方リテハ將來増加スヘキ生徒ノ員數ヲ見積リテ成ルヘク將來ノ増築ニ便宜ナル計畫ヲ爲シ又ハ成ルヘク豫備ノ教室ヲ設クルヲ要ス

第四條 各教室ノ大サハ其内ニ入ルヘキ机並座席ノ數、大サ及排置方ニ應シテ之ヲ定メ生徒四人

ニ付凡一坪ヨリ小ナルヘカラス

各教室ハ一教員ノ同時ニ教授シ得ヘキ員數ノ生徒ヲ容ルルヨリ大ナルヘカラス

第五條 校舍ハ生徒ノ帽、傘、雨衣、足駄等ヲ置クヘキ場所ヲ備ルヲ要ス

校舍ハ成ルヘク講堂、物置等ヲ備フルヲ要ス

裁縫ノ科目ヲ設クル小學校ハ男女ヲ區別シテ教授セサル場合ニ於テハ該科目ノ爲成ルヘク特別

ノ教室ヲ其校舍ニ備フルヲ要ス

手工又ハ工科ヲ設クル小學校ノ校舍ハ工作ノ實地練習ノ爲特別ノ教室ヲ備フルヲ要ス

大ナル小學校ノ校舍ハ圖書標本等ヲ置クカ爲成ルヘク特別ノ場所ヲ備フルヲ要ス

第六條 體操場ハ成ルヘク校舍ニ傍フテ備フルヲ要ス

第七條 農業練習所ハ成ルヘク校舍ニ遠サカラサルヲ要ス

第八條 校舍ニハ堀井戸又ハ水道等ニ依リテ飲料水ヲ供給スルノ備アルヲ要ス

第九條 便所ハ校舍外ニ於テ男女ヲ區別シテ備フルヲ要ス

第十條 校舍ニ傍フテ成ルヘク學校長若クハ首席教員ノ住居及菜園ヲ設クルヲ要ス

第十一條 校具ハ甲乙ノ二種トス

甲種ノ校具ハ専ラ教授ノ用ニ充ツル器具トス尋常小學校ニ於テハ假名ノ掛圖、教員用教科書、學

校所在府縣ノ地圖、日本地圖、地球儀、定木、兩脚規、指數器、算盤、度量衡、黑板、黑板拭、白墨、水

入、庶物指教用具ヲ備フルヲ常例トシ高等小學校ニ於テハ教員用教科書、學校用所在府縣ノ地

圖、日本地圖、萬國地圖、地球儀、定木、兩脚規、算盤、度量衡、黑板、黑板拭、白墨、水入、博物標本、

理化器械、圖畫ノ手本、圖畫用具、裁縫用具、樂器、體操器械ヲ備フルヲ常例トシ其他ハ學校ノ等

位、學級ノ編制又ハ教科若クハ教科目ノ種類ニ應シテ備フヘキモノトス

乙種ノ校具ハ國旗、門札、生徒用及教員用ノ机及腰掛(腰掛ヲ用フル學校ニ限ル)時計、諸帳簿、硯

箱並附屬品、紙、書籍棚、戸棚、日用品其他學校ニ備付クルヲ必要トスル物件ニシテ甲種ノ校具ニ

屬セサルモノトス

第十二條 生徒用ノ机及腰掛ノ構造ハ生徒ノ衛生上ニ害ナカラシメ及生徒ノ監視上等ニ便利ナラ

シムルヲ要ス

第十三條 第二條ニ掲グル場所、校舍ノ内部外部ノ壁、校舍ノ床、階梯、出入口、廊下、屋根、教室ノ

天井、戸、梁、窓、便所、體操場、農業練習場、教員住居及井戸等ノ構造並教室天井ノ高サ、教室ノ幅

及長サノ制限、暖室、通風、採光ノ方法等ニ關スル必要ノ事項ニ就キテハ地方ノ情況ヲ斟酌シテ

之ヲ規定スルヲ要ス

第十四條 校具ハ構造排置等ニ關スル必要ノ事項ニ就キテハ地方ノ情況ヲ斟酌シテ之ヲ規定スルヲ要ス

第十五條 校舍、校地、校具等ノ掃除及保存ニ關スル必要ノ事項ニ就キテハ地方ノ情況ヲ斟酌シテ之ヲ規定スルヲ要ス

第十六條 設備規則中ノ條規ニシテ校舍ノ新築、校具ノ新調等ニ際スルニアラサレハ適用シ難キモノハ其時ヲ待テ之ニ依ラシムヘキモノトス但猶豫スヘカラサル事情アル場合ニ於テハ此限ニアラス

### 市制町村制ヲ施行セサル地方ノ小學教育規程

(明治二十五年四月勅令第四十號)

朕市制町村制ヲ施行セサル地方ノ小學教育規程ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

市制町村制ヲ施行セサル地方ノ小學教育規程

第一條 明治二十三年勅令第二百十五號小學校令中小學校ノ設置小學校ニ關スル府縣郡ノ負擔並郡視學務委員區長及其代理者ニ關スル條規ヲ除キ其他ノ條規ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ左ノ例ニ依リ之ヲ施行ス

一 明治二十三年勅令第二百十五號小學校令ノ規程ニ依リ雖キ場合アルトキハ北海道廳長官府縣知事ニ於テ文部大臣ノ許可ヲ受ケ特別ノ處分ヲナスコトヲ得

二 明治二十三年勅令第二百十五號小學校令ニ規定スル府縣知事ノ職務ハ北海道廳長官之ヲ行ヒ郡長ノ職務ハ郡長ヲ置カサル地方ニ於テハ島司區長又ハ之ニ準スヘキ者之ヲ行ヒ市長町

村長若クハ市參事會ノ職務ハ島司區長戶長又ハ之ニ準スヘキ者之ヲ行フヘシ

第二條 區町村ハ北海道廳長官府縣知事ノ指定スル區域及位置ニ於テ一小學校若クハ數小學校ヲ設置スヘシ

第三條 本令施行ノ時期ハ北海道廳長官府縣知事ノ具申ニ依リ文部大臣之ヲ定ム

第四條 明治十九年勅令第十四號小學校令其他本令ニ牴觸スル成規ハ本令施行ノ地方ニ於テ其施行ノ時期ヨリ總テ之ヲ廢止ス

### 補習科ノ教科目及修業年限

(明治二十四年十一月文部省令第八號)

明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令第九條ニ基キ補習科ノ教科目及修業年限ヲ定ムルコト左ノ如シ

補習科ノ教科目及修業年限

第一條 尋常小學校補習科ノ教科目ハ修身、讀書、作文、習字及算術トス

土地ノ情況ニ依リ日本地理、日本歴史、理科、圖畫、手工ノ一科目若クハ數科目ヲ加ヘ女兒ノ爲メニハ裁縫ヲ加フルモノトス

第二條 高等小學校補習科ノ教科目ハ修身、讀書、作文、習字及算術トス女兒ノ爲メニハ裁縫ヲ加フルモノトス

土地ノ情況ニ依リ日本地理、日本歴史、外國地理、理科、圖畫、幾何、外國語、農業、商業、手工ノ一科目若クハ數科目ヲ加フルコトヲ得

第三條 補習科ノ修業年限ハ三箇年以内トス  
第四條 第一條又ハ第二條ニ依リ補習科ノ教科目ヲ加ヘ若クハ第三條ニ依リ補習科ノ修業年限ヲ定ムルニハ市町村立小學校ニ就キテハ其市參事會又ハ町村長ニ於テ私立小學校ニ就キテハ其設立者ニ於テ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

### 隨意科目等ニ關スル規則

(明治二十四年十一月文部省令第十號)

明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令第十條ニ基キ隨意科目等ニ關スル規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

隨意科目等ニ關スル規則

第一條 尋常小學校ノ教科目中體操、日本地理、日本歴史、圖畫、唱歌、手工及裁縫ハ隨意科目トナスコトヲ得

第二條 高等小學校ノ教科目中外國地理、唱歌、幾何ノ初歩、外國語、農業、商業及手工ハ隨意科目トナスコトヲ得

第三條 補習科ノ教科目ハ修身ヲ除ク外總テ隨意科目トナスコトヲ得

第四條 小學校ノ教科目中唱歌、體操等ハ其學校長ニ於テ兒童ノ身體該教科目ヲ學習シ能ハスト認ムルトキハ之ヲ課セサルコトヲ得

第五條 第一乃至第三條ニ依リ小學校ノ某教科目ヲ隨意科目トナスニハ市町村立小學校ニ就キテハ其市參事會又ハ町村長ニ於テ私立學校ニ就キテハ其設立者ニ於テ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

### 小學校教則大綱

(明治二十四年十一月文部省令第十一號)

明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令第十二條ニ基キ小學校教則ノ大綱ヲ定ムルコト左ノ如シ

小學校教則大綱

第一條 小學校ニ於テハ小學校令第一條ノ旨趣ヲ遵守シテ兒童ヲ教育スヘシ

徳性ノ涵養ハ教育上最モ意ヲ用フヘキナリ故ニ何レノ教科目ニ於テモ道德教育國民教育ニ關連スル事項ハ殊ニ留意シテ教授センコトヲ要ス

知識技能ハ確實ニシテ實用ニ適センコトヲ要ス故ニ常ニ生活ニ必要ナル事項ヲ選ヒテ之ヲ教授シ反覆練習シテ應用自在ナラシメンコトヲ務ムヘシ

各教科目ノ教授ハ其目的及方法ヲ誤ルコトナク互ニ相連絡シテ補益センコトヲ要ス

第二條 修身ハ教育ニ關スル 勅語ノ旨趣ニ基キ兒童ノ良心ヲ啓培シテ其徳性ヲ涵養シ人道實踐ノ方法ヲ授クルヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ孝悌、友愛、仁慈、信實、禮敬、義勇、恭儉等實踐ノ方法ヲ授ケ殊ニ尊王愛國ノ志氣ヲ養ハシメ兒童ヲ誘キテ風俗品位ノ純正ニ趨カシメテ注意スヘシ

高等小學校ニ於テハ前項ノ旨趣ヲ擴メテ陶冶ノ功ヲ堅固ナラシメンコトヲ務ムヘシ

女兒ニ在リテハ殊ニ貞淑ノ美德ヲ養ハシメテ注意スヘシ

修身ヲ授クルニハ近易ノ俚諺及嘉言善行等ヲ例證シテ勸戒ヲ示シ教員身自ラ兒童ノ模範トナリ

兒童ヲシテ浸潤薰染セシメントトヲ要ス

第三條 讀書及作文ハ普通ノ言語並日常須知ノ文字、文句、文章ノ讀ミ方、綴リ方及意義ヲ知ラシメ適當ナル言語及字句ヲ用ヒテ正確ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ養ヒ兼テ智德ヲ啓發スルヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ近易適切ナル事物ニ就キ平易ニ談話シ其言語ヲ練習シテ假名ノ讀ミ方、書キ方、綴リ方ヲ知ラシメ次ニ假名ノ短文及近易ナル漢字交リノ短文ヲ授ク漸ク進ミテ讀書作文ノ教授時間ヲ別チ讀書ハ假名文及近易ナル漢字交リ文ヲ授ケ作文ハ假名文、近易ナル漢字交リ文、日用書類等ヲ授クヘシ

高等小學校ニ於テハ讀書ハ普通ノ漢字交リ文ヲ授ケ作文ハ漢字交リ文及日用書類ヲ授クヘシ讀書作文ヲ授クル際單語、短句、短文等ヲ書取ラシメ若クハ改作セシメテ假名及語句ノ用法ニ熟セシムヘシ

讀本ノ文章ハ平易ニシテ普通ノ國文ノ模範タルヘキモノナルヲ要ス故ニ兒童ニ理會シ易クシテ其心情ヲ快活純正ナラシムルモノヲ採ルヘク又其事項ハ修身、地理、歴史、理科其他日常ノ生活ニ必須ニシテ教授ノ趣味ヲ添フルモノタルヘシ

作文ハ讀書又ハ其他ノ教科目ニ於テ授ケタル事項、兒童ノ日常見聞セル事項及處世ニ必須ナル事項ヲ記述セシメ行文平易ニシテ旨趣明瞭ナラシメントトヲ要ス

言語ハ他ノ教科目ノ教授ニ於テモ常ニ注意シテ練習セシメントトヲ要ス

第四條 習字ハ通常ノ文字ノ書キ方ヲ知ラシメ運筆ニ練熟セシムルヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ片假名及平假名、近易ナル漢字交リノ短句、通常ノ人名、苗字、物名、地名等

ノ日用文字及日用書類ヲ習ハシムヘシ

高等小學校ニ於テハ前項ノ事項ヲ擴メ更ニ日常適切ノ文字ヲ増シ又日用書類ヲ習ハシムヘシ

漢字ノ書體ハ尋常小學校ニ於テハ行書若クハ楷書トシ高等小學校ニ於テハ楷書行書草書トス習字ヲ授クル際殊ニ姿勢ヲ整ヘ執筆及運筆ヲ正シクシ字行ハ整正ヲ尙ヒ運筆ハ務メテ速カナラシメントトヲ要ス

他ノ教科目ノ教授ニ於テ文字ヲ書カシムルコトアルトキハ亦常ニ其字形及字行ヲ正シクセシメントトヲ要ス

第五條 算術ハ日常ノ計算ニ習熟セシメ兼テ思想ヲ精密ニシ傍ラ生業上有益ナル知識ヲ與フルヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ初メハ十以下ノ數ノ範圍内ニ於ケル計ヘ方及加減乗除ヲ授ケ漸ク數ノ範圍ヲ擴メテ萬以下ノ數ノ範圍内ニ於ケル加減乗除及通常ノ小數ノ計ヘ方ヲ授クヘシ

初年ヨリ漸ク度量衡貨幣及時刻ノ制ヲ授ケ之ヲ日常ノ事物ニ應用シテ其計算ニ習熟セシムヘシ尋常小學校ニ於テ筆算若クハ珠算ヲ用ヒ又ハ筆算珠算ヲ併セ用フルハ土地ノ情況ニ依ルヘシ

高等小學校ニ於テハ筆算ヲ用ヒ初メハ度量衡貨幣及時刻ノ計算ヲ練習セシメ漸ク進ミテハ簡易ナル比例問題ト通常ノ分數小數トヲ併セ授ケ又學校ノ修業年限ニ應シ更ニ稍複雑ナル比例問題及日常適切ノ百分算ヲ授ケ土地ノ情況ニ依リテハ開平開立及簡易ナル求積若クハ日用簿記ノ概略ヲ授ケ又ハ珠算ヲ用ヒテ加減乗除ヲ授クヘシ但尋常小學校ニ於テ珠算ノミヲ學ヒタル者ニハ

最初筆算ヲ用ヒテ加減乗除ヲ授クヘシ

算術ヲ授クルニハ理會精密ニ運算習熟シテ應用自在ナラシメントトヲ務メ又常ニ正確ナル言語

ナ用ヒテ運算ノ方法及理由ヲ説明セシメ殊ニ暗算ニ熟達セシメントト要ス  
算術ノ問題ハ他ノ教科目ニ於テ授ケタル事項ヲ適用シ又ハ土地ノ情況ヲ斟酌シテ日常適切ノ  
ノヲ選フヘシ

第六條 日本地理及外國地理ハ日本ノ地理及外國地理ノ大要ヲ授ケテ人民ノ生活ニ關スル事項ヲ  
理會セシメ兼テ愛國ノ精神ヲ養フヲ以テ要旨トス

尋常小學校ノ教科ニ日本地理ヲ加フルトキハ郷土ノ地形方位等兒童ノ日常目撃セル事物ニ就キ  
テ端緒ヲ開キ漸ク進ミテ本邦ノ地形、氣候、著名ノ都會、人民生業等ノ概略ヲ授ケ更ニ地球ノ形  
狀、水陸ノ別其他重要ニシテ兒童ノ理會シ易キ事項ヲ知ラシムヘシ

高等小學校ニ於テハ日本地理ハ前項ニ準シテ稍詳ニ之ヲ授ケ更ニ地球ノ運動、晝夜四季ノ原由  
ヲ理會セシメ外國地理ハ大洋五洲五帶ノ別、各大洲ノ地形、氣候、產物、人種及支那朝鮮其他本邦  
トノ關係ニ於テ重要ナル諸國ノ地理ノ概略ヲ授ケ又學校ノ修業年限ニ應シ既ニ授ケタル日本地  
理ヲ複習シテ稍詳ニ人民ノ生活ニ關スル重要ナル事項ヲ授ケ兼テ簡易ナル經濟上ニ關係ナリ  
會セシムヘシ

地理ヲ授ケルニハ實地ノ觀察ニ基キ又地球儀地圖寫眞等ヲ示シ兒童ノ熟知セル事物ニ依リ比較  
類推セシメテ確實ナル知識ヲ得シメ又常ニ歷史上ノ事實ニ連絡セシメントト要ス

第七條 日本歴史ハ本邦國體ノ大要ヲ知ラシメテ國民タルノ志操ヲ養フヲ以テ要旨トス  
尋常小學校ノ教科ニ日本歴史ヲ加フルトキハ郷土ニ關スル史談ヨリ始メ漸ク建國ノ體制、皇統  
ノ無窮、歷代天皇ノ盛業、忠良賢哲ノ事蹟、國民ノ武勇、文化ノ由來等ノ概略ヲ授ケテ國初ヨ  
リ現時ニ至ルマテノ事歴ノ大要ヲ知ラシムヘシ

高等小學校ニ於テハ前項ニ準シテ稍詳ニ國初ヨリ現時ニ至ルマテノ事歴ヲ授クヘシ

日本歴史ヲ授クルニハ成ルヘク圖畫ヲ示シ兒童ヲシテ當時ノ實狀ヲ想像シ易カラシメ人物ノ言  
行等ニ就キテハ之ヲ修身ニ於テ授ケタル格言等ニ照ラシテ正邪是非ヲ辨別セシメントト要ス

第八條 理科ハ通常ノ天然物及現象ノ觀察ヲ精密ニシ其相互人生ニ對スル關係ノ大要ヲ理會セシ  
メ兼テ天然物ヲ愛スルノ心ヲ養フヲ以テ要旨トス

最初ハ主トシテ學校所在ノ地方ニ於ケル植物動物礦物及自然ノ現象ニ就キ兒童ノ目撃シ得ル事  
實ヲ授ケ就中重要ナル植物動物ノ形狀構造及生活發育ノ狀態ヲ觀察セシメテ其大要ヲ理會セシ  
メ又學校ノ修業年限ニ應シ更ニ植物動物ノ相互及人生ニ對スル關係通常ノ物理上化學上ノ現象  
通常兒童ノ目撃シ得ル器械ノ構造作用等ヲ理會セシメ兼テ人身生理及衛生ノ大要ヲ授クヘシ

理科ニ於テハ務メテ農業工業其他人民ノ生活上ニ適切ナル事項ヲ授ケ殊ニ植物動物等ヲ授ケル  
際之ヲ以テ製スル重要ナル人工物ノ製法效用等ノ概略ヲ知ラシムヘシ

理科ヲ授クルニハ實地ノ觀察ニ基キ若クハ標本模型圖畫等ヲ示シ又ハ簡單ナル試驗ヲ施シ明瞭  
ニ理會セシメントト要ス

第九條 圖畫ハ眼及手ヲ練習シテ通常ノ形體ヲ看取シ正シク之ヲ畫クノ能ヲ養ヒ兼テ澄匠ヲ練  
リ形體ノ美ヲ辨知セシムルヲ以テ要旨トス

尋常小學校ノ教科ニ圖畫ヲ加フルトキハ直線曲線及其單形ヨリ始メ時時直線曲線ニ基キタル諸  
形ヲ工夫シテ之ヲ畫カシメ漸ク進ミテハ簡單ナル形體ヲ畫カシムヘシ  
高等小學校ニ於テハ初メハ前項ニ準シ漸ク進ミテハ諸般ノ形體ニ移リ實物若クハ手本ニ就キテ  
畫カシメ又時時自己ノ工夫ヲ以テ圖案セシメ兼テ簡易ナル用器畫ヲ授クヘシ

圖畫ヲ授クルニハ他ノ教科目ニ於テ授ケタル物體及兒童ノ日常目撃セル物體中ニ就キテ之ヲ畫カシメ兼テ清潔ヲ好ミ綿密ヲ尙フノ習慣ヲ養ハントトナ要ス

第十條 唱歌ハ耳及發聲器ヲ練習シテ容易キ歌曲ヲ唱フコトヲ得シメ兼テ音樂ノ美ヲ辨知セシメ徳性ヲ涵養スルヲ以テ要旨トス

尋常小學校ノ教科ニ唱歌ヲ加フルトキハ通常譜表ヲ用ヒシテ容易キ單音唱歌ヲ授クヘシ

高等小學校ニ於テハ利メハ前項ニ準シ漸ク譜表ヲ用ヒテ單音唱歌ヲ授クヘシ

歌詞及樂譜ハ成ルヘク本邦古今ノ名家ノ作ニ係ルモノヨリ之ヲ撰ヒ雅正ニシテ兒童ノ心情ヲ快活純美ナラシムルモノタルヘシ

第十一條 體操ハ身體ノ成長ヲ均齊ニシテ健康ナラシメ精神ヲ快活ニシテ剛毅ナラシメ兼テ規律ヲ守ルノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ最初適宜ノ遊戲ヲナサシメ漸ク普通體操ヲ加ヘ男兒ニハ便宜兵式體操ノ一部ヲ授クヘシ

高等小學校ニ於テハ男兒ニハ主トシテ兵式體操ヲ授ケ女兒ニハ普通體操若クハ遊戲ヲ授クヘシ土地ノ情況ニ依リテハ體操ノ教授時間ノ一部若クハ教授時間ノ外ニ於テ適宜ノ戶外運動ヲナサシメ又夏季ニ於テハ水泳ヲ授クルコトアルヘシ

體操ノ教授ニ依リテ習成シタル姿勢ハ常ニ之ヲ保タシメントトナ要ス

第十二條 裁縫ハ眼及手ヲ練習シテ通常ノ衣服ノ縫方及裁方ニ習熟セシムルヲ以テ要旨トス

尋常小學校ノ教科ニ裁縫ヲ加フルトキハ運針法ヨリ始メテ簡易ナル衣服ノ縫方ヲ授ケ又便宜通常ノ衣服ノ繕ヒ方等ヲ授クヘシ

高等小學校ニ於テハ初メハ前項ニ準シ漸ク通常ノ衣服ノ縫方裁方ヲ授クヘシ

裁縫ノ品類ハ日常所用ノモノヲ撰ヒ之ヲ授クル際用具ノ種類、衣類ノ保存方及洗濯方等ヲ教示シ常ニ節約利用ノ習慣ヲ養ハントトナ要ス

第十三條 手工ハ眼及手ヲ練習シテ簡易ナル物品ヲ製作スルノ能ヲ養ヒ勤勞ヲ好ムノ習慣ヲ長スルヲ以テ要旨トス

尋常小學校ノ教科ニ手工ヲ加フルトキハ紙、絲、粘土、麥蘖等ヲ用ヒテ簡易ナル細工ヲ授クヘシ高等小學校ノ教科ニ手工ヲ加フルトキハ紙、粘土、木、竹、銅線、鐵葉、鉛等ヲ用ヒテ簡易ナル細工ヲ授クヘシ

手工ノ品類ハ成ルヘク有用ナルモノヲ撰ヒ之ヲ授クル際其材料及用具ノ種類等ヲ教示シ常ニ節約利用ノ習慣ヲ養ハントトナ要ス

第十四條 高等小學校ノ教科ニ幾何ノ初歩ヲ加フルトキハ簡易ナル線角面體ノ性質及種類ヲ知ラシメ尙進ミテハ三角形ノ同形類形及勾股弦ノ關係等ヲ理會セシムヘシ

幾何ノ初歩ヲ授クルニハ先ツ器具家屋地形等ヲ觀察セシメ更ニ其模型若クハ圖ヲ示シ兒童ヲシテ之ヲ畫キ其尺度又ハ角度ヲ測定比較シテ其性質關係ヲ知ラシメ專ラ實驗ニ依リテ證明シ又既ニ授ケタル事項ヲ應用シ諸種ノ線形等ヲ構成シテ其度量ヲ計算セシメ之ヲ實地ニ應用スルノ能ヲ養ハントトナ要ス

第十五條 高等小學校ノ教科ニ外國語ヲ加フルハ將來ノ生活上其知識ヲ要スル兒童ノ多キ場合ニ限ルモノトシ讀方、譯解、習字、書取、會話、文法及作文ヲ授ケ外國語ヲ以テ簡易ナル會話及通信等ヲナスコトヲ得シムヘシ

外國語ヲ授クルニハ常ニ其發音及文法ニ注意シ正シキ國語ヲ用ヒテ譯解セシメントトヲ要ス

第十六條 高等小學校ノ教科ニ農業ヲ加フルトキハ地理理科等ノ教授ニ連絡シテ土壤、水利、肥料、農具、耕耘、栽培、養蠶、養畜等ニ關シ土地ノ情況ニ緊切ニシテ兒童ノ理會シ易キ事項ヲ授ケ便宜之ヲ實習セシメテ農業ノ趣味ヲ長シ兼子テ節約利用、勤勉儲蓄ノ習慣ヲ養ハントトヲ要ス

第十七條 高等小學校ノ教科ニ商業ヲ加フルトキハ算術地理等ノ教授ニ連絡シテ商店、會社、賣買、金融、運送、保險等ニ關スル重要ナル事項ニシテ兒童ノ理會シ易キモノヲ撰ヒ習慣及法令等ニ基キテ之ヲ授ケ又簡易ナル商用簿記ヲ授ケヘシ

第十八條 府縣知事ハ第二條乃至第十七條ニ掲グル範圍内ニ於テ學級ノ編制及修業年限ニ應シ便宜各教科目教授ノ程度ヲ規定スルヲ要ス

第十九條 尋常小學校ノ教授ト高等小學校ノ教科トナ一校ニ併セ置クトキハ兩教科ヲ連絡セシメシカ爲メ便宜各教科目教授ノ程度ヲ斟酌スルコトヲ得

第二十條 小學校長若クハ首席教員ハ小學校教則ニ從ヒ其小學校ニ於テ教授スヘキ各教科目ノ教授細目ヲ定ムヘシ

第二十一條 小學校ニ於テ兒童ノ學業ヲ試驗スルハ専ラ學業ノ進歩及習熟ノ度ヲ檢定シテ教授上ノ參考ニ供シ又ハ卒業ヲ認定スルヲ以テ目的トスヘシ

第二十二條 小學校長若クハ首席教員ハ修業年限ノ終リニ於テ兒童ノ學業ノ成績ヲ考ヘ小學校教則ニ定メタル課程ヲ完了セリト認定スルトキハ卒業證書ヲ授與スヘシ

第二十三條 補習科ハ尋常小學校若クハ高等小學校ニ於テ兒童ノ既ニ學習シタル事項ヲ練習補充シ殊ニ之ヲ實地ニ應用スルノ法ヲ授ケテ處世ニ資セシムルヲ以テ要旨トス

補習科ノ程度ハ尋常小學校若クハ高等小學校ノ教科ノ程度ヲ標準トシ兼子テ人民ノ生活上必須ナル事項ヲ加ヘ授ケンコトヲ要ス

補習科ニ於テ授ケル事項ハ總テ實際ノ業務ト密接ノ關係ヲ有スルモノタルヘシ故ニ農工商等其地方ノ生業ニ最モ適切ナルモノヲ撰ヒテ之ヲ授ケヘシ

第二十四條 補習科ノ教授時間ハ成ルヘク實際ノ業務ニ從事スル者ノ便ヲ圖リ夜間休業日又ハ其他通常ノ教授時間外ニ於テ之ヲ定ムヘシ

### 學級編制等ニ關スル規則

(明治二十四年十一月文部省令第十二號)

明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令第十三條ニ基キ學級編制等ニ關スル規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

學級編制等ニ關スル規則

第一條 小學校ニ於テハ此規則ニ依リ學級ヲ編制シ及教員ヲ配置スヘシ

全校兒童ヲ一學級ニ編制スルモノ之ヲ單級ノ學校トシニ學級以上ニ編制スルモノ之ヲ多級ノ學校トス

小學校ニ於テ全校兒童ヲ二學級以上ニ編制スル場合ニ於テハ兒童ノ學力及年齡ヲ斟酌シ學級ヲ別ツヘシ

第二條 市町村立尋常小學校ニ於テ學級ヲ編制スルニハ左ノ例ニ依ルヘシ  
一 全校兒童ノ數七十八未滿ナルトキハ之ヲ一學級ニ編制スヘシ

二 全校児童ノ數七十人以上百四十人未滿ナルトキハ之ヲ二學級ニ編制スヘシ但七十人以上百

人未滿ナルトキハ之ヲ一學級ニ編制スルコトヲ得

三 全校児童ノ數百四十人以上ナルトキハ一學級児童ノ數平均凡五十乃至七十人ノ割合ヲ以テ  
適宜學級ヲ編制スヘシ

四 同學年ノ女兒ノ數一學級ヲ組織スルニ足ルトキハ該學年ノ男女學級ヲ別ツヘシ但第一學年  
及第二學年ニ於テハ此限ニ在ラス

前項第二款本文及第三款ノ場合ニ於テハ一學級児童ノ數百人ヲ超ユルコトヲ得ス

第三條 市町村立高等小學校ニ於テ學級ヲ編制スルニハ左ノ例ニ依ルヘシ

一 全校児童ノ數六十人未滿ナルトキハ之ヲ一學級ニ編制スヘシ

二 全校児童ノ數六十人以上百二十八人未滿ナルトキハ之ヲ二學級ニ編制スヘシ但六十人以上八  
十人未滿ナルトキハ之ヲ一學級ニ編制スルコトヲ得

三 全校児童ノ數百二十人以上ナルトキハ一學級児童ノ數平均四十人乃至六十八ノ割合ヲ以テ  
適宜學級ヲ編制スヘシ

四 全校女兒ノ數一學級ヲ組織スルニ足ルトキハ男女學級ヲ別ツヘシ

前項第二款本文及第三款ノ場合ニ於テハ一學級児童ノ數八十人ヲ超ユルコトヲ得ス

第四條 市町村立尋常小學校ニ於テ教員ヲ配置スルニハ左ノ例ニ依ルヘシ

一 單級ノ學校ニ於テハ全校児童ノ數七十人未滿ナルトキハ本科正教員一人ヲ置キ七十人以上  
ナルトキハ本科正教員一人及本科准教員(補助教授スル者)一人ヲ置クヘシ

二 多級ノ學校ニ於テハ兒童ノ數六十人未滿ナルトキハ本科正教員一人ヲ置キ六十人以上  
ナルトキハ本科正教員一人及本科准教員(補助教授スル者)一人ヲ置クヘシ

三 前二款ノ場合ニ於テ本科教員ヲ置ク外適宜專科教員ヲ置クコトヲ得

第五條 市町村立尋常小學校ニ於テ教員ヲ配置スルニハ左ノ例ニ依ルヘシ

一 單級ノ學校ニ於テハ全校児童ノ數六十人未滿ナルトキハ本科正教員一人ヲ置キ六十人以上  
ナルトキハ本科正教員一人及本科准教員(補助教授スル者)一人ヲ置クヘシ

二 多級ノ學校ニ於テハ兒童ノ數六十人未滿ノ學級ニ就キテハ本科正教員一人ヲ置キ六十人未  
滿ノ學級ニ就キテハ本科正教員一人及本科准教員(補助教授スル者)一人ヲ置クヘシ

三 前二款ノ場合ニ於テ本科教員ヲ置ク外適宜專科教員ヲ置クコトヲ得

第六條 私立小學校ニ於テハ適宜學級ヲ編制スヘシ但一學級児童ノ數尋常小學校ニ於テハ百人高  
等小學校ニ於テハ八十人ヲ超ユルコトヲ得ス

第七條 私立小學校ニ於テハ一學級ニ就キテ本科正教員一人ヲ置クヘシ但一學級児童ノ數尋常小  
學校ニ於テ七十人以上高等小學校ニ於テ六十人以上ナルトキハ更ニ本科准教員(補助教授スル  
者)ヲ置クヘシ

第八條 多級ノ學校ニ於テハ教科目ノ種類ニ依リ一人ノ本科正教員數學級又ハ其一部ノ兒童ヲ合  
シテ同時ニ教授スルコトヲ得

單級又ハ多級ノ學校ニ於テ專科教員ハ某教科目ニ限リ一學級若クハ數學級又ハ其一部ヲ教授  
スルコトヲ得



第九條 尋常小學校ニ於テハ左ノ場合ニハ全校ノ兒童ヲ二部ニ區分シ其一部ノ教授了ル後他ノ一

部ヲ教授スルコトヲ得

一 全校兒童ノ數七十人以上百人未滿ニシテ本科正教員一人及本科准教員(補助教授スル者)一人ヲ置クコト能ハサルトキ

二 全校兒童ノ數百人以上百四十人未滿ニシテ本科正教員二人ヲ置クコト能ハサルトキ

三 同時ニ全校ノ兒童ヲ容ルルニ足ルヘキ教室ヲ設クルコト能ハサルトキ

前項ノ場合ニ於テハ毎日ノ教授時間ヲ各部三時トナシ若クハ年長ノ部ヲ四時、年少ノ部ヲ二時トナスヘシ

第十條 教室狹隘等ノ爲メ又ハ特別ノ事情アルカ爲メ市町村立小學校ニ於テ第二條乃至第五條ノ

例ニ依リ難キトキ又ハ前條ノ場合アルトキハ其市町村ニ於テ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

特別ノ事情アルカ爲メ私立小學校ニ於テ前條ノ場合アルトキハ其設立者ニ於テ府縣知事ノ許可

ヲ受クヘシ

第十一條 小學校ニ於テ三學級以上ヲ設クルトキハ學校長ヲ置クヘシ

第十二條 市町村立小學校ニ於テ第二條第三條ニ依リ學級ヲ編制シ若クハ變更セントスルトキハ

第二條第一項第一款及第三條第一項第一款ノ場合ヲ除ク外其市町村ニ於テ府縣知事ノ許可ヲ受

クヘシ(明治三十年一月文部省令第一號ヲ以テ本條追加)

市町村立小學校補習科ノ教授時間ヲ通常教授時間内ニ於テ定ムルトキハ明治二十四年文部省令第

●學級ノ編製ニ關スル件 (明治三十年一月文部省令第二號)

市町村立小學校補習科ノ教授時間ヲ通常教授時間内ニ於テ定ムルトキハ明治二十四年文部省令第

十二號學級編制等ニ關スル規則ニ準シ地方長官ノ許可ヲ受ケテ學級ヲ編制シ及教員ヲ配置スヘシ

其變更ノ場合ニ於ケルモ亦同シ

地方長官ハ特別ノ事情アリト認ムルトキハ一學級兒童數ノ制限内ニ於テ補習科ノ兒童ヲ正教科ノ

學級ニ合セ教授スルコトヲ許スコトヲ得

●小學校令施行方 (明治二十四年一月勅令第五號)

朕小學校令ノ施行ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十三年勅令第二百十五號小學校令ハ其全部施行シ難キ事狀アル地方ニ限り府縣知事ノ具狀

ニ依リ文部大臣ノ指揮ヲ以テ其一部ヨリ漸次施行スルコトヲ得

●從來ノ市町村立小學校一時存續方

(明治二十四年三月勅令第十九號)

朕明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令ノ施行ニ際シ從來ノ市町村立小學校一時存續ノ

件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 從來ノ市町村立尋常小學校ハ明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令施行ノ時期

ニ違シタル後ニ於テモ一時之ヲ存續シ左ノ各款ニ依リ處分スヘシ

- 一 新ニ尋常小學校ノ校數並位置ヲ指定セラレタル市町村ト從來ノ尋常小學校設置區域ト其性質前後同一ナル場合ニ於テハ從來ノ市町村立尋常小學校ニシテ其位置ニ新ニ指定セラレタル市町村立尋常小學校ノ位置ト同一ナルモノハ之ヲ繼續維持スヘシ

二 新ニ尋常小學校ノ校數並位置ヲ指定セラレタル市町村ト從來ノ尋常小學校設置區域ト其性質前後同一ナル場合ニ於テハ從來ノ市町村立尋常小學校ニシテ不用ニ屬スヘキモノハ學齡兒童ヲ就學セシムルノ準備新ニ整フノ時ニ及ヒ之ヲ廢スヘシ

三 兒童教育事務ヲ他ニ委託スヘキコトヲ命セラレタル町村ト從來ノ尋常小學校設置區域ト其性質前後同一ナル場合ニ於テハ第二款ノ例ニ依ルヘシ

四 新ニ尋常小學校ノ校數並位置ヲ指定セラレ及兒童教育事務ヲ他ニ委託スヘキコトヲ命セラレタル町村ト從來ノ尋常小學校設置區域ト其性質前後同一ナル場合ニ於テハ第一款第二款ノ例ニ依ルヘシ

五 聯合町村ヨリ成立スル尋常小學校設置區域及其市町村ノ區域ト同一ナラサル尋常小學校設置區域ニ於テ設置スル尋常小學校ハ其區域ノ學齡兒童教育ノ事業ヲ引繼クヘキ市町村、町村學校組合又ハ市町村内若クハ町村學校組合内ノ區ニ於テ學齡兒童ヲ就學セシムルノ準備整フノ時ニ及ヒ之ヲ廢スヘシ

第二條 市町村ニ於テ設置スル從來ノ高等小學校ハ其市町村會ノ議決ニ依リ明治二十三年(十月)勅令第二百五號小學校令施行ノ時期ニ達シタル後ニ於テモ一時之ヲ存續シ其市町村ニ於テ同令第三十六條ノ手續ヲ經タル上之ヲ繼續維持スルコトヲ得

第三條 聯合町村ヨリ成立スル高等小學校設置區域及其他市町村ノ區域ト同一ナラサル高等小學校設置區域ニ於テ設置スル高等小學校ハ其町村聯合會又學區會ノ議決ニ依リ明治二十三年(十月)勅令第二百五號小學校令施行ノ時期ニ達シタル後ニ於テモ尙六箇月以内之ヲ存續スルコトヲ得

第四條 第一條乃至第三條ニ依リ一時存續スル小學校ニ係ル管理監督ノ事務ハ從來ノ職員ニ於テ從來ノ例ニ依リ擔任スヘシ

第五條 第一條乃至第三條ニ依リ一時存續スル小學校ニ係ル費用及第四條ノ事務ニ係ル費用ハ從來ノ小學校設置區域ニ於テ從來ノ例ニ依リ之ヲ負擔スヘシ

第六條 第一條第五款及第三條ニ依リ一時存續シタル小學校ニ係ル事務引續方等ニ關シテハ府縣知事之ヲ規定スルコトヲ得

第七條 本令ノ規程ニ依リ難キ場合ニ在テハ府縣知事ニ於テ文部大臣ノ許可ヲ經テ特別ノ處分ヲ爲スコトヲ得

◎幼稚園圖書館盲啞學校其他小學校ニ類スル各種學校及私立小學校等ニ關スル規則

(明治二十四年十一月文部省令第十八號)

明治二十三年(十月)勅令第二百五號小學校令第四十二條ニ基キ幼稚園圖書館盲啞學校其他小學校ニ類スル各種學校及私立小學校等ニ關スル規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

幼稚園圖書館盲啞學校其他小學校ニ類スル各種學校及私立小學校等ニ關スル規則

第一條 幼稚園保姆ハ女子ニシテ小學校教員タルヘキ資格ヲ有スル者又ハ其他府縣知事ノ免許ヲ得タル者トス

第二條 盲啞學校及各種學校教員ハ小學校教員タルヘキ資格ヲ有スル者又ハ其他府縣知事ノ免許ヲ

得タル者トス

第三條 市町村立幼稚園保母盲啞學校及各種學校長及教員ノ任用解職ハ府縣知事之ヲ行フヘシ

第四條 私立幼稚園保母盲啞學校各種學校長及教員ノ任用解職ハ其設立者ヨリ府縣知事ニ開申ス

ヘシ

第五條 府縣知事ニ於テ許可シタル幼稚園ノ保育規程盲啞學校及各種學校ノ教則教科用圖書ハ文

部大臣ニ開申スヘシ

第六條 私立小學校設立者ノ資格ハ府縣知事之ヲ定ムヘシ

第七條 小學校令第六十三條乃至第六十五條ノ規程ハ幼稚園保母盲啞學校及各種學校長及教員ニ

關シ之ヲ適用ス

第八條 小學校令第十四條第三項ノ規程ハ幼稚園圖書館盲啞學校及各種學校ニ關シ之ヲ適用ス

第九條 小學校令第十五條中祝日大祭日儀式ノ規程ハ幼稚園盲啞學校及各種學校ニ關シ之ヲ適用

ス

第十條 小學校令第七十條ノ規程ハ市町村立幼稚園圖書館盲啞學校及各種學校ニ關シ之ヲ適用ス

第十一條 小學校令第九十一條ノ規程ハ私立幼稚園圖書館盲啞學校及各種學校ニ關シ之ヲ適用ス

第十二條 幼稚園圖書館盲啞學校各種學校及私立小學校ノ設置廢止ニ關スル規則ハ府縣知事之ヲ

定ムヘシ

### 尋常師範學校附屬小學校規程

(明治二十四年十一月文部省令第二十六號)

尋常師範學校附屬小學校規程ヲ定ムルコト左ノ如シ但明治二十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

尋常師範學校附屬小學校規程

第一條 附屬小學校ハ明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令中小學校ノ本旨種類教科目

修業年限教則教授時間ノ制限教科用圖書祝日大祭日ノ儀式休業日補習科等ニ關スル規程ニ準據

スヘシ但教科目ノ加除補習科ノ設置廢止及修業年限ハ府縣知事之ヲ定メ文部大臣ノ許可ヲ受ク

ヘシ

第二條 附屬小學校ノ設備ハ管内最多數ノ小學校ノ設備ヲ例トシ本年(十一月)文部省令第十五號

小學校設備準則ニ準據シ府縣知事之ヲ定メ文部大臣ノ許可ヲ受クヘシ

第三條 附屬小學校ノ學級ノ編制等ハ管内最多數ノ小學校ノ學級ノ編制等ヲ例トシ本年(十一月)

文部省令第十二號小學校ノ學級編制ニ關スル規則ニ準據シ府縣知事之ヲ定メ文部大臣ノ許可ヲ

受クヘシ但單級ノ制ニ依リタル學級ハ必ス之ヲ設クルコトヲ要ス

第四條 附屬小學校ノ授業料規則ハ府縣知事之ヲ定メ文部大臣ノ許可ヲ受クヘシ但單級ニ編制シ

タル兒童ノ授業料ハ之ヲ徵收セサルモノトス

第五條 附屬小學校ノ教員ハ小學校教員タルヘキ資格ヲ具フルコトヲ要ス

### 私立小學校代用規則

(明治二十四年三月文部省令第一號)

明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令第三十五條ニ基キ私立小學校代用ニ關スル規則ヲ

定ムルコト左ノ如シ

私立小學校代用規則

第一條 市ハ其區域内ニアル私立尋常小學校ヲ以テ市立尋常小學校ノ設置若クハ其一部ノ設備ニ代用セントスルトキハ該私立小學校設立者ト協議ノ上府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ  
町村及町村學校組合ハ其區域内ニアル私立尋常小學校ヲ以テ町村立尋常小學校ノ設置若クハ其一部ノ設備又ハ兒童教育事務ノ委託ニ代用セントスルトキハ該私立小學校設立者ト協議ノ上郡長ノ許可ヲ受クヘシ

第二條 前條ニ依リ協議ヲ遂クヘキ事項概ネ左ノ如シ

一 代用ノ期限

二 代用私立小學校ニ於テ入學ヲ許スヘキ兒童ノ住スル區域

三 代用私立小學校ニ於テ入學ヲ許スヘキ兒童ノ定員

四 代用私立小學校ニ對スル補助金ノ給否及金額

五 其他府縣知事ニ於テ必要トスル事項

第一條ノ許可ヲ經タル後協議ノ事項ヲ變更セントスルトキハ其事項ニ就キ更ニ許可ヲ受クヘシ  
第三條 代用ノ期限ハ代用セントスル私立尋常小學校ノ修業年限ノ二倍ニ超過スルコトヲ得ス但期限滿ルノ後更ニ代用スルコトヲ得

第四條 私立尋常小學校ハ設立以來三箇年經過シテ教育上相應ノ成績アルモノニアラザレバ代用私立小學校タルコトヲ得ス

第五條 代用私立小學校設立者ハ左ノ場合ニ於テハ豫メ市町村若クハ町村學校組合ノ承認ヲ經ルコトヲ要ス  
一 小學校令第十一條第三項ニ依リ尋常小學校ノ修業年限ヲ改定セントスルトキ

二 小學校令第十一條第二項ノ許可ヲ受ケントスルトキ

三 多級ノ編制ヲ單級ノ編制ニ改メントスルトキ

四 學校ノ位置ヲ變更セントスルトキ

五 其他府縣知事ニ於テ必要トスル場合

第六條 代用私立小學校設立者ハ左ノ場合ニ於テハ豫メ市參事會町村長若クハ町村組合長ノ承認ヲ經ルコトヲ要ス  
一 小學校令第十一條第一項ニ依リ尋常小學校ノ教科目ヲ加除セントスルトキ

二 其他府縣知事ニ於テ必要トスル場合

第七條 代用私立小學校設立者ハ左ノ場合ニ於テハ豫メ市町村長若クハ町村組合長ノ承認ヲ經ルコトヲ要ス  
一 小學校令第十一條第三項ニ依リ尋常小學校ノ補習科ヲ設置廢止セントスルトキ

二 單級ノ編制ヲ多級ノ編制ニ改メントスルトキ

三 小學校令第十七條及第十八條ニ依リ尋常小學校ニ關シテ許可ヲ受ケントスルトキ

四 學校長教員ヲ任用解罷セントスルトキ

五 第二條第三ノ定員ニ滿タサル場合ニ於テ第二條第二ノ區域外ノ兒童ノ入學ヲ許サントスルトキ

六 其他府縣知事ニ於テ必要トスル場合

第八條 代用私立小學校設立者ニ於テ市町村長等ニ報告スヘキ事項ニ關シテハ府縣知事之ヲ規定ス